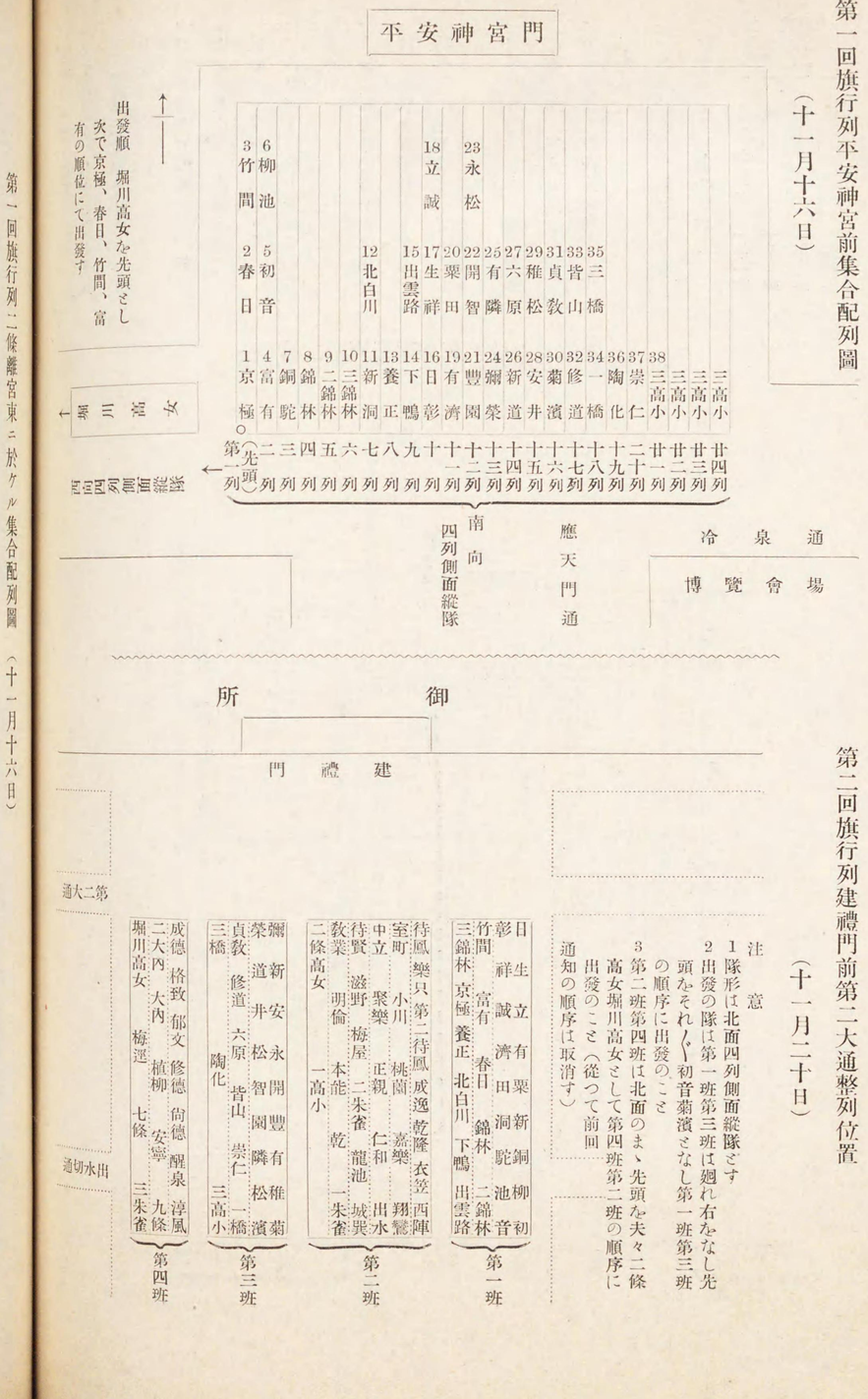
第一回旗行列平安神宮前集合配列圖

（十一月十六日）



第二回旗行列建禮門前第二大通整列位置

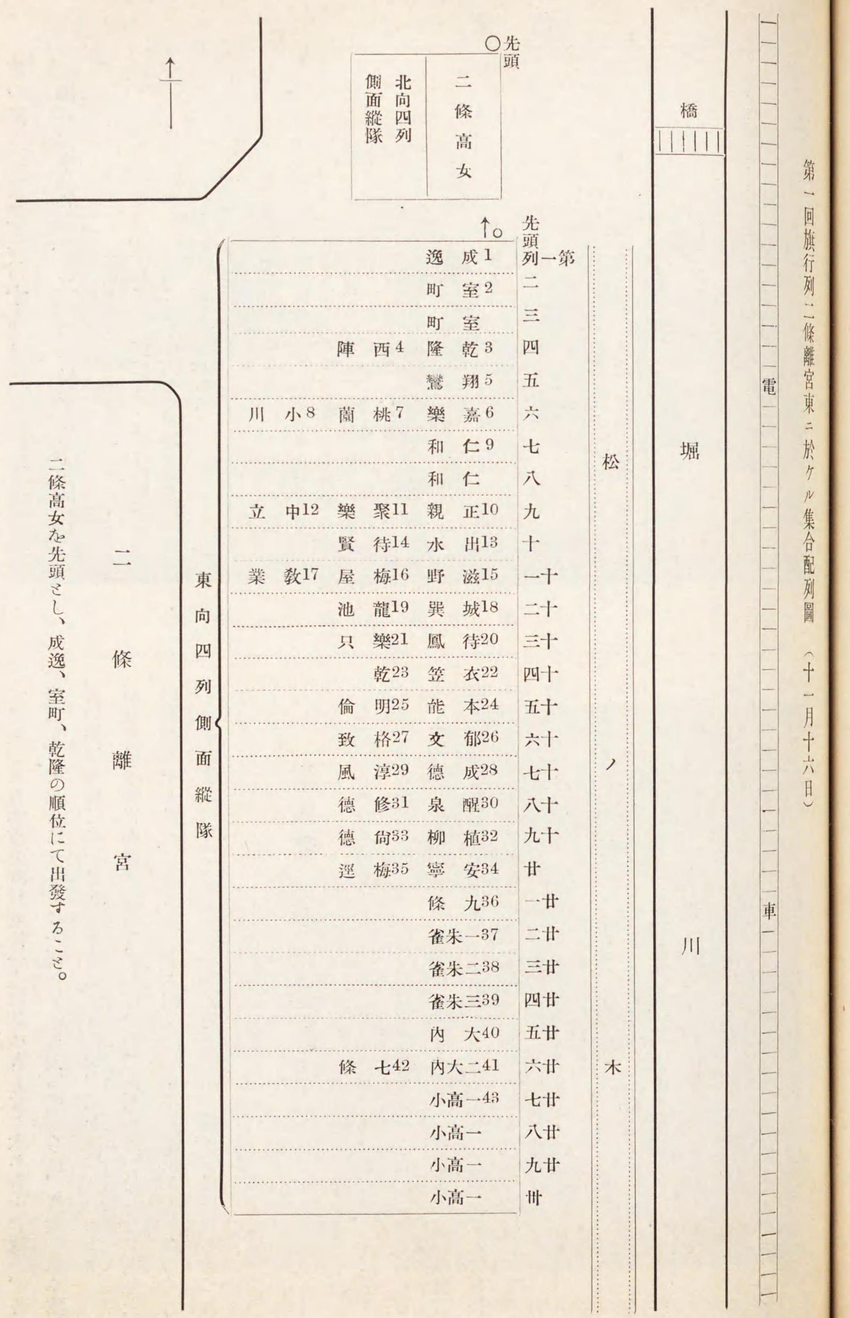
（十一月二十日）

注意

1 隊形は北面四列側面縦隊とす

2 出發の隊は第一班第三班は廻れ右をなし先頭をそれ〳〵初音菊濱となし第一班第三班の順序に出發のこと

3 第二班第四班は北面のまゝ先頭を夫々二條高女堀川高女として第四班第二班の順序に出發のこと（從つて前回通知の順序は取消す）



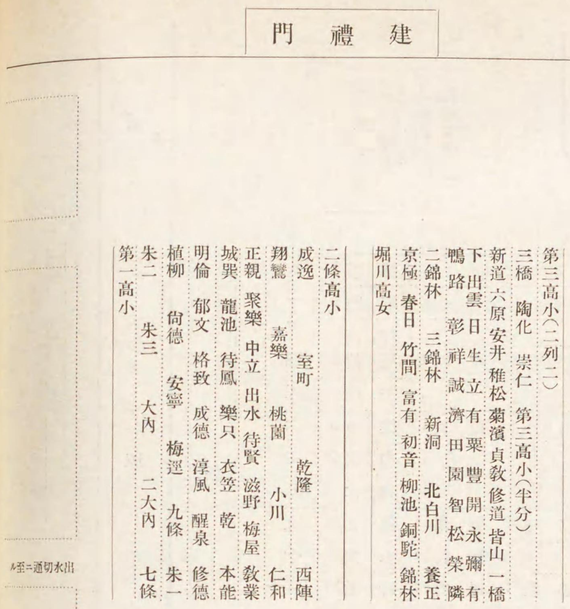
奉祝運動會（植物園）

同上

第一回旗行列（十一月十六日）

御苑内建禮門前第二大通ニ於ケル集合位置

注意
東班、西班、共に進行の順序に從ひ圖の如く北向き四列側面縱隊を作ること



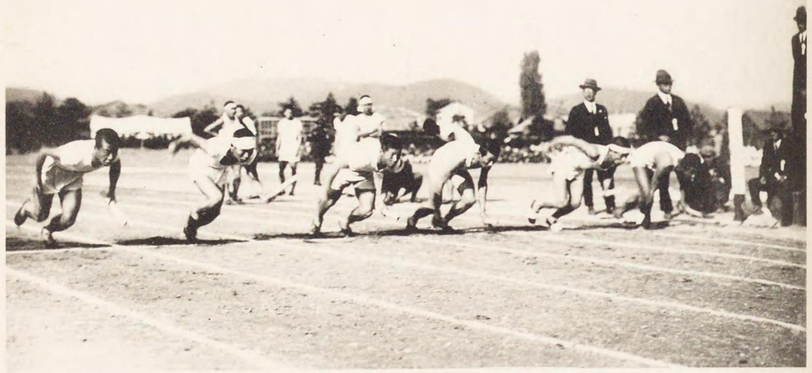
以上による本市の旗行列は一人の落伍者もなく大多數をきはめ、各沿道より御苑内に亙りては一面日章旗の波に埋められ、萬歳を唱ふ歡喜の聲は天地に轟くほどの大盛況なりしが、二十日當日の如きは兩陛下には神宮御親謁の際なりしも、特に内門を開かせられ紫宸殿上の高御座をも遙かに拜し得らるゝ程にして市民の赤誠を受けさせられしは眞に恐懼の極みにして、一同は更に聖恩の忝なさに感激しまつりたり。

第四節　奉祝運動會

本市が各教育機關を主體として開催せる奉祝大運動會は、早くより之が計畫實施の方法を考究し、市民奉祝の一表徵として意義あらしむべく工夫したりしが、十月初旬既に案成り、當日は畏くも　秩父宮殿下　同妃殿下の台臨を仰ぐことゝなりしを以て、益々緊張味を帶び、參加學校靑年團等の各代表者とも屢々打合せをなしたる上、次の要項によりて擧行したり。

一　計　畫

一、日　時　十一月二十五日午後一時より開始
二、場　所　大典記念京都植物園運動場
三、參加範圍
1市立小學校尋常科第六學年兒童各校男五〇名、女五〇名、計一〇〇名
但し錦林校は男子のみ一〇〇名、第二錦林は女子のみ一〇〇名



奉祝運動會（植物園）

同上

六學年兒童を有せざる學校は參加せず
高等小學校は男五〇名、女五〇名、計一〇〇名宛とす
以上合計 八、二〇〇名
2男子中等學校(二十一校)二、五〇〇名、外に選手九〇名十八校
内譯(別紙の通)
3女子中等學校(八校)三、一五〇名、外に選手四〇名四校
内譯(別紙の通)
4市聯合青年團(青年訓練所を含む)約一、〇〇〇名

二次第

秩父宮殿下竝同妃殿下御臨場
一、一同敬禮
一、プログラム捧呈
一、君ケ代奉唱
一、小學校合同體操
一、青年團 四〇〇米競走
一、男子中等學校 八〇〇米リレー豫選(二等迄)
A組 一商、農林、一工、三中、東寺中、桃中
B組 美工、大谷中、同志社中、東山中、二中、二工
C組 京都中、平安中、二商、師範、一中、實修
一、女子中等學校バスケットボール
A組 府二對桃師
B組 二條對府一
一、女子中等學校合同體操

第四節 奉祝運動會

一、小學校男子 八百米リレー決勝
一、同 女子 八百米リレー決勝
一、男子中等學校 八百米リレー決勝
一、男子中等學校合同體操
一、市長御禮言上
一、一同敬禮
兩殿下御退場 マーチ奏樂

男女中等學校體操配列表

番號	女中等	男中等	番號	女中等	男中等
一一	堀川		二六	同	同
一二	同		二七	同	農林
一三	同		二八	同	
一四	同		二九	同	同志社
一五	同		三〇	府一	
一六	同	實修	三一	同	
一七	同		三二	同	師範
一八	同		三三	同	
一九	同		三四	同	
二〇	二條	二商	三五	同	
二一	同		三六	同	
二二	同		三七	同	
二三	同		三八	同	
二四	同	立命	三九	同	
二五	同		四〇	同志女	

三合同體操

男子中等學校合同體操教材

順序	種目	始ノ姿勢	擧動	運動	擧動	回數
1	下肢直立	足側出擧踵臂上下伸				八 二

番號	女中等	男中等	番號	女中等	男中等
四一	同志女	大谷	五八	同	同
四二	同	同	五九	同	同
四三	同	美工	六〇	京都一中	
四四	同	一工	六一	同	
四五	同		六二	同	
四六	同	三中	六三	同	二中
四七	同		六四	同	
四八	同		六五	同	
四九	同	二工	六六	同	同
五〇	府二		六七	同	聖峰
五一	同	紫野	六八	同	
五二	同		六九	同	
五三	同	平安	七〇	戚安	
五四	同		七一	同	
五五	同		七二	同	
五六	同	一商	七三	同	
五七	同				

右整列に關する注意事項

イ、各列の整列線の先頭及後尾には校名の札を附す

ロ、第一合圖に依り控所より各校毎に敏捷に後部校名札の整列準備位置に就く

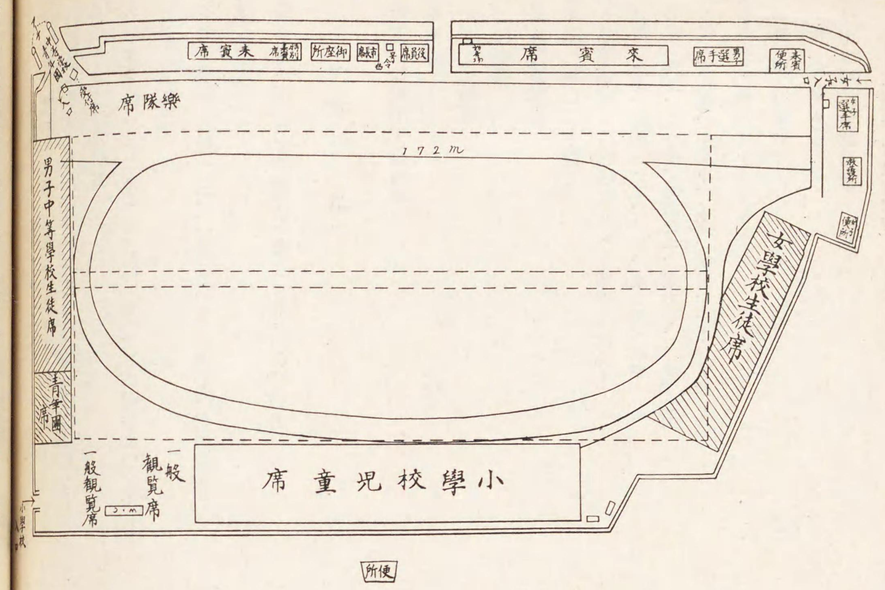
ハ、「標示生位置ニ―ッケ」の號令にて各別の標示生は駈歩にて前部校名札の位置に進む

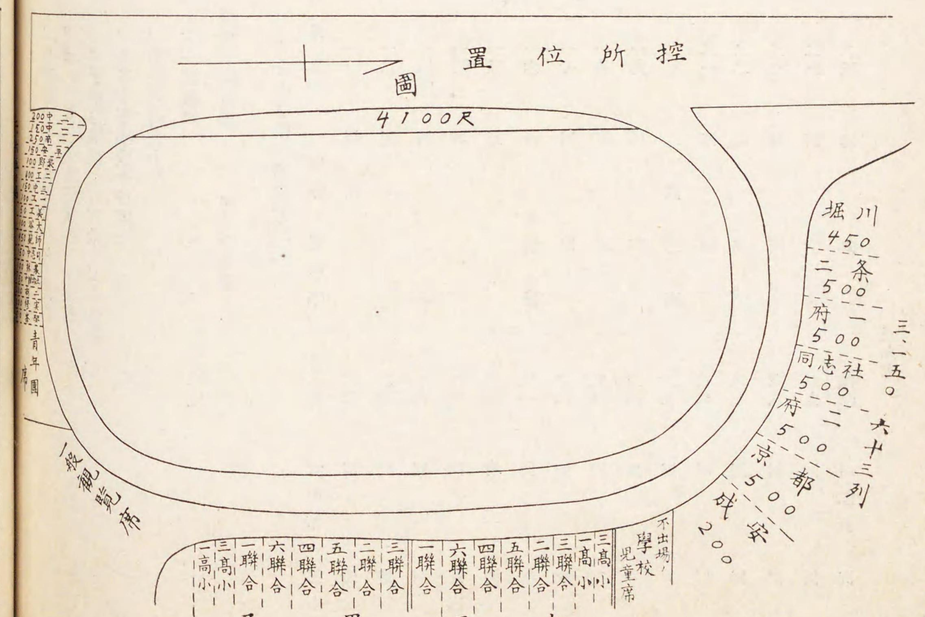
ニ、「前へ―進メ」の號令に依り歩調を取り（此間軍樂隊奏樂）各自の位置に進み「全隊―止レ」の號令ある迄足踏をなさしめたり（各人の距離二歩）

ホ、整頓の號令にて各列整頓す

順序	種目	始ノ姿勢	擧動	運動	擧動	回數
2	頭	手腰直立		頭前後屈及側轉	各々	四
3	胸背	開脚直立	一	臂側擧掌外及胸後屈體前下屈	伏立	四
4	腹	直立		臂立伏臥	伏立	二 三
5	體側	臂側擧開脚直立	一	片臂上擧片臂體側屈		四 二
6	跳躍	直立		臂側振上方跳		六 四
7	下肢	手腰直立		擧踵半屈膝		四 三
8	呼吸	直立		臂前上擧側下		二 三

奉祝大運動會場略圖





「附」各校選手は合同體操に加はることなく來場と共に選手章持參の上選手控所に集合のこと

男子中等學校合同體操實施上の注意

一、下肢の運動

注意1、各動作は平等調律を以て行ふ

2、呼稱を唱へて行ふ（八呼稱）

二、頭の運動

注意1、前後屈、側轉、共に四擧動にて行ふ

三、胸背の運動（半左向にてなす）

注意1、四擧動にて行ふ

2、兩脚を左右に開き（一擧動）で開脚姿勢をとる

3、胸後屈の際に反掌するには臂を前に出すことなくして行ひ臂の高さは手が概ね頭の高さに等しき迄ぐること

4、前下屈の動作に移る時の臂は上前より下に下し指先が地面に觸るゝを度とし頭も前屈して兩臂の間に入れる

5、前下屈より直立姿勢に復する際には頭より漸次體を起し兩臂は體と共に擧ぐることなく體側に垂れるものとす

この動作は比較的速に行ひ遲れざる樣

四、腹の運動（半右向にて行ふ）

注意1、二擧動にて行ふ

2、第一動にて兩手を地上につくと同時に左足を後出し第二動にて右足を左足に揃へる

3、足先は開ぐるものとす

4、直立に移る動作は左足より始め遲れぬ樣

5、直立後は正しく不動の姿勢をとり砂を拂ふため手を打つ等の動作をなさざる樣

五、體側運動

注意1、一擧動にて始めの姿勢をとる

2、第一動にて右（左）臂上にし左（右）臂を下して體を左（右）に屈ぐ

3、上擧せる臂は充分伸したるまゝなるべく側屈したる頭に接近せしむること

4、第二動にて臂側擧開脚直立の始の姿勢に復す

六、跳躍運動

注意1、呼唱を稱へて行ふ（六呼稱）

2、第一動にて擧踵臂側擧（速擧動にて）をなす

3、第二動にて動作を休止することなく直ちに第三動に移る

4、第三動にて臂側振のとき一時臂を水平に止むるものとす

七、下肢の運動

注意1、呼稱を附せず

八、呼吸運動

注意1、二擧動にて行ふ

2、第一動吸氣しながら前方より臂を上擧し臂は瞬時上擧のまゝ止め第二動呼氣しながら滑かに反掌しつゝ側方より下す

備考1、總て左右交互に行ふ運動は左方より動作を始む

2、模範は各運動とも指揮者に於て之を示す

3、運動實施以外のときは絕えず指揮者に注目すること

4、運動は指揮者の號令に依りて行はしむ

服裝

一、袴は正服のものを用ひ上衣は脫すること

二、襯衣は白とし半袖又は長袖なること

三、帽子は用ひざるものとす

四、成るべく運動靴を用ふること

五、脚絆は着けざること

右の服裝は出場前各校座席に於て整ふるものとす

一、打合濟事項以外は左記に依ること

一、出場各學校は左記の通りに入場し所定の位置に就くこと

イ、小學校は當日午前十一時より正午迄に入場のこと（東南入口より）

ロ、男子中等學校は正午より午後〇時三十分迄に入場のこと（東南入口より）

ハ、青年團　右に同じ

ニ、女子中等學校は正午より午後〇時三十分迄に入場のこと（北西入口より）

一、男子生徒は白襯衣にして半袖又は長袖を用ひ肩の露出するものは之を用ひざること

一、合同體操の各號令指揮者は左の通りとす

小學校　有田辰三　富士野敬太郎

男子中等學校　金子藤四郎

女子中等學校　藤山快隆

一、退場の際は青年團、男子中等學校、女子中等學校、小學校の順序とす。

第四節　奉祝運動會

四概況

當日は秋晴れの氣澄みて、只さへ快哉を叫ぶの日、一萬有餘の健男女子は何れも意氣衝天、早天より入場し、續きて數萬の觀衆は雪崩を打ち開會時には眞に滿場の餘地なき大盛況を極めたり。

午後一時一同整列、君が代を奉唱し、市内小學校八十五ケ校の尋常科六年及高等科全部八千百名の合同體操ありて競技に入る。

先づ青年團四百米、男子中等學校八百米リレーの豫選を終りし時、畏くも　秩父宮殿下には　同妃殿下と御同乘自動車にて臨場あらせられ、一同起立最敬禮の裡に御席に着かせ給ひたり。

次で女子中等學校の籃球と一齊合同體操あり、續いて小學校男女別兒童の八百米リレー競技、男子中等學校生徒の八百米リレー競技あり此競技の終るを待ち、土岐市長より　兩殿下に對し御禮言上申上ぐるや、　兩殿下には御退場仰出されたるにより、一同總起立樂隊の吹奏するマーチの曲の音の裡に、御機嫌いと麗しく御退出遊ばされたり、

本日は總ての演技豫定通りに進行して、而も一層の緊張味を加へ兩殿下には始終熱心に御台覽を給ひし程にて、大成功裡に終了したりしが、中にも一齊合同體操は見事の出來榮えにして　殿下にもいと御滿足に思召されたるやに拜し一般觀衆も大喝采を拍したり。

第五節　奉祝音樂會

本市奉祝音樂會は、大禮の諸儀に因める十一月十日、十二日、十七日、廿一日の四回に亙り次の如く開催せしが、斯界の權威を集めたる演奏のことゝて毎回の入場者溢れんばかりの盛況を極め、圓山音樂堂の如きは數萬の群集、音波の屆かざる大谷本廟の入口より西の道路一ぱいになだれ込み、公會堂も開會前既に滿員の盛況を呈したる程なりされば係員の忙しさ、又筆紙の盡す所にあらず、爲めに成るべく多數の人に此名曲を紹介する意味に於て、更に演奏行進を催し、前後三回に亙りて市内目拔の大通りを練り歩きたり。大要次の如し。

第一回

日　時　十一月十日午後六時より約二時間
場　所　圓山公園市音樂堂
演奏者　海軍々樂隊員四十六名　指揮者佐藤軍樂長
演奏曲目

第一部（管絃樂）

一、行進曲　戴冠式　マイヤベーヤ作
二、序曲　マリタナ　ワレス作
三、組曲　埃及舞踊曲　ルイギニー作
四、イ、木琴獨奏曲　スパー溫泉の思出　ミカエリス作
　ロ、田園詩曲　森の鍛冶屋　グラスノー作
五、交響樂詩　スラブの祭典　グラスノー作

第二部（管樂）

六、行進曲　戴冠式の鐘　パートリッチ作
七、序曲　歡喜　フロート作
八、歌劇　アイダの拔萃　ヴエルデイ作
九、亞米利加組曲　ヤンキヤナ　サーバン作
　イ、マーチ　力強き亞米利加
　ロ、セレナード　鐘の曲
　ハ、スケッチ　黑人士官學生の到着
十、行進曲　軍艦　瀨戸口作

第二回

日　時　十一月十二日午後六時半より約二時間
場　所　圓山公園市音樂堂
演奏者　陸軍戸山學校軍樂隊員約五十名　指揮者辻軍樂長
演奏曲目

第一部

一、行進曲　戴冠式　マイヤベーヤ作
二、序曲　樫の葉の冠　プレゼール作
三、圓舞曲　招待　ウエーバー作
四、歌劇　カヴアレリアルスチカナ　マスカニー作

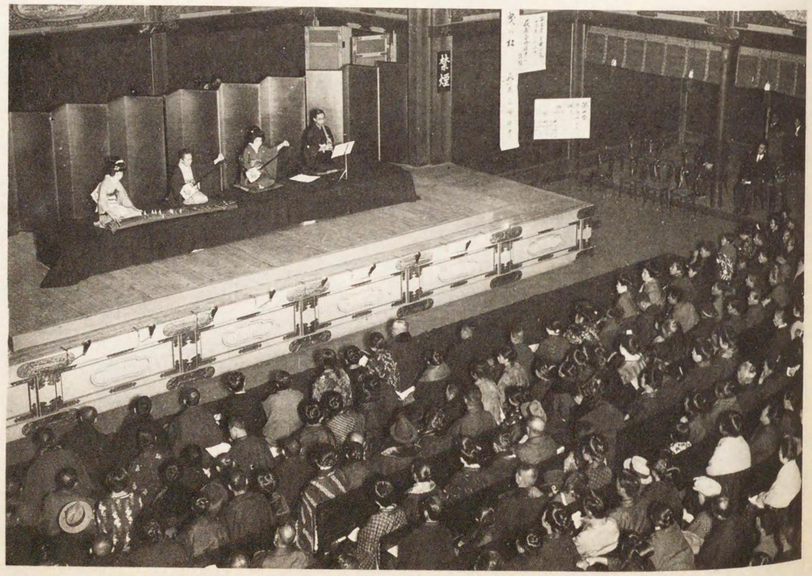
第二部

五、行進曲　戴冠式　パートリッチ作
六、序曲　ウヰリアムテル　ロシニー作
七、交響樂　新世界中のラルゴ　ドボルヂック作
八、樂劇　ワルキューレ　ワグネル作

第三部

九、行進曲　軍隊　シユーベルト作

奉祝音樂會（圓山音樂堂）



同上（公會堂）

（堂會公）上　　同

（堂樂音山園）會樂音觀參

十、組曲　前奏曲　ベールギュント　グリーグ作
十一、大序樂　千八百十二年　チヤイコフスキー作

第三回

日時　十一月十七日午後二時より約二時間半
場所　圓山公園市音樂堂
演奏者　大阪音樂學校教官以下約壹百名
演奏曲目

第一部

一、混聲合唱　全員
イ、大禮奉祝歌　文部省作
ロ、閃めく星　ジルヘル作
ハ、さすらひ人の唄　ハウプトマン作
二、ピアノ獨彈　師範一年　河野光子
ポラツカ　ブリランテ
三、女聲二部　本科二年　佐野鈴子
イ、こゝろづて　メンデルスゾーン作
ロ、唯一言葉に　同
四、絃樂四重奏　第一ヴアイオリン　本科三年　清水彦二
第二ヴアイオリン　同　飯岡義郎
ヴイオラ　本科二年　佐々木二郎
セロ　本科一年　永井直
絃樂四重奏曲　作品六四
アレグロ　モデラート
アダヂオ、カンタビーレ
五、テノール獨唱　本科二年　永野秀治郎
イ、かやの木山　山田耕作作
ロ、歌劇「マルタ」中の詠歎調　フロトウ作
六、混聲合唱　全員
イ、尊とや大君　スタドラー作
ロ、愛國の歌　桐谷千代歌
永井幸次作

第二部

七、混聲合唱　全員
イ、眞心の涙　吉丸一昌歌
ロ、戀しき母　同
八、ヴアイオリン獨奏　本科三年　清水彦二
ローマンス　ベートーフエン作
九、ピアノ指彈　教授　片山靜子
イ、愛の夢　リスト作
ロ、森のさゝやき　同
十、絃樂四重奏　本科三年　清水彦二
第一ヴアイオリン　同　飯岡義郎
第二ヴアイオリン　本科二年　佐々木二郎
ヴイオラ　本科一年　永井直
セロ　ハイドン作
絃樂四重奏曲　作品六四
アレグロ　モデラート
アダヂオ、カンタビーレ
シユーベルト作

第五節　奉祝音樂會

メニエエツト
ヴイヴアーチエ
十一、テノール獨唱　教授　永野康孝
イ、小夜樂　シユーベルト作
ロ、春の信仰　同
ハ、子供の踊　信野潔曲
十二、混聲合唱　與謝野晶子歌
大饗　全員　バウル作
重田富吾歌

第四回

日時　十一月二十一日午後六時半より約二時間半
場所　岡崎公園市公會堂
出演者
一、筑前琵琶　一回　安田旭邦
一、舞踊（舞）　二回　樑茂都社中
一、同（長唄、清元）　二回　若柳吉兵衞
一、長唄　二回　杵屋勢喜
一、清元　二回　清元梅吉
一、三曲合奏　二回　萩原正吟

第一回奉祝演奏行進

尚本市は、當時滯洛中の陸海軍々樂隊に依囑し、左記の通り大演奏行進を行ひたり。

一、演奏人員
陸軍戸山學校軍樂隊　辻樂長以下四十名
海軍々樂隊　佐藤樂長以下四十五名

二、日時及集發場所
十一月十六日午後四時半市役所前に集合——四時四十五分出發

三、順路
市役所——河原町——四條通——烏丸通——丸太町通——熊野神社——東山通——二條通——應天門——三條通——東山通——祇園石段下——四條通——河原町通——市役所前＝解散

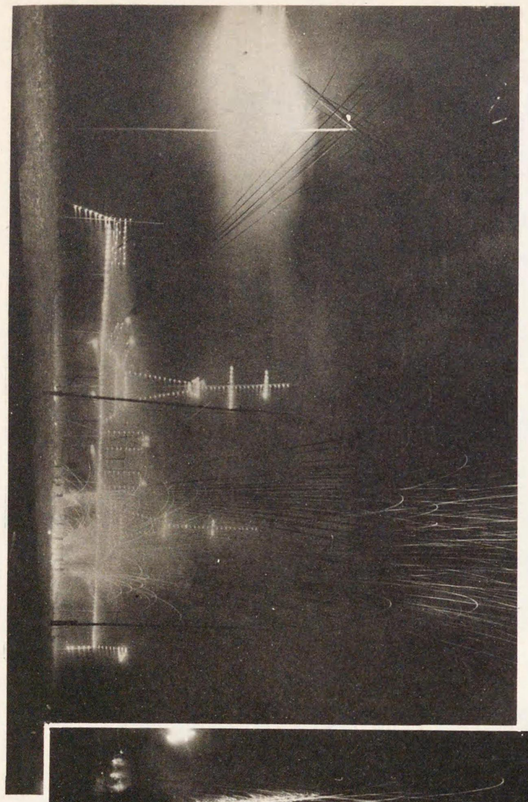
第二回奉祝演奏行進

同月十九日は更に海軍々樂隊に依囑して左記の通り第二回演奏行進を催したり。

一、演奏人員　佐藤樂長以下四十五名
二、時刻　午後五時頃、市役所前出發
三、順路　市役所——河原町通——四條通——烏丸通——丸太町通——熊野神社——東山通——二條通——應天門——三條通——東山通——祇園石段下——四條通——河原町通——市役所前＝解散

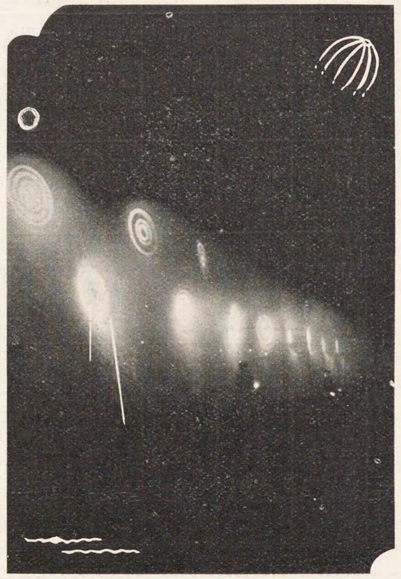
第六節　煙火

京都行幸竝に東京御還幸の際に於ける百一發の奉祝煙火を始めとして、市民奉祝式、大饗第一日及第二日、伊勢神宮竝に各山陵へ御親謁當日には百發、其の他は適當の日に適當に打揚けたるに、其の間仕掛花火を松原團栗橋間に、出雲路橋畔の各加茂川磧に於て數回に亙り打揚けたるは、いやが上にも奉祝氣分をそゝり立て、殊に夜間の仕掛煙火は京都市廳、博覽會場、各商店のサーチライト、イルミネーションと相

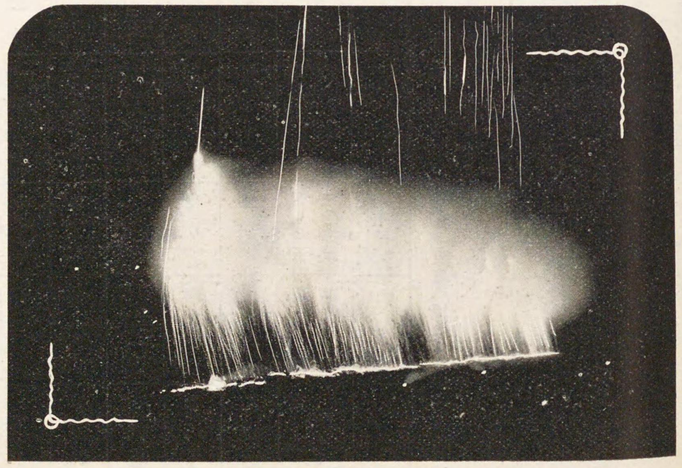


右　同

火煙掛仕
（町橋寺雲田）



火　煙　祝　奉



火　煙　祝　奉

映じて電花燦然たる中に、昭和聖世の花の都を思はしめたり、何れも次の要項によりて施行せり。

一、打揚煙火　次ノ要領ニ依リ施行ス

1、打揚ノ場所及其ノ數量

日次	打揚場所	打揚數	打揚の時刻	摘要
十一月七日	加茂川七條磧出町の劍先一商敷地	四寸玉三〇三發	京都御着の時刻より	京都市奉祝會煙火は一ヶ所に付各一〇一發宛
八日	同	四寸玉一五〇發	自午前九時至午後四時	京都市主催全國新聞記者招待煙火は一ヶ所に付各五〇發宛
十一日	同	四寸玉三〇〇發	奉祝式時刻より	市民奉祝式擧行煙火は一ヶ所に付各一〇〇發宛
十五日	出雲路橋と中賀茂橋間	四寸玉五〇發	秩父宮殿下運動場御臺臨時刻一時間前より	奉祝運動會
十六日	加茂川七條磧出町一商敷地	四寸玉三〇〇發	自午前九時至午後四時	大饗第一日煙火は一ヶ所に付各一〇〇發宛
十七日	同	同	園遊會開會時刻一時間前より	參列員園遊會及同晩餐會
十七日	同	同	大饗第二日上	大饗第二日右同
十八日	出雲路橋と中加茂橋の間	四寸玉三〇〇發	園遊會開會時刻一時間前より	參列員園遊會及同晩餐會
十九日	加茂川七條磧出町一商敷地	四寸玉三〇〇發	祝賀會時刻より（午後）の豫定）	大禮奉祝會主催祝賀會煙火は一ヶ所に付各一〇〇發宛
加茂川七條磧	四寸玉二發	御出門より（午前）の豫定）	伊勢神宮御參拜	
二十日	同	四寸玉三〇〇發	秩父宮殿下運動場御臺臨時刻一時間前より	奉祝運動會
二十一日	同	四寸玉三〇〇發	奉祝式時刻より	市民奉祝式擧行煙火は一ヶ所に付各一〇〇發宛
二十二日	加茂川七條磧出町劍先一商敷地	四寸玉三〇〇發	園遊會時刻より（午後）	京都市祝賀會煙火は一ヶ所に付各一〇〇發宛
加茂川七條磧	四寸玉二二發	京都驛御着輦時刻より（午前の豫定）	伊勢より御還幸	
二十三日	加茂川七條磧	四寸玉四二發	御出門より御歸還まで	神武陵御參陵
二十四日	同	同	同	仁孝、孝明陵御參陵
二十五日	同	同	同	桃山陵御參陵
二十六日	加茂川七條磧出町劍先一商敷地	四寸玉三〇三發	京都驛御還幸御發輦より	京都市祝賀會煙火は一ヶ所に付各一〇一發宛
計		二、七七四發		

備考　二一發又は一〇一發の如き祝砲の煙火は空中にて破裂するものを用ひず音響のみとす

2、打揚ノ設備及其ノ方法

打揚筒ヲ直立向上シ杭ニ堅ク拮リ付ケ周圍ハ葭簀ヲ張リ廻ラシ尚二拾間四方ヲ鐵線ヲ以テ遮斷シ壹ケ所ニ付人夫二人宛ヲシテ打揚ゲ中監視セシム

二、仕掛花火ハ次ノ要領ニ依リ施行ス

1、施行ノ場所及日時

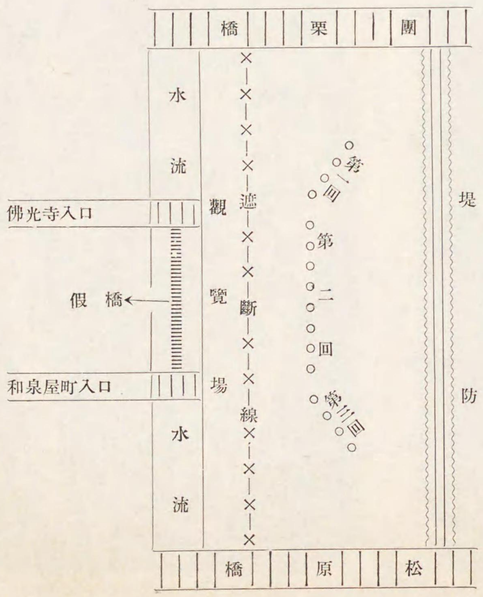
日次	場所	時間	摘要
十一月十七日	（下京）松原團栗橋間加茂川磧（上京）出雲路俵町加茂川磧	自午後七時半至午後八時半	大饗第二日
二十日	同	同上	大禮博賚賞授與式
二十二日	同	上	右同上
		上	市祝賀會

2、煙火ノ種目

日次	煙火の場所		
出雲路俵ノ町	松原團栗橋間磧		
十一月十七日	奉祝に鳳凰に五色亂玉	高幅三十間	奉祝に五色亂玉 高幅二十間
	菊花園	高幅二十間	銀色彩色舞車 高幅二十間
	彩光の瀧	高幅三十間	花車に彩光遊星 高幅三十間
	五色イルミネーション	高幅三十間	萬歳菊花壇 高幅二十間
二十日	軍艦	高幅二十間	回轉火に玉吹 高幅二十間
	秋の百花園	高幅二十間	花の瀧 高幅三十間
	花傘	高幅二十間	銀光の瀧後に爆聲 高幅三十間
二十二日	花園に蝶の遊び	高幅三十間	秋の東山紅葉の錦 高幅二十間
	富士山	高幅二十間	紅綠交戰 高幅二十間

3、煙火ノ設備ト其ノ方法

イ、煙火ハ何レモ地上又ハ水面ニ於テ、次ノ形態ニ依リ仕掛ヲ爲ス



（詳細は圖解參照）

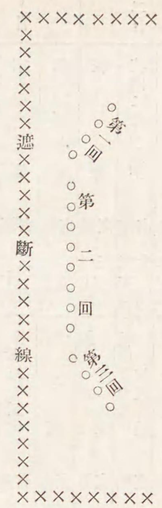
ロ、上下二ケ所共ニ同時刻ニ點火シ各回ノ間ヲ約十五分置トス

ハ、煙火裝置ノ場所ニ一般觀覽者ノ接近セサル樣鐵線ヲ用ヒテ遮斷ス

ニ、松原、團栗橋間ハ佛光寺橋及和泉屋町ヨリ入口ヲ設ケ假橋ヲ造リ磧内ニ入ラシム

松原、團栗橋間煙火裝置說明圖

出雲路橋俵町煙花装置説明圖



備考　遮斷線外四方八方より觀覽し得らるゝ樣にす

第七節　奉祝電車

本市大禮事務局の計畫に係る奉祝花電車は屋臺造五臺、花電車十臺を左記方法に依りて造り上げ、鳳輦を迎へまつる七日を初頭に、大禮期間中を通じて月末迄運轉し、殊に花電車は入洛者の觀覽に供すべく年末迄運轉期間を繰り延べたりしが、イルミネーション裝飾電燈と相映じて市街に一入の盛觀を添へたり。

裝飾電車の種類に就きては可成大禮奉祝の意味を含ませ各商店に命じて作らしめたり。

屋臺作電車

種目	意匠及製作者
孔雀	大丸呉服店
桃太郎	物産館
萬歳	三崎清々館
菊童子	高島屋
櫻橘	同上

花電車

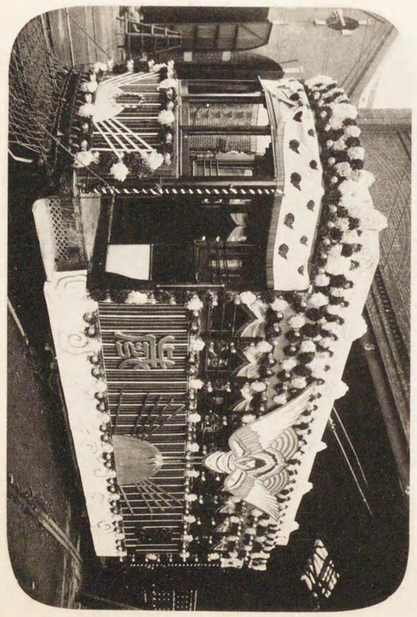
種目	意匠及製作者
大典扇子	高島屋
洋風	同上
萬歳	高島屋
楓鳳凰	三崎清々館
菊紅葉	同上
元祿	高島屋
萬歳旛	三崎清々館
菊に紅提燈	同上
柳櫻	物産館
日の出	同上

仕樣書例

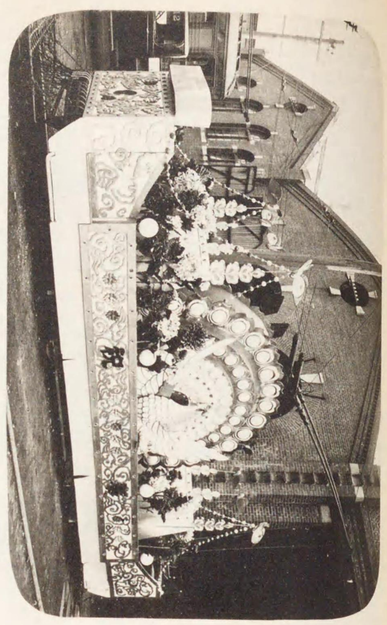
一、花電車　三崎清々館意匠部

一、屋根　上屋全部に菊花を圓の如く大小取混ぜ配置よく取付け、前列に金色立體の鳳凰と銀色御光付鏡を交互に前後に二十二個取付く

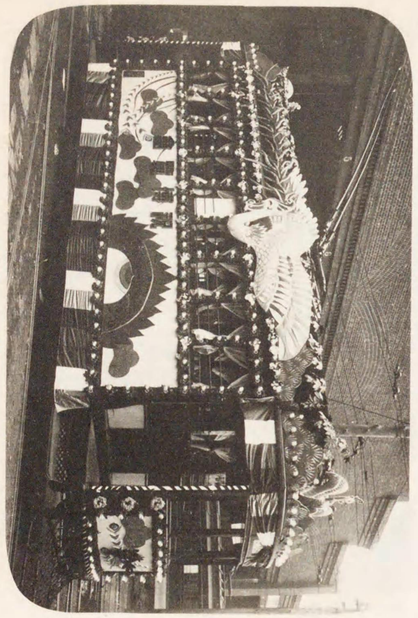
（一　共）



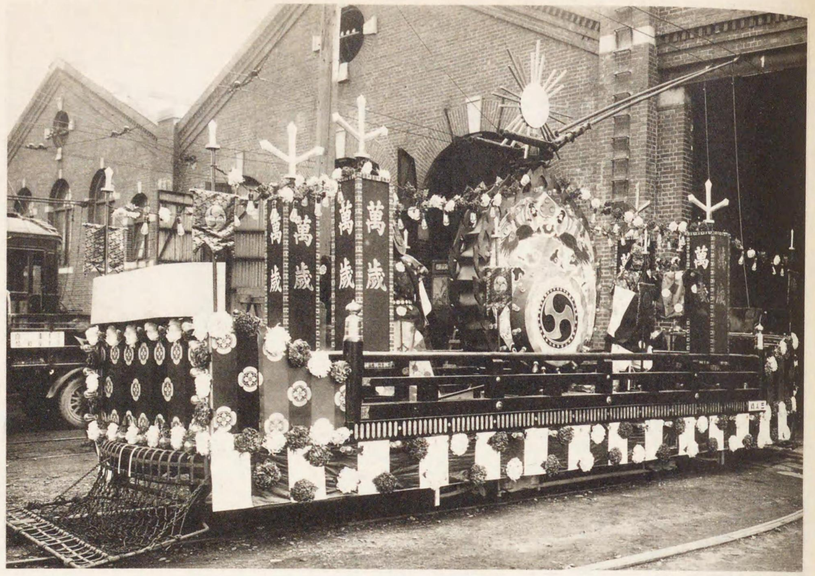
（二　共）



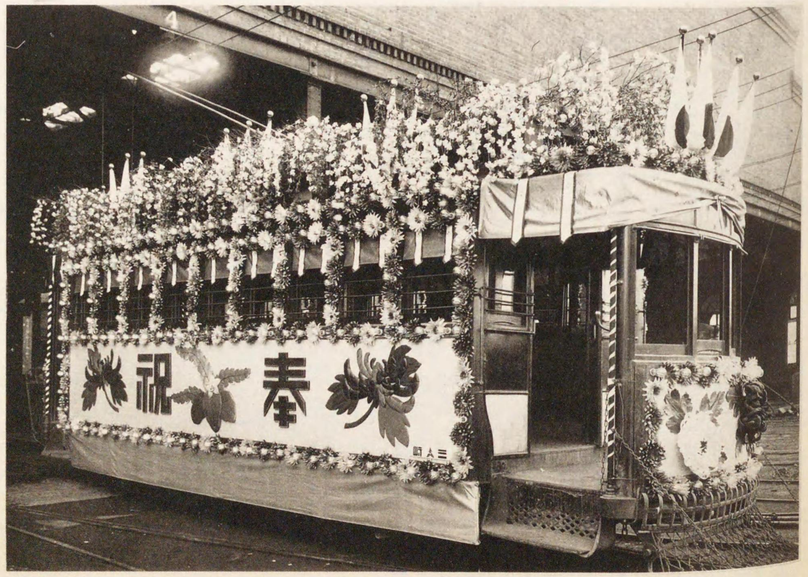
（三　共）



（四　共）



祝奉電車



同上

一、窓カーテン朱子地黄色にて、青色の椽を取りたる物式は本簾窓全部と運轉臺横に取付ける椽は、徑六寸葉付菊花にて裝飾す

一、胴羽目　朱子裂にて有職色彩を取入れ端雲を刷込たる幕を張り、其の上に黒朱子の押畫にて文字を張付く、文字の外は金椽にて區劃し胴羽目の天地は葉付菊花にて電球の間に配置能く取付く

一、運轉臺　上屋根の中央に鳳凰を据付け、外は葉付大小菊花を紋畫の如く無數に取付く

一、エンドポスト　赤白金巾(退色せぬ物)にて桂巻をなし、ヘツドライトは日の丸國旗を型張付け、兩横は錦旛を朱子裂にして有職の紋を刷込みて現はし、其の枠は菊花を電球の間に配置能く取付く

總て御大典奉祝を現はす意味にて高御座及錦旛を應用配置し、全部を有職に仕上ぐ

二、花　電　車　(其の一)　　物産館意匠部

正面桐及鳳凰は押繪式になし、屋根上櫻及松は生子張にて極彩色に描き木製モールを取付く、側面松及格子は生子張にて極彩色にペイントにて描き上げ、鶴(屋上)は人形式に立體としてなす、屋根上モール及水引モール木製(クヅ)にてなし、腰引ペイント塗鳥及櫻の押繪となし、カーテンは朱子にてフレンジを取付く、水引は朱子とし他は青竹貳の塗とす、花は全部色取々の菊花となす

花　電　車　(其の二)

正面極光は板切拔ペイント仕立となし、屋根上雲は生子ペイント塗描上となし、側面鳳凰及び萬歳の字は押繪式、腰張及びカーテンは朱子となし本房を付く、水引は本モス染もの、極光は板切拔、花は色取々の菊花となす

桃太郎屋臺電車

人形仕立(桃太郎、猿、犬、雉子、龜、兎、狸、おきな、金太郎、雀、臼)各人形本衣裳付

桃太郎	約	四尺五寸	猿	約	二尺六寸
狸	約	二尺五寸	おきな	約	二尺五寸
龜	約	二尺	兎	約	二尺三寸
雉子	約	二尺六寸	犬	約	二尺八寸
金太郎	約	三尺	雀	約	二尺五寸
臼	約	三尺			

桃太郎は電柱を中心に廻る

萬歳旗はモス地金刺繍ふち染分け、舞臺はやゝ丸味を持ち圖の感じを出す、波は板切拔き布張り重裝置にて内面より照明す、ペンキ布張極彩色瑞雲は板切拔き内面より同じく電燈照明す、水引は朱子、天井板及び布張り縁板はペンキ極彩色とす

(感じ……お伽の國的やはらかき舞臺面)

取付方法　(其の一)

側　面　奉祝文字は金文字丸出し切拔き

旗	押繪式(朱子)	
屋根上旗	毛斯綸三巾物、棹玉は金	
朝日	五分板切拔	
格子	六分角	
花	橘	直徑三寸　葉四寸
	櫻	四寸
	菊	五寸

幕　毛斯綸染
モール　一寸物
正面　側面に準ず
取付方法（其の二）
側面　鳳　押繪及び切抜にて製作す
大太皷　五分板切抜中央部は押繪（朱子）
松葉　五分板切抜
花　金銀（菊花形）
幕　毛斯綸染
窓カーテン　ポプリン
正面　側面に準ず
取付方法（其の三）
側面　鶴及龜は押繪及び板切抜極彩色もの
松及波は五分板切抜雛段式に裝置す
花　金、銀、赤、黄（菊花形）
幕　モスリン
モール　一寸五分
其の他祕し電燈にて照らす
正面　側面に準ず

三、花電車　　大丸意匠部

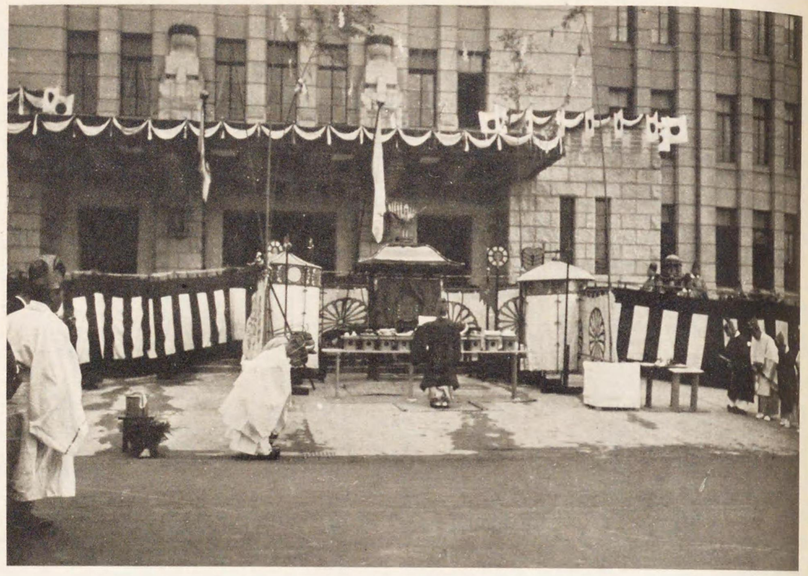
一、中央鳥の尾は板切抜にて全部布張ペンキ塗仕上げ
一、尾上部は二段盛上げにて各尾の中央に色電球入り
一、尾は三段に盛上げ上部五寸、中部三寸、下部二寸盛上げとす
一、尾上部は鉄力張
一、鳥胴體は木彫及び籠朱子張
一、羽は全部朱子張
一、兩側の桐は板張にて布張ペンキ塗上げ、上部蝶々及花は板切抜朱子張及ペンキ塗極彩色仕上げとす
一、車體裾巻花は色朱子張ペンキ仕上げ
一、雲は板切抜き金ペン塗下地は白朱子張とす
一、兩側の桐下部には菊花多數多種取付く

四、花電車　　高島屋意匠部

一、青地は朱子を用ひ中央部は裂細工を施す
一、屋上の雲は電氣照明を應用す
一、乘客窓上部はガラスフレンジーを付く
一、造花は模造紙油仕上を用ふ、造花は中央部に大形を用ひ漸次外部に從ひ小き形を用ふ
一、車體裾は赤白幕とす
一、御提出決定設計に由り完納とす

第八節　時代行列

時代行列は例年十月廿二日擧行すべきも、本年は大禮の御儀あり、爲に參列諸員の拜觀に供すべく特に變更して、十月廿二日は唯祭典のみに止め、十一月大禮期間中に擧行すべく定めたり、其の日時に就ては御駐輦中は各方面各種の催、會合等が連續的に計畫され、之等と同一の拜觀者を迎ふるには、最も重複の少なき日を選ばざるべからず、相當考慮交渉を重ねたる上、十一月十二日と決定し、若し雨天の場合は十九日と内定したり。



時代祭行列　（其一）

同　上　（其二）

一、案内狀は内外參列員全部約三千名に發し、其の樣式左の如く之に招待券各一枚を添附したり。

案内狀

謹啓來ル十一月十二日本市平安神宮時代祭行列擧行有之候間同日午後二時三十分平安神宮大鳥居前慶流橋南詰にて拜觀被成下度此段御案内申上候

敬具

昭和三年十月二十五日

京都市長　土岐嘉平

追テ雨天ノ節ハ十一月十九日ニ變更相成候

時代祭行列
拜觀場
招待券

京都市

（招待券裏面）

一、本券ハ受付ニテ御示シ被下度候

日時　十一月十二日午後二時半
（雨天ノ節ハ十九日）

場所　平安神宮大鳥居前
慶流橋南詰西側

二、當日は平安神宮と打合せの上、特に行列の通行は午後三時に市拜觀者の前方を通過することゝなしたり。

三、拜觀場は（別紙圖面の通り）大禮博事務局の兩側、慶流橋の兩側及び共立生命保險會社の前とし、椅子二千個を備付けたり、椅子を二千個と限定せしは、招待者の三分の一を見込みたるものなり、然るに本催は參列員及び其の家族の非常なる期待を呼び、七、八日頃より頻りに招待券の要求あり爲に更に二千名以上の招待狀を增發したるほどにして、加ふるに當日の來賓は顯官高位の人にして殊に令夫人又は隨員其の他家族を伴ふ人多く、一人にして五人以上の同伴者を有する向もある程にて、正午過より來觀者陸續として引きもきらず、午後二時には既に滿員の盛況を呈したり。

四、設備に關しては市地理課と共に、共立生命保險會社との交渉によりて慶流橋電車路南應天門通京阪電車線路に至る東側を使用するこ

ニゝし、建築課の設計により十一月二日請負契約を結び十一日設備の大體を了せり。

場所を應天門通仁王門京津電車踏切間ニし、設備の大要は場所狹隘の爲第二工藝館正門内に三ヶ所の天幕（坪數五坪）を張りて來賓の休憩所に充て、慶流橋以北平安神宮前に至る東側の適當なる場所に拜觀者用椅子を竝べ、自動車にて來場せらるゝ向は配車係に於て便宜の方法を講じたり。

五、道路使用

拜觀場所は主ニして街路の兩側ニなしたる爲、觀覽席に充てたる應天門前通、仁王門より京津電車踏切に至る東側長さ約六十間幅約二間は川端警察署の承認を受け、更に自動車留置場に充てたる智恩院境内（古門前入口より山門に至る間）は、智恩院の内諾を求めたる上松原警察署の承認を受くる等何れも適當に手續きを了しおきたり。

當日來賓の主なる人には、

田中首相、德川貴族院議長、犬養毅、鈴木喜三郎、山本達雄、白川陸相、牧野内大臣等をはじめ朝野の貴顯數百名、爲に應接には特に共立生命保險會社内の新築を開放し、尚非常の場合を顧慮して救護所をも配置したり、外國特派大使及び使節の一行は、午後二時半都ホテル及び京都ホテルを出門し、本市所定の觀覽場に入れり。（詳細は外賓接遇の項參照）

境内道路借用願

來ル十一月十二日擧行ノ時代祭ニ際シ外國使臣、大禮使、其ノ他大禮參列員ヲ招待スルコト、相成居リ之カ觀覽席ヲ應天門前通仁王門下ル路上ニ設置致スヘク候ニ付テハ之等乘用ノ自動車ノ留置地トシテ御境内黒門ヨリ古門前通及山門前通道路ヲ（當日午後一時ヨリ約三時間）拜借致度尤モ交通上ニ對シテハ支障ヲ來サヽルヘク候間右使用方御許可相成度此段奉願候也

昭和三年十月十五日

京都市内記係長　天矢景光

智恩院寺務所宛

回答

十月十六日御申出ニカヽル十一月十二日午後一時ヨリ同三時迄自動車置場トシテ當山三門下及黒門下使用之件承認候也

但シ御指定ノ時間ハ當山ニ於テ御大典奉祝法要謹修可致候ニ付參詣者竝一般交通上特ニ御注意相成度候

昭和三年十月二十三日

總本山智恩院寺務所

京都市大禮事務局

内記係御中

時代祭行列

京都市

時代祭

時代祭は官幣大社平安神宮の私祭で毎年十月之を擧行する。（十月廿二日は、延暦十三年桓武天皇が始めて遷都御入京あつた日である。）これは桓武天皇が、延暦遷都以後千百餘年間に於ける、文物制度の變化した時代を區別して、その當時の行裝を模出して祭典を粧飾するもので、明治二十八年十月二十五日執行せられたのを初めとして、其の後毎年十月二十二日を恒例として居る。今其の概要を記して見ると、當日午前八時、神前で神幸の行列を整へ、前列は雜色・加陵頻伽・蝴蝶・樂人次に御賢木・神饌・唐櫃・神職（狩衣騎馬）楯矛・弓矢・御劍・禰宜（衣冠騎馬）隨身（二人）神職（齋服騎馬）紫弩・次に、鳳輦・菅蓋・雨皮唐櫃・神馬・宮司（衣冠騎馬）主典（衣冠騎馬）雜色等で、應天門前通を西へ冷泉橋を渡つて、疏水西岸を南へ、二條通を西へ、河原町を南へ、市役所前に着御する。

時代祭の行列は、此の神幸に從ふものであつて、當日午前八時までに市役所前の廣場に參集して、同九時にこゝを出るのである。

行列の先驅は、刀を右肩より斜に負ひ、陣太鼓を叩き笛を吹き、大太鼓を前に抱へて打鳴らし、拍子面白く進んで行く維新勤王隊である。

維新勤王隊　大正十年より參加したもので、以前の山國隊を改稱したものである。山國隊は明治維新の際、丹波の鄕士が山國隊を組織して當時の軍隊組織に倣つて、東征に從ふた樣に擬したもので、北桑田郡から出て居た。

弓箭組　往昔源三位賴政に從ひ、專ら弓箭を執つた者の子孫で、古代の行列に倣つたものである。丹波北桑田郡船井郡でその數が數百戸ある。

德川時代城使上洛式　德川幕府が、皇室尊崇の意を表して、朝廷に御大禮の行はれる時、例年年始等に、將軍の名代として親藩が譜代の藩主を上洛せしめたのに擬したもので、いはゆる大名行列である。

織田信長上洛式　信長が、正親町天皇の密勅を奉じて、永祿十年兵を擧げ近江の國を平げ、長驅して上洛したときの行裝に擬したもので、信長を始め羽柴秀吉・瀧川一益・柴田勝家或は立入宗繼・丹羽長秀等に扮裝した騎馬武者が之に連つてゐる。

城南流鏑馬式　後鳥羽天皇が武門の跋扈を惡み給ひ、城南の流鏑馬に託して、近國の武士を召し給ふたのに擬したもので、鎌倉時代の行裝を見るべきである。

藤原時代文官參朝式　藤原氏盛時の文官參朝の儀裝を示したものである。

延暦武官出陣式　延暦二十年、征夷大將軍田村麿が、勅を奉じて東奥征伐に赴くさまを擬したものである。

延暦文官參朝式　延暦十五年、平安遷都に關係した右大臣藤原百川・同繼繩大納言藤原小黒麿・造營大夫和氣清麿・木工寮長阪上田村麿等の行列を模したものである。

亞いで前記の神幸が之に續き、寺町通を北へ、二條通を西へ、烏丸通を南へ四條通を東へ、寺町通を南へ、休憩所に着く。かくして午後一時、休憩所を出て寺町通を北へ、四條通を東へ、繩手通を北へ、三條通を東へ、應天門通を北へ、慶流橋を渡つて神宮に還幸する。而して現今行はれてゐる行列の順序は明治二十八年、始めて擧行せられた時のものとは、全く相反して居る。この時代行列は、實に全國無比の偉觀で、古雅綺麗な衣冠、または冑兜を始め、燦爛たる旗幟、整肅なる裝姿、さては弓箭隊山國隊の風貌、樂音に至るまで、一千百餘年間に於ける各時代の文物服裝は走馬燈の如く連つて、殆んど應接に暇がなく、見る人をして思はず嘆稱せしめる平安の一名祭である。

以上の時代祭の行列は、市内の住民より成る平安講社々員に依つて行はれる。而して市内を八社に分ち第一社延暦文官參朝式・第二社延暦武官出陣式・第三社藤原文官參朝式・第七社前列（雜色加陵頻伽其の他）を上京區講社員・第四社城南流鏑式・第五社織田公上洛式・第六社德川城使上洛式・第八社維新勤王隊を下京區講社員之に當つて居る。裝束着類用具等は、平素は各所屬社又は神宮に保管してゐる。

市民奉祝踊

第九節　奉祝踊

歡喜に滿ちたる京都市民の奉祝氣分は、滯なく大禮を訖らせ給ふにつれて益々熱烈の度を加へ、手の舞ひ足の踏む所を知らざるものの如く、只儀禮こしての提燈行列、旗行列位にては滿腔の祝意を表するに足らずこし少くこも全市民に亙り、老若男女の別なく一般的奉祝踊を許されんことを懇願するもの日々數十團を加ふるに至れり、されば本府警察部にては、情狀さもあらんこして、大禮使こ協議の上日程を限り、大禮の本儀を訖らせ給ひし十五、六の兩日及び

聖上伊勢行幸の二十日、二十一日及び二十六日東京へ御還幸後月末に至る五日間の期間を以て、黃昏時より午後十一時を限りこし、許可さるゝ所こなれり。

取締方針

催物の種類

一、旗行列、提燈行列、屋臺及び秩序ある奉祝踊は之を認む
但し屋臺は一町內一團體を限度こす

會社、工場に於て行ふ屋臺も前項に準ず

二、假裝行列は之を認めず

三、仕掛花火、打揚煙火は市內人家稠密の場所に於ては之れを認めず

催物の期間

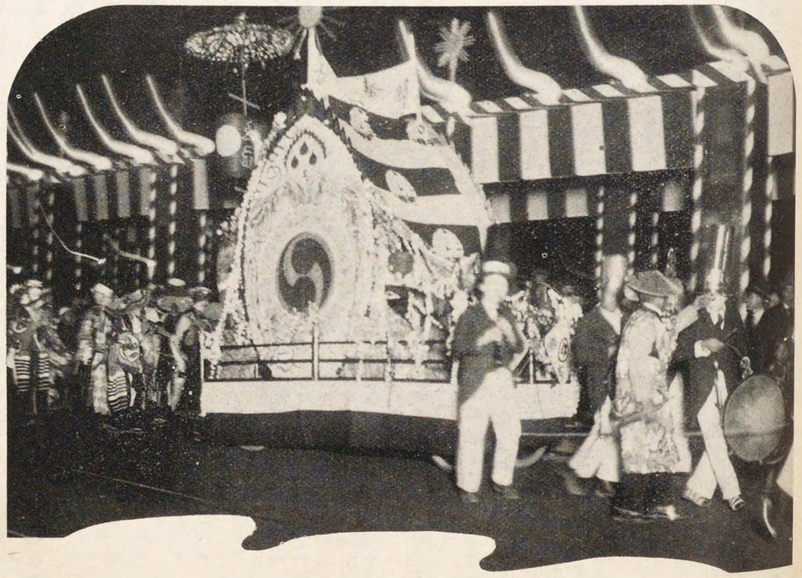
十一月二十六日より同三十日迄五日間
但し雨天のこきは順延するここあるべし

制限

奉祝踊（其一）

同上（其二）

イ、各種催物は團體的行動のみを認め單獨行動は之を認めざること
但し一團體の人數は五十人以上とすること
ロ、催物は總て午後十一時限とす
ハ、自動車に依る催物は一切之を認めざること
ニ、奉祝催物に名を藉り諸種の廣告を爲さむとするが如きものは之を
認めざること
ホ、左に該當する行爲は之を禁止すること
一、男子の女裝、女子の男裝、鬘、假面其の他の卑猥の扮裝又は言
行を爲すこと
一、通行人に惡戲又は粗暴の行爲を爲すこと
一、一般交通機關殊に電車自動車の運行に支障を生ずるが如き行爲
を爲すこと
一、電車内に於て踊り又は喧擾に渉り其の他乘客の迷惑となるべき
行爲を爲すこと
一、戎器、兇器其の他危險の虞ある物件を使用し又は携帶すること
一、學校(授業時間中)社寺教會(舉式中)其の他病院の近傍に於て喧
擾に亙る所業を爲すこと
一、猥りに他人の家宅に立寄り又は營業の妨害を爲すこと
一、泥醉して各種催物に參加すること
かくて熱狂せる各種の團體は、早きは午後三時頃より各町若くは最寄りの集合所に山車、屋臺をしつらへ、紅提燈に鐘太鼓の京都名物祇園囃しを先導に、手に〳〵提燈、旗を振りかざして、踊り衣裳もはでやかに永代八千代を奉唱し、市内に隈なく火と人の波を打たせて右往左



市民奉祝踊

往こ練り歩き、多きは數百名、少くも七八十名の團體がひきも切らず、盛り場こして知らるゝ四條通りを始め烏丸、河原町、千本、西堀川筋の如きは眞に立錐の餘地なき人出にして、大盛況の裡に奉祝氣分を漲らせたり。

但し今回の踊りは、從來の弊を矯めてどこまでも大禮奉祝の意を表はすにつとめ、踊の慣習こせる俤いや奴じやを止めて永代八千代こ奉唱し、踊り衣裳も色こそはでやかなれ、地質は主こして綿布を纏ひ、時間を嚴守して野卑の風習を避けたるなど、何處までも聖旨に奉答すべく赤誠をさゝげまつる所多かりしはたしかに時代の一進歩を表はしたりこもいひ得らるべし。

當時の新聞記事

踊れ踊れの五日間
いよ〳〵今日から

揃ひ衣裳も花やかに都大路を踊り抜く

無事に聖駕をお送りしたら、心ゆくばかり踊らせていたゞかうとかれて樂しみにしてゐた市民達である。二十五日の夜もすがら烏丸通に跪坐して鹵簿を奉送したがいさゝかの疲れも見せず、揃ひの衣裳で今宵街頭へ繰り出さんとする人は十萬を超えるであらう、わけて盛んなのは西陣、堀川方面、一團體二百人以上といふのが數限りなく、延長一町以上は困るといふので一つの團體を幾つかに分割する有樣、考へたのは踊りに使つた衣裳をそのまゝ長襦袢にしようと最初から濟い模樣に染めたが多くは派手なめでたい〳〵ハッピー、コート、拍子手振も面白く、都大路を夜を籠めて踊り抜かうといふのだ。

◇

踊りの期間は二十六日から三十日まで兩面へ團體名を記した襷を斜にかけ、中には屋臺を飾妓に曳かせていゝ氣持に鳴らさうといふ囃し方もあり、假裝行列こそ許さぬ、男女入り亂れて踊らんこと夢疑ひなく、京はさながら鼎の沸くがごくになるであらう、市民擧つての歡聲それは今宵から擧げられる。

◇

同志社の火事が保安課にたゝつて奉祝踊りの指定道路や注意事項がきまらず二十六日を待ちかれた愛すべき人達が所轄署へ團體組織の屆書を持參しても「一寸待つてくれ」こばかりで受付けてくれないので奉祝氣分に滿たされた市民達はヂリ〳〵するばかり……。

◇

二十五日正午過ぎやうやく保安課の方針がきまつて各署へ通知が行つたので午後一時から受付を開始したが注意事項が一枚も配布されてゐないので屆書の書き方や道順が片端から違ひ、滿足に通過するものは一通もない、ところがその注意書の劈頭には

奉祝催物は前日中に所轄警察署へ屆出承認を受けること

とあるのだから大變だ、書式が間違つてゐる上、時間がないと來て市内八警察署は二十五日夜は喜を洗ふやうな騷ぎ、おまけに丸太町通りは指定道路に入つてゐないので通行禁止、丸太町以南の寺町は指定道路だが北行だけしか許さないのだから丸太町まで行つたら一歩も動けないといふ親切な御注意である、どう考へたつて二十五日中に滿足な屆書の書けさうなはずがなく、こういう〳〵丸太町を指定道路に追加し、二十六日朝でも受付けるといふことに警察の方で折れてやゝ圓滑に行つたが二十五日夜は徹夜の受付け、いや來るは〳〵各署の係りは全く目をまはしてしまつた。

許されぬ假裝行列
——單獨行動も——自動車使用も——

府保安課では二十六日から三十日までの五日間にわたり旅行列提燈行列と屋臺曳き出し奉祝催し物は勿論秩序ある奉祝踊りを許すことになつたが假裝行列は絕對に認められなくなつた、なほ各種催し物につき左の制限を加へた。

イ、各種催し物は團體的行動のみを認め單獨行動は認めぬ、但し團體は五十人以上とすること

ロ、催し物は總て午後十一時限り

ハ、自動車の使用を認めない

ニ、奉祝催し物に名をかり諸種の廣告をなすが如きは認めない

このほか男子の女裝、女子の男裝かづら假面その他卑猥な扮裝または言行をなしたり通行人に對し惡戲粗暴などの行爲電車内で踊つたりなど騷ぎ乘客の迷惑となる行爲或器兒器その他危險の恐れあるものを携帶したり泥醉して催し物に參加してゐるのを發見した場合は容赦なく檢束または相當の處分に附するさうである。

第一節　大禮參列貴賓晩餐會

本市主催の大禮奉祝晩餐會は市奉祝事業中の最も重要なるもの、一なれば、特に愼重なる協議を遂げ以て準備にかゝりたりしが、當日は植物園園遊會より引續きの催にて、係員は恰も南船北馬の大繁劇を極めたり、大要は次の如し。

一、場所　先づ臨場貴賓の範圍を決定すべきなるが、大體は前例により大正大典の招待者約三百名を標準こして之を定めたり、而して會場は當時八坂倶樂部改築の儀傳はれるを以て同所を豫定場所こなせしが、爾後同改築は實現不能こなりしを以て、不得止本市公會堂を充つることゝし諸般の計畫を進めたり。

二、招待者範圍及招待狀發送

宮内省式部職こ打合せの結果、當日は皇族各殿下の台臨を仰ぐべく本市御成りの各宮殿下の台臨願を差出したる他、外國各特派大使及び使節並に親任官待遇以上(夫人同伴)の各大禮參列員を招待することゝ定め夫々案内狀を發送したり。

但し案内狀は園遊會案内こは別こし入念の上、書留を以て十月三十日全部發送を了したり。

晩餐會ニ皇族殿下ノ台臨願出ノ件

第一節　大禮參列貴賓晩餐會

年　月　日　　市長　名

各宮家事務官宛

度啓來ル十一月十八日

御大禮奉祝ノ爲本市公會堂ニ於テ外國特派大使及特派使節並ニ親任官以上ノ參列ヲ乞ヒ晩餐會相催度候間同日午後六時三十分

殿下　妃殿下ノ台臨相仰度右御聽許被爲遊候樣宜敷御執成シ被下度此段奉願候也

案内狀

謹啓陳者來ル十一月十八日

御大禮奉祝ノ爲岡崎公園市公會堂ニ於テ晩餐差上度候間同日午後六時三十分御來臨被下度此段御案内迄得貴意候　敬具

昭和三年十月二十五日

京都市長　土岐嘉平

同　清子

宛名

乞貴答

十一月十八日晩餐

諾　貴
不　名

諾　令貴
不　夫人名

御來駕ノ際ハ公會堂本館（西玄關）ヨリ御入場被下度候
服裝ハ左記ノ通ニ願上候
文官　通常禮服（燕尾服）ニ大綬又ハ本綬佩用
武官　禮服

謹啓愈々御清安被爲渡恐悅ニ奉存上候陳者來ル十八日本市公會堂ニ於ケル晩餐會ニ御來駕ノ節ハ御乘物整理等ノ都合モ有之候ニ付乍勝手公會堂本館（西玄關）ヨリ御入場被下度尙御服裝ノ儀ハ左記ノ通ニ相願候右彼是得貴意度如此御座候

敬具

記

一、文官　通常禮裝　大綬又ハ本綬佩用
一、武官　禮裝

昭和三年十一月十四日

京都市役所

殿

主人側としては、商工會議所會頭、本府各部長及び市會議員を招待し市會議員は本館東側に新食堂を設備して會場に當てたり。

三、準　備

1、設備

イ、大食堂の設備
ロ、休憩所の設備
ハ、料理場の設備
ニ、自動車置場の設備
ホ、新聞記者、警備係、係員、隨員室の設備
ヘ、各種の裝飾
ト、各室の暖房裝置
チ、携帶品預り所
リ、音樂演奏所
ヌ、椅子卓子の調達

以上は設備の充分ならざる公會堂にては其の困難尠しとせず、殊に本館の暖房裝置には數回の實驗をなせし程にして中々の苦心を要したり。

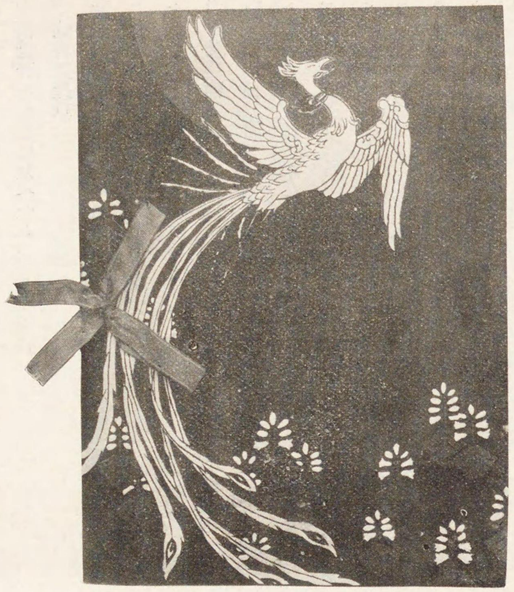
尙蠟燭五百本及び燭臺をも用意しおき、電燈故障の萬一に供したり。

2、料　理

皇族各殿下を始め內外貴賓の御來臨を辱うすべきにより、料理には特に周到の注意を拂ひ、早くより「メニュー」を作り宮內省大膳寮秋山厨司長の指揮援助を仰ぎて萬全を期し、尙料理場には電氣暖房を

秩父宮殿下　同妃殿下

大禮參列貴賓晩餐會場（市公會堂）



BANQUET

OFFERT PAR

MONSIEUR LE MAIRE DE

KYOTO

LE 18 NOVEMBRE DE LA

TROISIEME ANNÉE

DE SHOWA

MENU

Consommé clair à la Tortue

"Tai" à la Victoria
Mousse de Foie gras à la Gelée

Filet de Boeuf printanière
Asperges Sauce Hollandaise

Poularde rotie truffée

Glace Foujiyama

Dessert

取付けたる戸棚を作りて、數百人の料理を保温する設備をなしたるを用ひしむるの要ありしかば、東京東洋亭に交渉の上ボーイ八十名を調達せしめ、十八日午後の園遊會後植物園より直ちに自動車にて公會堂へ運び、サービスに當らせたり。

5、饗宴場裝飾

イ、盛花　盛花は各種の色を配合するは忌むべき例あり、爲に之れも大膳寮の指揮の下に全部紅白の西洋花とし、適當に飾りつけたり、卽ち壇上には菊花を配列し、其の天井より紫色幕を菊花の後迄適當に絞れり、菊花は黄白の二色にして、其の數三十八鉢なり。

ロ、内部柱は紫色布にて包み柱間には御簾を下ぐ。

ハ、二階欄干より懸崖菊を約四間の間隔に下げたり。

ニ、二階より壇上に面せる所に音樂隊席を設く。

ホ、各入口には金屏風を立て俄風を防ぐ。

ヘ、本館西側に料理室、配膳室を設け電燈水道を引く。

ト、本館暖房裝置は電氣ストーブを用ひて、卓子下には二間毎に一キロ電熱ストーブを臨時取付く。

尚木炭ストーブ十八個を備へて使用し、卓子の電氣ストーブは開宴と同時に消したり。

チ、卓子配列は壇上近く東西に「メーンテーブル」一本、それより南北に十二本の卓子を設く。

卓子は新しく造り、椅子は第一朝集所御使用濟のものを宮内省より借入れたり。

リ、晩餐會場及び休憩室は全部絨緞敷とす。

3、飲料及煙草

大膳寮の指導を受け、明治屋のリストにより左記の如く決定せり。

飲　料

セリー酒　アモンチラード
赤葡萄酒　シヤトラフヰット（一九一八年）
白葡萄酒　シヤトイケム（一九二一年）
シヤンペン酒　ポメリーグレノー
アフリマツト　ブランデー
シヤトリユース　綠　大
ブランデー　X　O
ウヰスキー　レヤーオールド
タンサン水　キリン
キリンレモン

煙　草

葉巻煙草　ハバナバンチウアイオレタス
紙巻煙草　アブダラ　No 25

4、ボーイ

京都に於ては、サービスノボーイを揃はず、殊に當夜は服裝も燕尾服

6、席　次

皇族殿下竝に各貴賓の席次につきては之れ又細心の留意を拂ひ、總ては宮内省式部職の指揮を受け、宮中御席次の順によつて定めたり、尚席次其の他通譯接伴等の爲特に宮内省より左記人々の援助をも求めたり。

式部官　山崎武夫
同　渡部信
同　大久保純
同　西村清
外に屬官二名

7、音樂演奏

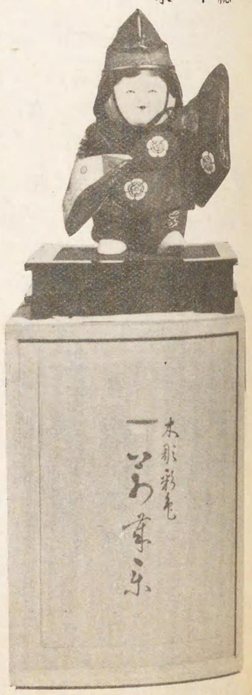
音樂は海軍省につき海軍々樂隊の派遣方を交渉の上許可を得たり。

當夜のプログラム（管絃樂）　音樂隊員約三十名

一　行進曲　市民の誇り　パネラ作
二　序　曲　東洋の女王　サンサーン作
三　圓舞曲　金と銀　レハール作
四　天使の夢　ルビンスタイン作
五　歌劇　シレユノ拔萃
六　組曲　クリスチヤン二世中の序曲　シベリウス作
七　行進曲　極　美　スーザー作

8、記念品

當夜參列の貴賓に對しては、御所人形、萬歳樂の木彫を箱入とし各一組宛を贈呈したり、但し



皇族殿下及外國使臣の分は大型、他は小型にして、前寫眞の如し、此の人形は貴賓の歸途自動車の中に入れて贈りたり。

9、自動車配車

約二百名の自動車を如何に配車すべきかに就ては相當考慮せし所にして、公會堂前面には　皇族殿下竝に外國使臣の分を配し、他は同堂の北側武德殿前平安神宮前の所に配したり。（詳細は別圖による）

10、準備調査

一　皇族殿下台臨の方を伺ふこと
二　同隨員の數
三　外國特派大使竝に使節來會者調
四　同隨員調
五　親任官以上の出席者調
六　京都側の出席者調
七　市會議員側出席者調
八　出席全數調査

九　席次札を書くこと
一〇　席表の調製
一一、料理飲料其他の注文
一　料理の數注文
二　飲物の數注文
三　煙草の數注文
四　盛花の數注文
五　グラス類の準備
六　隨員の料理及飲物の注文
七　新聞記者及警備員用辨當菓菓注文
八　自動車運轉手助手辨當注文
九　警備係員の辨當注文
一〇　係員辨當注文

當日の概況

係員は十七日午後六時公會堂本館に集合、準備打合せをなしたる後各部署に就きて各自の打合研究を遂げ、翌十八日は正午迄に完全に準備を終へたり、而して當夜の係員は殆んど晝間の園遊會係員と重複せしを以て、同園遊會の終りを待つて急遽に公會堂に集りし程なりしが幸ひに五時迄には萬端整備し得て剩す所なし、午後六時ごなるや臨場あらせらるゝ　皇族殿下を始め各貴賓を本館玄關に受付け、西側にて携帶品を預り、接待員の案内によりて本館階下の休憩室に導きたり。

尙　皇族殿下竝に外國使臣の方は階上休憩所に御案内申上げ、市長及び同夫人は本館の階下に竝び立ちて一々來賓に挨拶をなし、市會議員は全部其の附近の廊下にて御迎へ申上げたり。

斯くして六時五十分に至り全部來賓を迎へ、七時に至り開宴せり。先づ市長の先導によりて悉く席定まるや、爰に光輝ある本市大禮奉祝晩餐會は開かれたるなり。

開宴中は海軍々樂隊の優美なるオーゲストラの演奏あり、サービスは秋山厨司長の督勵によりて順次料理は運ばれたり、宴終るや一同は再び東館の休憩室に退かれ此處にも各酒の用意ありて一段の歡笑湧く、午後九時に至るや各貴賓の退場あり折からの大雨は一時眉を顰めたるも車の出づる頃は幸快晴に復したり。

大禮參列貴賓晩餐會招待

台臨ヲ願ヒシ皇族殿下

秩父宮
　雍仁親王殿下
　勢津子妃殿下
　　事務官　前田利男

高松宮
　宣仁親王殿下
　　事務官　石川岩吉

閑院宮
　載仁親王殿下
　智惠子妃殿下
　春仁王殿下
　直子妃殿下
　　事務官　浮田鄕次

東伏見宮
　周子妃殿下
　　事務官　高橋皚

伏見宮
　邦芳王殿下
　博恭王殿下
　經子妃殿下
　博義王殿下
　朝子妃殿下
　博英王殿下
　　事務官　奥名清信

山階宮
　常子妃殿下
　武彥王殿下
　茂麿王殿下
　　事務官　香川景之

賀陽宮
　好子妃殿下
　恒憲王殿下
　敏子妃殿下
　邦壽王殿下
　治憲王殿下
　美智子女王殿下
　　事務官　梶田文太郎

久邇宮
　邦彥王殿下
　倪子妃殿下
　朝融王殿下
　知子妃殿下
　正子女王殿下
　朝子女王殿下
　邦英王殿下
　　事務官　山田益彥
　多嘉王殿下
　靜子妃殿下

家彦王殿下
德彦王殿下
恭仁子女王殿下

梨本宮
守正王殿下
伊都子妃殿下
事務官　三雲敬一郎

朝香宮
鳩彦王殿下
允子内親王殿下
孚彦王殿下
正彦王殿下
紀久子女王殿下
湛子女王殿下
事務官　折田有彦

東久邇宮
稔彦王殿下
聰子内親王殿下
盛厚王殿下
彰常王殿下
事務官　犬塚力

竹田宮
昌子内親王殿下
恒德王殿下
禮子女王殿下
事務官　古川義天

李王家
李王殿下
方子妃殿下
李堈公殿下
金氏妃殿下
事務官心得　松本乘統

北白川宮
富子妃殿下
房子内親王殿下
永久王殿下
美年子女王殿下
佐和子女王殿下
多惠子女王殿下
事務官　三雲敬一郎

朝香宮
鳩彦王殿下
允子内親王殿下
孚彦王殿下
正彦王殿下
紀久子女王殿下
湛子女王殿下
事務官　折田有彦

東久邇宮
稔彦王殿下
聰子内親王殿下
盛厚王殿下
彰常王殿下

李王家
李王殿下
方子妃殿下
李堈公殿下
金氏妃殿下
長官　韓昌洙
外各宮殿下隨員

外賓

獨國特派大使	ウヰルヘルム、ゾルフ
白國特派大使	アルベール、ド、バツソムピエール
米國特派大使	チヤールス、マクウエー
同	夫人
英國特派大使	サー、ジヨン、アントニー、セシル、テイレー
同	夫人
佛國特派大使	ロベール、ジユール、ダニエル、ド、ビー
伯國特派大使	アー、ド、ブリエンヌ、フエイトーザ
同	夫人
ソヴイエト聯邦特派大使	アレクサンドル、トロヤノウスキー
同	夫人
伊國特派大使	男爵　ポンペーオ、アロイージ
支那國特派大使	汪　榮寶
西班牙國特派大使	ペドロ、カルテイン、イ、デル、サース、カバイエロ
西班牙國特派大使	マヌエル、エリヤス、ボンヌメーゾン
墨國特派大使	ホセ、ヴアスケス、スキアフイーノ
同	夫人
ルーマニヤ國特派大使	アウレル、ジアン、ヴアシリユ
同	夫人
ポーランド國特派大使	ズヂスラフ、オケンツキー
同	夫人
チエツコスロヴアキア國特派大使	カーレル、ハラ
同	夫人
諾威國特派使節	ヨハン、ウヰルヘルム、ミヘレツト
瑞典國特派使節	オスカル、アントン、ヘルマン、エーヴエロフ
蘭國特派使節	イエー、セー、バブスト
丁抹國特派使節	ヘンリツク、デ、カウフマン
同	夫人
ポルトガル國特派使節	ジヨセ、ダ、コスタ、カルネイロ
同	夫人
アルゼンチン國特派使節	ドクトル、マリオ、ルイス、デ、ロス、イヤノス
暹羅國特派使節	ピヤ、スバン、ソムバツテイ
同	夫人
瑞西國特派使節	エミール、トラヴエルシニー
チリ國特派使節	エンリケ、ガイアルド、ニエト
フインランド國特派使節	グスターフ、ジヨン、ラムステツド
土耳其國特派使節	フウルウツシ、フウアド、ベー
同	夫人
	外各隨員

來賓

官職	爵位	氏名
大勳位	伯爵	東鄉平八郎
內閣總理大臣	男爵	田中義一

樞密院議長　男爵　倉富勇三郎
同　夫人
元帥　子爵　井上良馨
内大臣　伯爵　牧野伸顯
元帥　子爵　上原勇作
鐵道大臣　小川平吉
同　夫人
宮内大臣　一木喜徳郎
海軍大臣　岡田啓介
陸軍大臣　白川義則
商工大臣　中橋徳五郎
同　夫人
大藏大臣　三土忠造
同　夫人
農林大臣　山本悌二郎
同　夫人
内務大臣　望月圭介
司法大臣　原嘉道
同　夫人
遞信大臣　久原房之助
文部大臣　勝田主計
同　夫人
朝鮮總督　山梨半造
同　夫人

總理大臣前官禮遇海軍大將　伯爵　山本權兵衛
總理大臣前官禮遇　高橋是清
同　子爵　清浦圭吾
同　若槻禮次郎
同　夫人
前官禮遇　伯爵　後藤新平
同　男爵　山本達雄
同　犬養毅
樞密院副議長　男爵　平沼騏一郎
樞密顧問官　伯爵　伊東巳代治
同　子爵　金子堅太郎
同　海軍大將　財部彪
同　夫人
樞密顧問官　伯爵　珍田捨巳
同　夫人
同　男爵　山川健次郎
海軍大將　鈴木貫太郎
同　夫人
同　竹下勇
同　夫人
樞密顧問官　侯爵　黒田長成
同　男爵　古市公威
同　同夫人松室致

陸軍大將　鈴木荘六
同　奈良武次
樞密顧問官　伯爵　内田康哉
同　夫人
陸軍大將　宇垣一成
同　夫人
樞密顧問官　櫻井錠二
陸軍大將　武藤信義
同　夫人
樞密顧問官　男爵　田健治郎
同　夫人
同　荒井賢太郎
同　夫人
陸軍大將　井上幾太郎
同　夫人
陸軍大將　加藤寛治
海軍大將　同　夫人
同　男爵　安保清種
樞密顧問官　河合操
同　夫人
同　石原健三
同　夫人
陸軍大將　鈴木孝雄
樞密顧問官　子爵　齋藤實
同　夫人
同　鎌田榮吉
同　夫人

海軍大將　谷口尚真
陸軍大將　田中國重
同　夫人
金谷範三
同　夫人
以下退役後、後備役
陸軍大將　子爵　大島久直
海軍大將　男爵　日高壯之丞
同　夫人
同　吉松茂太郎
同　夫人
同　山下源太郎
同　夫人
同　山屋他人
同　有馬良橘
同　黒井悌次郎
同　野間口兼雄
同　栃内曾次郎
同　夫人
同　小栗孝三郎
同　井出謙治
同　夫人
同　百武三郎
陸軍大將　一戸兵衛
同　男爵　内山小二郎
同

同　秋山好古
同　本鄉房太郎
同　柴五郎
同　同夫人
同　男爵　大井成元
同　同夫人
同　大庭二郎
同　福田雅太郎
同　町田經宇
同　同夫人
同　尾野實信
同　同夫人
同　田中弘太郎
同　森岡守成
磯村年

以下親任官

特命全權大使　男爵　松井慶四郎
同　松平恒雄
同　同夫人
同　田付七太
同　田中都吉
行政裁判所長官　男爵　林權助
檢事總長　窪田靜太郎
小山松吉

會計檢查院長　水町袈裟六
同　同夫人
式部長官　公爵　伊藤博邦
大審院長　牧野菊之助
同　同夫人
關東長官　木下謙次郎
同　同夫人
政務總監　池上四郎
臺灣總督　川村竹治
同　同夫人
退職判事　横田秀雄
同　同夫人
貴族院議長　公爵　德川家達
同　同夫人
衆議院議長　元田肇
勳一等　侯爵　小松輝久
同　同夫人
同　侯爵　山階芳磨
同　同夫人
同　大島健一
同　同夫人
同　侯爵　久邇邦久
同　同夫人
同　侯爵　筑波藤磨

同　侯爵　華頂博信
同　同夫人
同　伯爵　鹿島萩磨

以下親任待遇

中樞院顧問　子爵　李夏榮
中樞院副議長　侯爵　朴泳孝
學習院長　福原鐐二郎
判事　馬場愿治
同　渡邊暢
勳一等　水野練太郎
同　同夫人
東京帝國大學總長　古在由直
同　同夫人
樞密院書記官長　二上兵治
同　同夫人
關東軍司令官　村岡長太郎
同　同夫人
臺灣軍司令官　菱刈隆
判事　手塚太郎
北海道帝國大學總長　佐藤昌介
同　同夫人
掌典長　公爵　九條道實
第十四師團長　宮地久壽馬
近衛同　長谷川直敏

第七同　渡邊錠太郎
第十一同　小泉六一
第六同　福田彥助
同　同夫人
中樞院顧問　伯爵　高義敬
第十九師團長　渡邊壽
佐世保鎭守府司令長官　古川鈊三郎
橫須賀鎭守府司令長官　吉川安平
第十六師團長　松井兵三郎
同　同夫人
行政制度審議會委員　馬場鍈一
同　南弘
同　高橋光威
同　同夫人
行政制度審議會委員　伯爵　小笠原長幹
同　同夫人
同　粕谷義三
同　川原茂輔
特命全權公使　芳澤謙吉
同　同夫人
第二十師團長　上原平太郎
同　同夫人
第九同　永井來
同　同夫人

第二師團長　赤井春海
第八同　眞崎甚三郎
同　夫人
判事　和仁貞吉
大禮使長官　公爵　近衛文麿
同　夫人
第十師團長　本庄繁
第十二同　金山久松
第二艦隊司令長官　大谷幸四郎
資源局長官　宇佐美勝夫
警視總監　宮田光雄
同　夫人
東京警備司令官　岸本鹿太郎
第一師團長　畑英太郎
第五同　原口初太郎
第四同　林彌三吉
京都帝國大學總長　荒木寅三郎
同　夫人

以下大禮使職員

內閣書記長官　鳩山一郎
宮內次官　關屋貞三郎
法制局長官　前田米藏
大藏次官　黑田英雄
鐵道同　八田嘉明
內閣書記官　長谷川赳夫
法制局參事官　金森德次郎
宮內事務官　白根松介
內藏頭　杉琢磨
內匠頭　東久世秀雄
主馬頭　西園寺八郎
宮內省參事官　大谷正男
侍從次長　河井彌八
宗秩寮總裁　仙石政敬
圖書頭　子爵
大膳頭　杉榮三郎
帝室會計審查局長官　上野季三郎
帝室林野局長官　入江貫一
外務次官　三矢宮松
內務同　吉田茂
陸軍同　潮惠之輔
海軍同　阿部信行
司法同　大角岑生
文部同　小原直
農林同　粟屋謙
商工同　阿部壽準
遞信同　男爵　四條隆英
京都府知事　桑山鐵男
福岡縣同　大海原重義
滋賀縣同　齋藤守圖
式部次長　堀田鼎
文書課長　渡邊達
儀式課長　渡邊直信
式部官　山縣武夫
同　西邑清
以下各省政務次官　大久保純
司法政務次官　濱田國松
商工同　吉植庄一郎
遞信同　廣岡宇一郎
鐵道同　上埜安太郎
海軍同　內田信也
陸軍同　竹內友治郎
文部同　山崎達之輔
內務同　秋田清
大藏同　大口喜六
農林同　東武
外務同　森格

其他

舞鶴要港部司令官　飯田延太郎
京都府內務部長　石田馨
同　警察部長　池田清
同　學務部長　福島繁三
同　土木部長　村山喜一郎
京都商工會議所會頭　稻垣恒吉

本市々會議員　淺山富之助
外五十名

主人側

京都市長　土岐嘉平
同　夫人
京都市助役　安川和三郎
同　夫人
同　岡田喜久治
同　夫人

御禮言上

土岐市長は十九日午前鹵簿奉送後同十時四十分より昨夜晩餐會に台臨あらせられたる左記各　宮殿下の御旅宿に伺候の上、一御禮を言上したり。

晩餐會（公會堂）ニ於ケル車輛整理規程

一　參集順路

琉水二條橋ヨリ（皇族殿下外國使節ハ東館玄關ヨリ其ノ他ハ本館玄關ヨリ）臨場サルヽモノトス

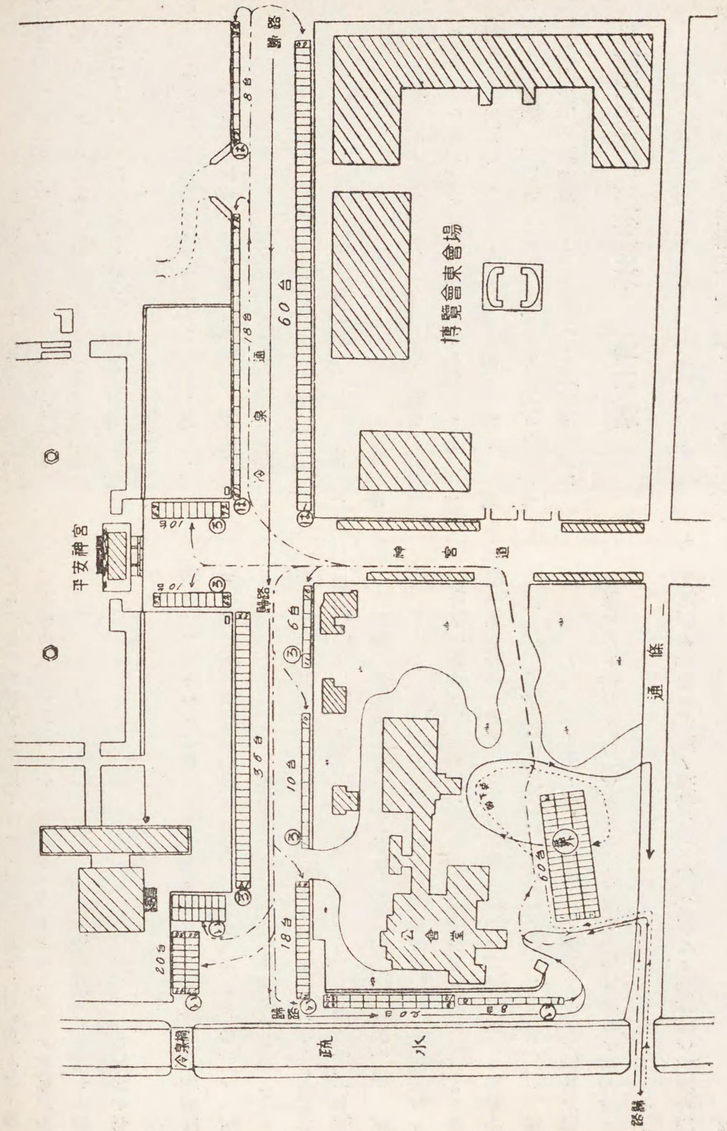
二　車輛置場

皇族殿下外國使節ノ御召自動車ハ前庭ヘ其ノ他ノ自動車ハ平安神宮前道路上ニ設ク（各置場ノ位置ハ別圖ノ通）

三　車輛整理方法

イ、降車場ニ自動車（皇族殿下外國使節ノ御召車ハ除ク）ガ到着シタルトキハ速ニ乘用者ニ合札中主人用ト記載セル部分ヲ切取リテ交付シ運轉手ニ對シテハ合札ノ殘部ヲ交付シ東館前通路ヨリ應天門

自動車置場明示圖



（京都市主催晩餐會自動車札）

號

運轉手用

裏面ニ御注意

一、指定置場ニ駐車スベシ

二、此ノ札ヲ離レザル間係員ノ就クコト

三、傍ヲ離レザル間係員ノ就クコト

四、待合室ニ於テ待機シ呼出ニ應ジ直ニ運轉ニ從フコト

五、自動車ノ移動ハ必ズ運轉手ニ命ジ自ラ運轉スルコトヲ禁ズ

六、發車ニ當リテハ必ズ交通巡査ノ指揮ニ從フコト

七、駐車中ハ必ズ給水口ヲ閉鎖スベシ

御主人用自動車札

（京都市主催晩餐會）

號

御歸りの節は御先方順に御車を廻へ御廻し致します

通ヲ平安神宮前ニ進行セシメ各指定置場ヘ誘導整列セシムルモノトス

ロ、置場指定ハ到着順トシ(い)(ろ)(は)各班ノ順序ニ置場ヲ指定スルコト

但シ新聞班ノ自動車相當多數ニ上ルトキハ(ろ)班置場ヲ之ニ充ツ

ハ、指定置場ニ於ケル車輛ノ整理方法ハ左ノ通リ

(い)班　ハ「一號ヨリ二八號迄公會堂西疏水端通路東側ヘ南向ニ」「二十九號ヨリ四六號迄ハ公會堂裏道路南側ヘ北向ニ一列横隊」『四七號ヨリ六六號迄ハ武德會前道路北側ヘ南向ニ二列横隊』『六七號ヨリ八二號迄ハ同所道路東側ヘ西向ニ二列横隊」

(ろ)班　ハ「一號ヨリ一六號迄ハ公會堂東館裏道路南側ヘ西向ニ一列縦隊」「一七號ヨリ五二號迄ハ同所道路北側ヘ南向ニ一列横隊」「五三號ヨリ六二號迄ハ應天門前西側ヘ東向ニ一列横隊」「六三號ヨリ七二號迄ハ同所東側ヘ西向ニ一列横隊」

(は)班　ハ「一號ヨリ六〇號迄ハ平安神宮神苑前道路南側ヘ北向ニ一列横隊」「六一號ヨリ八六號迄ハ同所道路北側ヘ西向ニ一列横隊」

ニ各々整列セシムルコト

四　運轉手ニ對スル注意事項

イ、指定置場ニ到着シタルトキハ降車場ニ於テ交付セル大型合札ヲ車輛ノ前方給水口ニ小型合札ハ運轉手ノ胸部ニ各表示シ居ルヤ否ヤヲ檢シ表示シ居ラザル者ニ對シテハ直チニ表示セシムルコト

ロ、車輛置場到着後ハ退散迄車輛ノ傍ヲ離レシメザルコト

五、退散ノ順序及順路

(い)(ろ)(は)ノ番號順序ニ繰出シ疏水端ヨリ本館玄關ヘ廻シ順次退散セシムルコト

第二節　大禮參列員招待園遊會

本市奉祝事業として開催せる大禮參列員招待園遊會は、本市の諸行事中最も大なる事業だけに、其の施設に、準備に、さては接待方法等極めて周到なる用意と努力とを要し、係員は殆ど不休の狀態にて之に當り、時には敞宵事務を執りし事も少々ならず、頗る繁劇に追はれたりしが、各般の施設其のよろしきを得て幸に遺憾なきを得たり其概要次の如し。

一　場　所　植物園(洛北)

二　日　時　十一月十八日正午

三　招待者範圍及案内狀の發送

(一)　各　皇族殿下を除く大禮參列諸員其他

(二)　案内狀の内容形式共凡て宮内省と打合せの上印刷は東京に於てなしたり

(三)　參列員の範圍容易に決定されず、十月末に至りて漸く宮内省相馬式部官より參列者名簿の送附を受けたり、然るに右名簿は唯氏名を宮中席次順に掲げられたる爲本市にては更に住所をも加へたる招待者名簿に改め作製したり、

(四)　案内狀總數は二、三四六人にして外に市會議員、市有功者、篤志者、市政記者(以上夫人同伴)は何れも主人側として案内せり。

大禮參列員招待園遊會場　(植物園)

上　同

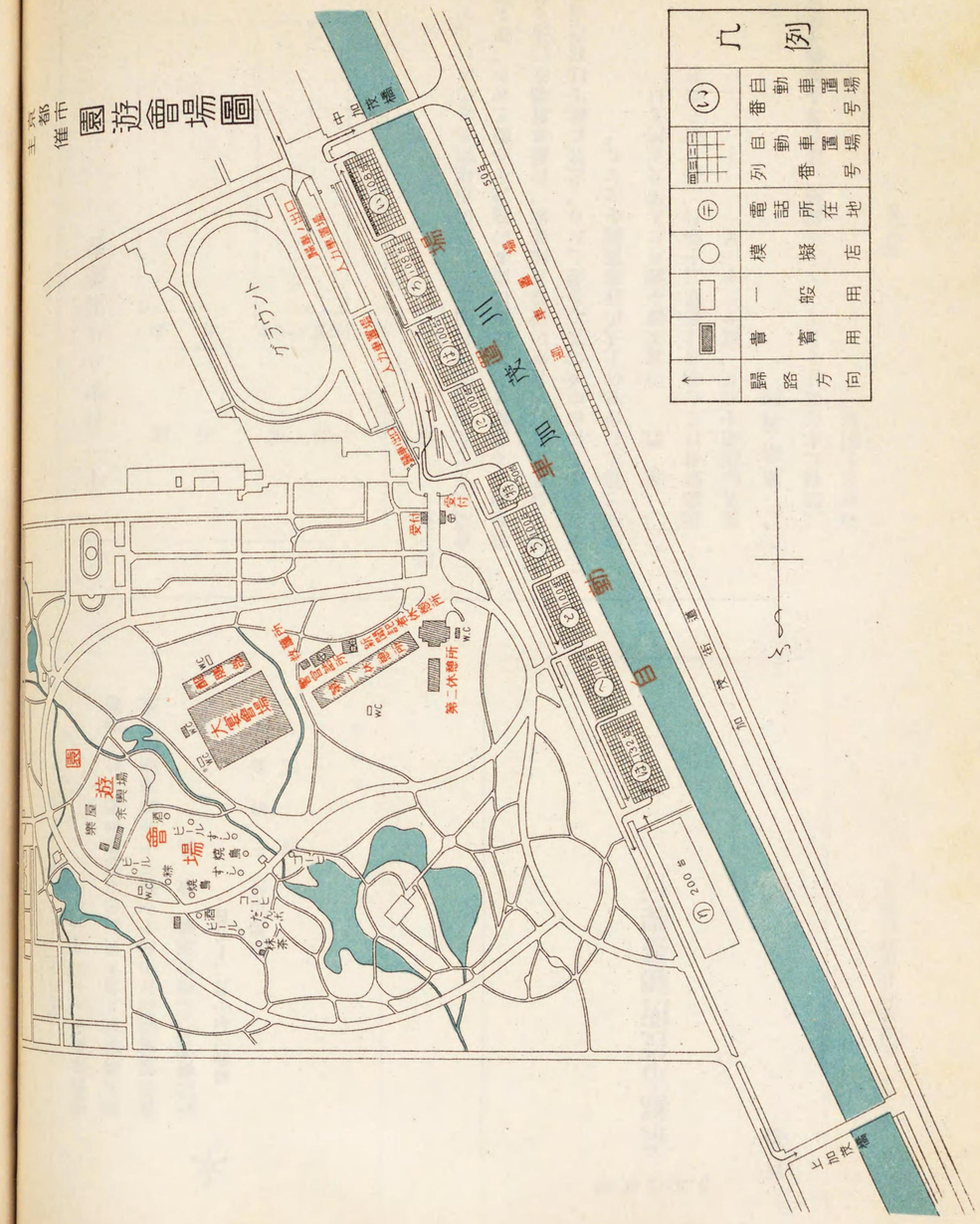
大禮參列員招待園遊會場　（植物園）

同　上

大禮參列員招待園遊會場　（植物園）

同　上

主催都市 園遊會場圖


凡例
歸路方向
書簡
一般
模擬店
電話所在地
自動車置場
列自動車置場
番自動車置場
中仙橋
三宅坂
三宅坂
三宅坂

謹啓陳者來ル十一月十八日
御大禮奉祝ノ爲大典記念京都植物園ニ於テ園遊
會相催候間同日午前十一時三十分御來臨被下度
此段御案内迄得貴意候　敬具

昭和三年十月二十五日

京都市長　土岐嘉平
同　清子

乞貴答

郵便はがき

官製

京都市役所祕書課行

第二節　大禮參列員招待園遊會

十一月十八日園遊會

貴名	諾否

令夫人貴名	諾否

四、設　備

會場に充てたる洛北植物園は、一二三の小建物あるのみにしてかく多數を迎ふる設備としては更に幾多の施設を必要とせり、卽ち園遊會場の設備より、大食堂の設備及休憩所、自動車置場等に渉り數千人を收容するには中々の苦心を要したり、之等に就ては宮内省及府警察部と豫め打合せの上次の計畫實施をなせり。

(一)　綠　門　　中賀茂橋を渡りたる所及正門入口
松葉張付けとし前者は經間二十四尺、高サ四十六尺
後者は經間十八尺、高サ三十一尺

(二)　道路裝飾
二間毎に木の支柱を立て、モール國旗、造花等を裝飾す延長兩側約百六十間宛

プログラム

3. 11. 18
京都植物園

折　目

○　○

市　都　京

宴席ヲ列

祝宴
＊＊
園遊會
＊＊
餘興

折　目

舞　東山名所
松本富勇　松本時子　池田時榮　米田小まさ　奥山富喜子　奥村子から　中村一樂　松山多美子
濱歌　田里勇　小川福葉　齋藤豆力　辻三味線　本貞子　西川竹吉　藤井絹葉

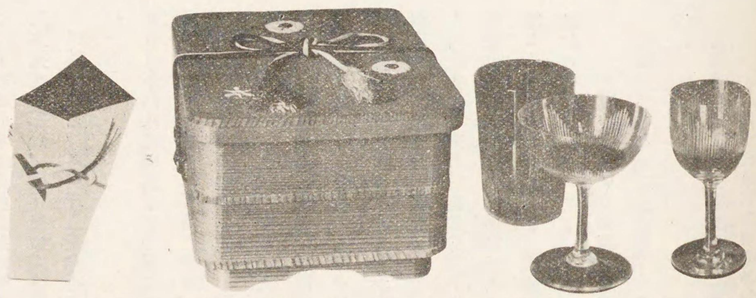
舞　菊
片山春子

舞　紅葉の賀
井上久龍　大谷勝鶴　中村からこ　松本福鶴　野口里鶴　金川福太郎　五十嵐豐香
濱歌　田里勇　小川福葉　齋藤豆力　辻三味線　本貞子　西川竹吉　藤井絹葉　武田花子

（三）受付　天幕張、三方幕張り
（四）記念館　入口に菊花を飾り紅白の幕を玄關に張る
（五）第二休憩室　天幕張、七十五坪
（六）第一休憩室　同　四百坪
（七）新聞記者詰所同　三十坪
（八）警察官詰所　同　五十坪
（九）救護所　同　十五坪
（一〇）大宴會場　同　千八十坪
食卓椅子共三千百七十脚を用意し、天井はモール釣玉等を飾り、内部の中央東詰に音樂演奏壇を配置せり
主賓主人席近くには、マイクロホンを備へ付く
（一一）配膳室天幕張、二百四十坪
（一二）餘興場同　三十坪、附屬同　十坪
尚電話五ヶ所及水道の臨時設備を爲したる外、模擬店、便所（普通のもの四棟、水洗用三ヶ所）も適當なる設備を爲したり

五、饗宴方法

（一）獻立
先づ料理に就ては（種類、獻立、饗宴方法、卓上飾、飲料等）總て宮内大膳寮の指示を受け、料理は二重箱（別紙寫眞）とし、飲料はシャンペン、赤葡萄酒及炭酸水等を配置したり
（二）給仕人
給仕人は東京東洋亭に一任し約二百人とせり
（三）席次



本市園遊會獻立

大食堂に於ける席次は中央の列は丸卓子とし、各四人掛として之を「メインテーブル」としたり
一般は各イ、ロ、ハ、ニ、ホヘ、ト、チ、リ、ヌの十列として、別表の如く着席し得らるゝやうにしたり
（四）喫茶
食堂の食事を終つたる向は漸次北部の園遊會場に導き、其の途次に「コーヒー店」を用意して喫茶し得らるゝ設備とせり
（五）園遊會摸擬店（摸擬店には食券を用ひず）

酒	三店
ビール	三店
壽司	二店
燒鳥	二店
抹茶席	二店

外にだんご、粽、果物等は藝妓二十人を、大原女姿に仕立て、籠に入れさせて配布せしめたり。

（六）抹　茶　席

前大正大禮の例に倣ひ、裏千家宗匠千宗室の指圖を受け特別抹茶席を設けたり、當日は同宗匠夫妻及幹部五名は弟子たる市内有力者の令嬢十五名を指揮して接待に當りたり。

（七）酌　人

京都遊廓組合に交渉の上、二〇〇人を七遊廓に割當て、全部紋服にて出場せしめたり。

（八）餘　興

別紙プログラムの通、祇園名妓の舞二番ニ、片山春子の此の光榮に因みて振付けたる「菊の舞」等を演して、大喝采を博したりしが、尚本園遊會を機會ニして、祇園山鉾の出鉾を企てたるに、幸に關係者の盡力により、岩戸山鉾及放下鉾二臺を園遊會場に陳ね、以て光彩を添へたるは、又以て京都祇園會を偲ぶべき恰好の催にして、多大の感興を與へたり。

（九）外國特派大使竝に使節接待

始め外國特派大使竝に使節にも同樣の案内をなせしが、特に宮内省側の意見により同日は午後六時より晩餐會の企もあり、晝は成べく簡單自由なる方法を採るこニゝし、又メインテーブル等の席次の關係も複雜ニなるべきにより、豫定を變更して外國貴賓の一行は特に食堂内に案内せず、北部池畔に設けたる天幕張園卓子に招じ食堂同樣の料理飲物を用意して接待せり。

（一〇）軍　樂　隊

陸軍戸山學校の軍樂隊三十五人出場

六、準備及狀況

食堂及園遊會の設備は、十一月十四日より錢屋商會が詰切りて準備し、十七日の夜は係員ニ共に全く徹宵の作業を行ひ、午前九時迄に全部完成せしが、尚宮内省大膳寮秋山厨司長は、十七日夜十時頃より係員ニ共に、各料理人及會場の現場に就き周密なる注意を與へられたり。

當日は午前八時係員は各部署に就く、同十時半頃より來會者續々來場、自動車を所定の場所に置き、受付にて徽章、プログラムを手にしながら兩助役の挨拶を受け、更に貴賓室前にては土岐市長の挨拶を受け、第一、二の休憩所に入る。

十一時半には殆んご滿員の狀況に達し、自動車のそれ〳〵加茂磧に整列されたる等未曾有の壯觀を呈したり、正午振鈴によりて一同入場、次に陸軍戸山學校軍樂隊奏樂の裡に開會す、「シャンパン」葡萄酒等頻りに酌まれて宴酣の頃、土岐市長は起ちて挨拶をなし、次に小川鐵相より來賓代表の答禮あり、終りて北東部の園遊會に移る、園遊會場には前述の餘興數番あり、洛北の野は瑞氣ニ歡喜に滿ち遺憾なく奉祝氣分を漲らせ、大盛況裡に午後五時無事終了を告ぐるを得たり。

園遊會場トシテ植物園使用ノ件

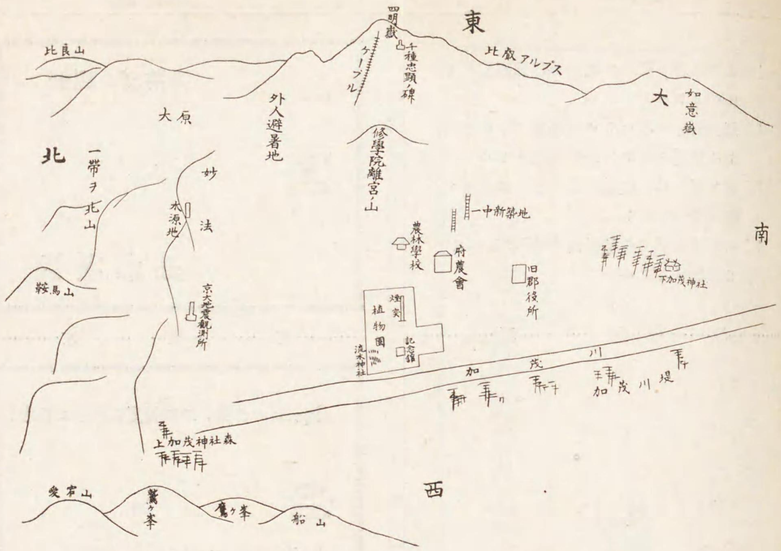
昭和三年八月十六日

京都市長　土岐嘉平

大典記念京都植物園長　郡場寛殿

大典記念京都植物園使用許可願（一）

來ル十一月十八日本市主催大禮參列員招待園遊會場トシテ左記ノ通



園遊會場のパノラマ

車輛整理の概要

壹千臺ノ自動車ト二百臺ノ人力車ヲ收容スル計畫ノモトニ、自動車置場ハ鴨川河原ニ人力車置場ハ同園グランド内ニ夫々相當ナル工事ヲ施シタリ。

乍然右計畫ニ依ル自動車ノ配列ハ退散ノ場合ニ於テ大半ハ現場ヨリ自由ニ乘出スコト困難ノ傾キアリタルト斯ノ如キ多數ノ車ヲ收容スル要ナキ見込立チタルヲ以テ、各班共二列毎ニ一列ヲ除キテ發着ヲ自在ナラシメ又混雜ヲ避クルタメ高位顯官ニ對シテハ豫メ車輛標識ヲ送付シ一々之ガ位置ヲ定メ置キ尚外賓用ハ園内ニ設

（京都市主催園遊會）

御主人用人力車札

御綴りの節は御迷惑ながら指定置場まで御歩きの上御乘車を願ひます

號

裏面ニ御注意

人力車車夫用

號

（京都市主催園遊會）

御主人用自動車札

御綴りの節は配車係員に御示し被下度

ノ列

裏面ニ御注意

運轉手用

ノ列

（表面）

一、大型番號札ヘルメット前方見易キ箇所ニ掛ケ必ズ表示スル事

一、修ヲ施シ離レザル胸部ニ着ケ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、此ノ札ヘ總テ係員ノ指示ニ從ヒ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、指定置場ニ着ケ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、指定置場及置場ヨリ乘出ス

（裏面）

一、集スルコトヲ西ヨリ流レ靜物園正門ヘ參

一、中寬茂稼

一、指定置場ニ着ケ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、此ノ札ヘ總テ係員ノ指示ニ從ヒ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、修ヲ施シ離レザル胸部ニ着ケ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、大型番號札ヘルメット前方見易キ箇所ニ掛ケ必ズ表示スル事

一、指定置場ニ着ケ待合中ハ自動車ノ前ニ立ツ

一、指定置場及置場ヨリ乘出ス

貴園使用許可相成度此段及御願候也

記

一　使用ノ目的　大禮參列員招待園遊會場トシテ
一　使用ノ期日　昭和三年十一月十八日
一　使用ノ地域　全　園
一　構作物ノ構造　大小天幕約四十張位ノ豫定、園遊會、必用ナル簡單ナル設備及門前ニ大綠門一

以　上

植發第五七號（一）
昭和三年八月二十九日

大典記念　京都植物園

京都市庶務課御中

祕乙三八號ヲ以テ來ル十一月十八日本市主催大禮參列員招待園遊會場ニ當園地使用方願出有之候期日ニ於テハ差支無之候モ豫メ左記事項詳細、御協議致シタル上、許可致度候條御繁務ノ折柄御迷惑トハ存シ候ヘ共一度御來園ノ上篤ト御協議致シ度此段及回報候也
追テ御來園ニ際シ豫メ日時御一報煩シ度申添候

記

一　園地使用當日ハ一般入場者ヲ禁止スルヤ否ヤノ件
一　工作物設置場所ノ面積（坪數）竝ニ園内道路ヨリ工作物設置場ニ至ル臨時通行道路設置及ヒ夫等復舊ノ件
一　其他園内ニ於ケル地物損傷ノ場合ニ於ケル賠償ノ件

以　上

植發第九二號（二）
昭和三年十一月八日

大典記念京都植物園長　郡　場　寬

京都市長　土岐嘉平殿

祕乙第三八號及禮接第一五號ヲ以テ園地使用願出ノ件左記ノ條項ニ依リ許可ス

記

一　設備ハ願書通リナルコト
一　園地使用後ハ現狀復舊ノ事
一　植物其他園地内工作物類損傷ノ場合ハ辨償ノコト
一　記念館使用ニ付テ本園管理使用規程第六條ニ依リ別ニ使用料金拾圓納付サルヘキ事

右

禮祕第十二號
昭和三年十月二十日

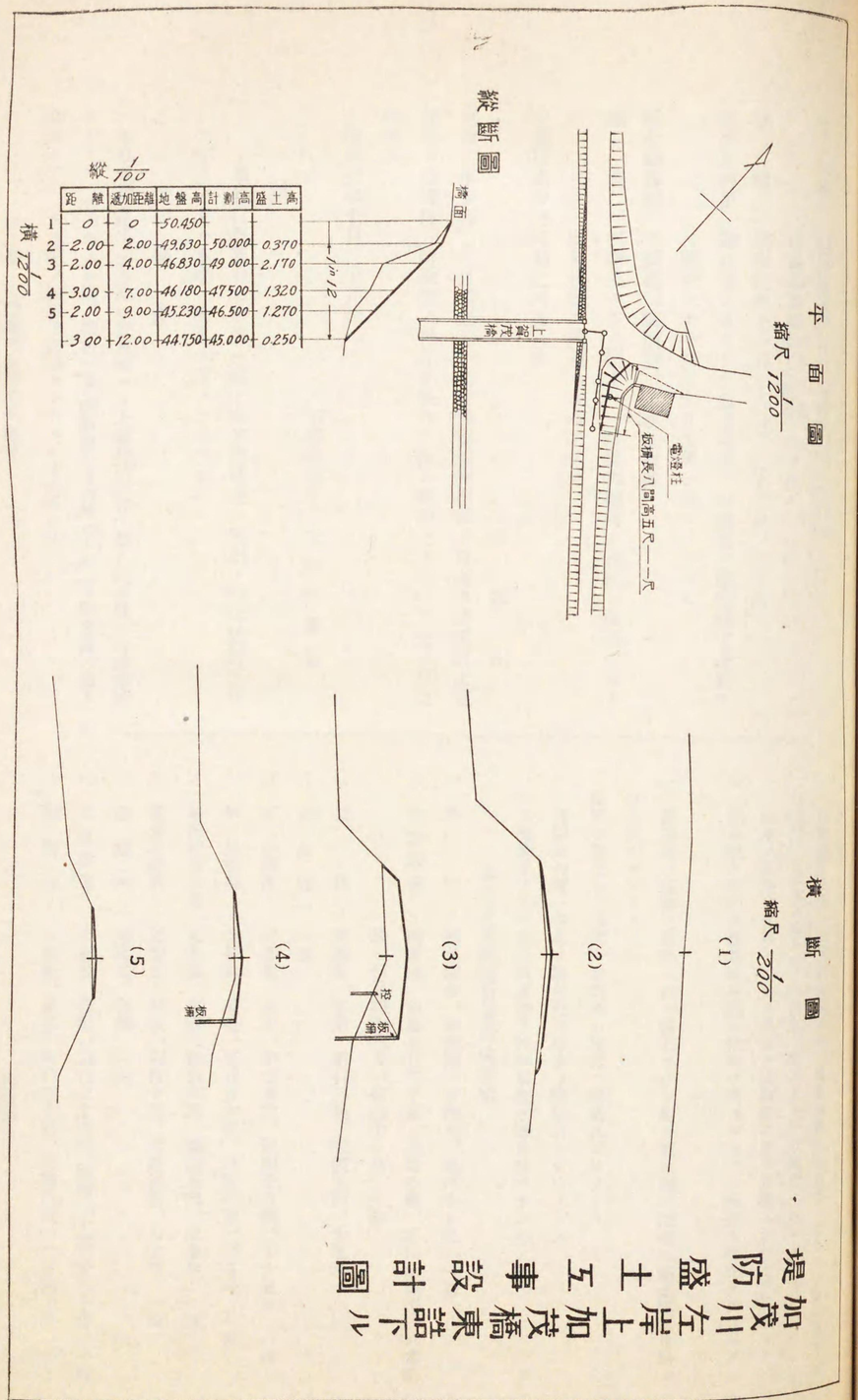
京都市長　土岐嘉平

京都府知事　大海原重義殿

本市主催ニ係ル園遊會ヲ植物園内ニ開催致候ニ付テハ自動車置場トシテ左記ノ通鴨川河川敷一時占用致度候條御許可相成度及申請候也

記

河川名　鴨　川
場　所　上京區下鴨今井町中加茂橋上流左岸
種　別　河川敷竝堤塘切取リ



目的　自動車置場及出入口通路

面積　河川敷長三百十七間幅自十三間五分至十六間五分
堤塘切取幅自五米至十三米五　六ヶ所

期間　昭和三年十一月十八日、二十二日、二日間

着手及終了　御許可ノ日ヨリ十五日以内、但復舊ハ期間滿了後直チニ着手シ十一月三十日復舊ヲ終ルモノトス

添付圖書類　平面圖、斷面圖、工事仕樣書

摘要　堤塘上ニアル樹木ハ一時植物園内ニ移植シ復舊工事ノ時元位置ニ植栽スルモノトス

京都府指令三河第二八五八號

京都市

昭和三年十月二十日禮祕第十二號願鴨川河川敷ニ自動車置場竝上賀茂橋東詰堤防一時取擴ノ件左記條件ヲ附シ昭和三年十一月三十日迄許可ス

昭和三年十月二十九日

京都府知事　大海原重義

記

一　工事施行復舊共本府第一區土木工營所長ニ届出テ指揮監督ヲ受ケ完了ノ上ハ本廳ノ檢査ヲ受ケラルベシ

仕樣書

一　本仕樣書ハ鴨川筋左岸中賀茂橋ヨリ上流長約三百十間ノ洪水敷ニ自動車置場トシテ一時占用スル爲、堤防一部（圖面揭示ノ個所六ヶ所）ヲ斷面圖ノ通リ盛切ヲナシ、自動車ノ通路ヲ新設セントスル仕樣書トス

第二節　大禮參列員招待園遊會

一　本工事ニ於テ工事施行上必要ナラザル以外ノ個所ハ現狀ノ儘トス

一　横斷通路新設ノタメ堤防切取リ、現在植栽セル竝木ト竝木トノ間ヲ切下ゲ（支障アル竝木五本ヲ除ク）竝木、障害ナキヤウ施行スルモノトス

一　竝木ノ道路、支障アルモノ五本ハ植物園ニ於テ移植スルコトヲ依頼セリ

一　洪水敷ハ草刈瓦礫其他車輛ニ危險ヲ與フルモノヲ取除キ掃除ナスモノトス

一　使用後ノ復舊ハ現狀ノ通リ盛土ヲナシ能ク搗キ固メ法面ハ筋芝幅六寸毎ニ仕上グルモノトス

尙洪水敷芝生、損傷セル個所ハ相當ニ復舊スルモノトス

一　堤防法勾配ハ現在ノ法勾配ニ取合フ樣施工スルモノトス

一　工事竣工ノ上ハ殘土石其他ヲ外ニ取運ビ跡片付ヲナスモノトス

本市主催園遊會場設備說明

い　綠門　杉葉張付、但徑間二十四尺、高四十七尺　一基

ろ　道路裝飾　圖面通、但延長百三十間、道路西側、正門前綠門、杉葉張付、但徑間十八尺、高三十一尺　一基

は　受付　天幕張、幕張、桁行三間、梁間五間、十五坪　二棟

に　記念館　一棟

ほ　第二休憩所　天幕張、幕張、桁行五間、梁間十五間、七十五坪　一棟

へ　第一休憩所　天幕張、幕張、桁行五十間、梁間八間、四百坪　一棟

と　新聞記者詰所　天幕張、幕張、桁行六間、梁間五間、三十坪　一棟

ち　警備官詰所　天幕張、幕張、桁行十間、梁間五間、五十坪　一棟

り　救護所　天幕張、幕張、一棟

ぬ　大宴會場　天幕張、幕張、桁行三十六間、梁間三十間、千八十坪　一棟

る　配膳室　天幕張、幕張、桁行三十間、梁間八間、二百四十坪

（い）水　道　現在植物園内ニ敷設シアル水管ヨリ最端距離ヲ引ク
（ろ）電　話　警官詰所一、記者詰所一、受付一、模擬店一
（は）阿　屋　一棟
（に）貴賓便所　簡單ナル水洗式便所ヲ取付ク　三棟
（ほ）一般便所　四棟
（へ）蛸　釣　一本
（と）模擬店　桁行三間、梁間二間、六坪　十六棟
（ち）餘興場　天幕張、幕張、床板張、桁行十間、梁間三間、三十坪　一棟
（り）藥　屋　天幕張　一棟
（ぬ）來賓者出口道路　幅六尺、徒歩ニテ出入ス
（る）自動車及人力車歸路
（を）材料自動車運搬道路
（わ）移植ヲ要スベキ樹木ニハ白布ヲ巻ク

園遊會（植物園）ニ於ケル車輛整理規程

一　參集順路

中賀茂橋ヲ渡リ植物園正門ヨリ入場スルモノトス

二　車輛置場

自動車置場ハ鴨川河原ヲ以テ之ニ充テ（い）（ろ）（は）（に）（ほ）（へ）（と）（ち）（り）ノ九班ニ分ツ

人力車置場ハ同園グラウンド内通路ノ西側ニ設ク（各置場ノ位置ハ別圖ノ通）

三　車輛整理方法

イ　降車場ニ自動車人力車ガ到着シタルトキハ速ニ運轉手輓夫ニ對シ待合ス者ナルヤ否ヤヲ瞭メ待合ス自動車人力車ニ對シテハ乘用者ニ合札中主人用ト記載セル部分ヲ切取リテ交付シ運轉手輓夫ニ對シテハ合札ノ殘部ヲ交付シ自動車ハ鴨川河原ニ指定入口ヨリ入ラシメ人力車ハグラウンド内ニ入ラシメ各指定置場ヘ誘導整列セシムルモノトス

ロ　直チニ歸路ニ就ク自動車人力車ハグラウンド内通路ヨリ川端通リヲ南又ハ中賀茂橋通リヲ東ヘ退散セシメ中賀茂橋ヲ渡ラシメザルコト

ハ　置場指定ハ到着順ニいろはにほへとち各班の順序ニ置場ヲ指定スルコト

ニ　指定置場ニ於ケル車輛整理方法ハ左ノ通リ

自動車（鴨川河原）

1　いろ班ハ南向ニ一列九臺ヲ側面縱隊ニ各十二列（各一〇八臺）
2　はに班ハ南向ニ一列十臺ヲ側面縱隊ニ各十列（各一〇〇臺）
3　ほ班ハ北向ニ一列十一臺ヲ側面縱隊ニ各十二列（一三二臺）
4　へ班ハ北向ニ一列十一臺ヲ側面縱隊ニ各十列（各一一〇臺）
5　とち班ハ北向ニ一列十臺ヲ側面縱隊ニ各十列（一〇〇臺）ニ各々整列セシムルコト

人力車（グランド内西側）

先着順ニ南方ヨリ南向ニ一列三臺宛ヲ側面縱隊ニ順次整列セシムルコト

四　運轉手輓夫ニ對スル注意事項

イ　指定置場ニ到着シタルトキハ降車場ニ於テ交付セル大型合札及小型合札ヲ各指定（大型合札ハ自動車前方給水口人力車前方見易キ箇所小型合札ハ運轉手輓夫ノ胸部）ノ通リ表示シ居ルヤ否ヤヲ檢シ表示シ居ラザル者ニ對シテハ直チニ表示セシムルコト

ロ　車輛置場ニ到着後ハ直チニ晝食ヲ取ラシメ退散迄車輛ノ傍ヲ離レシメザルコト

五　迎ヒ車ハ鴨川西側堤防上ニ（中賀茂橋以北）中賀茂橋詰ヲ先頭トシ順次一列縱隊ニ整列セシムルコト

六　退散ノ順序及順路

イ　車輛ヲ待セシ者ハ徒歩ニテ各指定置場ニ至リ乘車セシメ左ノ順路ニ依リ退出セシムルコト

自動車ニアリテハ

（い）（ろ）（は）（に）班ハ指定出口ヨリ南進セシメ
（ほ）（へ）（と）（ち）（り）班ハ北進セシメテ上賀茂橋ヨリ鴨川西堤防ヘ渡ラシムルコト

人力車ニアリテハ

グランド南出口ヨリ退出セシメ可成川端通ヲ南ヘ退散セシムルコト

ロ　迎ヒ車ニ乘車セントスル者ニ對シテハ中賀茂橋ヲ徒歩ニテ渡ラシメ適宜乘車セシムルコト

大禮奉祝園遊會招待者

外　賓

獨國特派大使	ウヰルヘルム、ヴルフ	
隨　員	男爵	フオン、シエーン
同	夫	アルベール、ド、バツソム、ピエール
白國特派大使		
隨　員	人	アルベール、ド、セルジエル
米國特派大使		チヤールス、マクヴエー
同	夫	
隨　員	人	エドヴイン、エル、ネヴイル
同	夫	
陸軍中佐		チヤーレス、ビー、バーネツト
同	夫	
海軍中佐		ジヨージ、マツコール、コーツ
同	夫	
英國特派大使		サー、ジヨン、アントニー、セシル、テイレー
同	夫	
海軍大佐		クラウズリー、ヴアリル、ロビンソン
同	夫	
陸軍中佐		エル、アール、ヒル
同	夫	
		エヌ、エイチ、エイチ、チヤールス
同	夫	
		ロベール、ジユール、ダニエル、ド、ビー
佛國特派大使		ジヤン、フエルヂナン、アドルフ、ドブレー
隨　員	同　夫	
	陸軍砲兵中佐	ガストン、エルネスト、ルノンドー

第二節　大禮參列員招待園遊會

同　人夫
海軍中佐　ロザテイ
同　人夫
ブラジル國特派大使　アー、ド、ブリエンヌ、フエイトーザ
同　人夫
隨　員　カルロス、エリアス、ラ、トーレ、リスボア
同　人夫
海軍中佐　カルロス、アウグスト、ガストン、ラヴイーニユ
同　人夫
ソヴイエト聯邦特派大使　アレクサンドル、トロヤノウスキー
同　人夫
隨　員　ボール、アニケイエフ
同　人夫
海軍大佐　ジアン、コジアノフ
同　人夫
パジル、スマギヌ
同　人夫
男爵　ボンペーオ、アロイージ
レオネ、ワイルシヨツト
汪　榮寶
江　洪杰
同　人夫
伊國特派大使　ペドロ、カルテイン、イ、デル、サー
隨　員　スカバイエロ
支那國特派大使　エー、ロエ、ド、ルヴブ
隨　員　オスカル、アントン、ヘルマン、エーヴエロフ
西班牙國特派大使　ウヰダール、バツゲ
隨　員　イエー、セー、バブスト
ル、ヨンクヘール、エ、ゲー、ド、セリエール
同　人夫
瑞典國特派使節　ヘンリツク、デ、カウフマン
隨　員　同　人夫
蘭國特派使節　ボールル、シエール
隨　員　ジヨセ、ダ、コスタ、カルネイロ
丁抹國特派使節　同　人夫
隨　員　アンテロ、カレイロ、デ、フレイタス
ボルトガル國特派使節　同　人夫
隨　員　ドクトル、マリオ、ルイズ、デ、ロス、
アルゼンチン國特派使節　イヤノス
隨　員　オクタヴイオ、ピント
同　人夫
暹羅國特派使節　ピヤ、スバン、ソムバツテイ
隨　員　同　人夫
ルアン、ボヴオラ、スネハ
同　人夫
瑞西國特派使節　エミール、トラヴエルシニー
隨　員　アルフレツド、ブリユンネル
チリ國特派使節　エンリケ、ガイアルド、ニエト
隨　員　セザレオ、アルヴアレス、デ、ラ、リヴエラ
同　人夫
陸軍中佐　アルテユロ、エスピノザ、ミユジカ
グスターフ、ジヨン、ラムステツド
フウルウツシ、フウアド、ベー
同　人夫
諸國特派使節　ヨハン、ウヰルヘルム、ミヘレツト

大禮參列諸員

官職	爵位勳等	氏名
式部長官	公爵	伊藤博邦
	勳一等	伊藤乙次郎
	同　夫人	
廣島地方裁判所長		伊藤久次郎
海軍造機少將		伊藤孝次
福島高等商業學校長		伊藤仁吉
貴族院議員	男爵	伊藤安吉
同	男爵	伊藤文吉
衆議院議員		伊藤仁太郎
大禮使事務囑託		伊藤賢三
仙臺鐵道局長		伊藤勘助
樞密院顧問官		伯爵　伊東巳代治
		同　夫人
長崎縣知事		伊東喜八郎

陸軍大將　元帥、海軍大將　同　衆議院議員　同　鐵道局參事　同　貴族院議員　大禮使典儀官將　陸軍中將　大禮使典儀官　貴族院議員　陸軍中將　大禮使典儀官　同　貴族院議員

勳一等　子爵　伊東祐亨　伊東祐麿　伊東祐保　伊東祐久　原敬　坂本俊篤　伊藤博文　勳一等　子爵　伊藤博邦　伊藤博精　伊藤博恭　伊藤博義　同　伊藤博明　同　井上勝之助　井上馨　侯爵　井上勝　井上光　井上省三　井上角五郎　井上良馨　大人　井上雅二　男爵　井上勝之助　大禮使事務官　同　貴族院議員　同　井上馨　侯爵　井上勝　井上光　井上省三　井上角五郎　井上良馨　大人　井上雅二　男爵　井上勝之助

衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　

第二節　大禮參列員招待同並帶

舞鶴要港部司令官	海軍少將	伯爵	貴族院議員	侍從武官	東京帝國大學教授	京都市立第一工業學校長	大禮使事務官	大禮使典儀官	大禮使事務嘱託	檢事	貴族院議員	同衆議院議員	海軍少將	第二編　第八章　接待	
衆議院議員	貴族院議員	子爵	臺灣總督府高等法院檢察官長	鹿兒島縣會議長	衆議院議員	大禮使事務官	貴族院議員	同衆議院議員	閑院宮御用掛						
飯磯磯磯同磯磯磯磯今今今今今今今今今今今今今今今今															
田野辺幸夫村部部部喜右衛門															
延庸次清															
太郎幸浩															

岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩															
森波手川本本城松切下下村村倉倉崎崎崎崎															
彌武嘉輿周武隆玄郎重太家通一道具一治彌達															
助信雄助平助德十吉雄郎一世木俱榮高郎太人															

京都市立第一工業學校長	大禮使事務官	京都市京極尋常小學校長	伊藤公爵家扈長	大禮使事務嘱託	朝鮮總督府殖産局長	京都帝國大學教授	廣島控訴院長	京都帝國大學教授	朝鮮總督府通信技師	貴族院議員	閑院宮御用掛	同貴族院議員	臺灣總督府通信技師	衆議院議員	貴族院議員
池池岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩岩															
田内森波															
田寅二誠彌															
弘郎一助彦介郎太人															

衆議院議員	宮内大臣臣	陸軍省馬政課長事	愛媛縣知事	京都帝國大學教授	京都市役所保健部長	高松宮別當心得	富山縣會議長	衆議院議員	沖繩縣知事	同衆議院議員	學習院教授	海軍中將	貴族院議員	伊奈川縣會議長	第四大隊長
公爵	勳一等														
一同一同一市市同市市石市同市飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯															
松夫定吉人孝人郎助三人彦郎吉清人郎衛郎郎信郎啓恒夫郎	篠本瀬村來川川川倉村尾塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚塚														
夫喜夫達川夫淸平藤春久助才															
實德慶源乙次岩次兵次知太															

今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今															
村内松上田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田															
悉廣時四三七龜秀龜長政敬季右衛仲															
新太郎正和人郎助衛雄吉淸治康淸時八蕾門政博															
武均志吉															

衆議員議員	一宮房次郎
東京帝國大學教授	稻田龍吉
遞信省工務局長	稻田三之助
貴族院議員	男爵　稻田昌植
	勳一等　稻垣三郎
	同　夫人
貴族院議員	子爵　稻垣太祥
同	稻畑勝太郎
朝鮮總督府内務局長	生田清三郎
衆議院議員	生田和平
佐賀高等學校長	生駒萬治
臺灣總督府臺中州知事	生駒高常
仙臺鐵道局參事	生野源太郎
	勳一等子爵　入江爲守
	同　夫人
大禮使參與官	入江貫一
京都府會議長	稻葉市郎衞門
農林省山林局長	入江魁
宮内省侍醫	勳一等　入澤達吉
	同　夫人
	勳一等　犬塚勝太郎
海軍中將	同　夫人　犬塚太郎

貴族院議員	勳一等　犬養毅
衆議院議員	同　夫人　板谷宮吉
判事	板谷順助
朝鮮總督府中樞院參議	板倉松太郎
貴族院議員	尹甲炳
同	子爵　五辻治仲
内務省地方局囑託	五十嵐甚藏
浦和高等學校長	五十嵐鐵三郎
	茨木清次郎
朝鮮在住者總代	勳三等　猪谷不美男
貴族院議員	亥角仲藏
檢　事	絲原武太郎
御靈神社社司	戊亥忠一
	出雲路通次郎
第四師團長	子爵　六條有直
	林彌三吉
	同　夫人
	勳一等男爵　林權助
	同　夫人　林鶴一
東北帝國大學教授	橋本秀信
皇族附武官	林健太郎
李王職事務官	

檢　事	林賴三郎
長崎醫科大學長	林郁彥
陸軍中將	林銑十郎
貴族院議員	林博太郎
慶應義塾大學總長	伯爵　林毅陸
	男爵　林忠一
貴族院議員	林平四郎
衆議院議員	林平馬
同	林路一
南洋廳事務官	林亮
李王職事務官	林健太郎
吉田神社宮司	林治一
陸軍士官學校長	林仙之
司法大臣	原嘉道
	同　夫人
宮中顧問官	原恒太郎
海軍少將	原敢二郎
貴族院議員	原保太郎
横濱市役所港灣部長	原靜雄
衆議院議員	原夫次郎
同	原修次郎
同	原惣兵衞
同	原耕
大禮使典儀官	原亮九郎
三重縣知事	原田維緝
衆議院議員	原田十衞
	原邦造
	男爵　原田熊雄
衆議院議員	原田佐之治
第五師團長	原口初太郎
	同　夫人
勸業銀行京都支店長	男爵　原口徠
京都帝國大學教授	濱田耕作
司法政務次官	濱田國松
	勳三等　濱田豐城
大禮使典儀官	濱田武
衆議院議員	濱口雄幸
	同　夫人
貴族院議員	濱口儀兵衞
京都帝國大學教授	濱部源次郎
海軍少將	濱野英次郎
貴族院議員	濱平右衞門
	濱岡光哲
大禮使參與官	八田嘉明
新潟高等學校長	八田三喜
陸軍參與官	八田宗吉

侍醫		八田善之進
貴族院議員	子爵	八條隆正
同		八馬兼介
	勳一等	花井卓藏
		同　夫人
醫官		花井善吉
貴族院議員	子爵	花房太郎
		花田仲之助
伏見宮御用掛		橋口琴子
		長谷信造
衆議院議員		花城永渡
近衛師團長		長谷川直敏
		同　夫人
靜岡縣知事		長谷川久一
大禮使事務官		長谷川赳夫
上京稅務署長		長谷川安治郎
福岡地方裁判所長		長谷川菊太郎
東北帝國大學教授		長谷部言人
貴族院議員		橋本圭三郎
同		橋本萬右衞門
大禮使事務囑託		橋本　群
遞信局長		波多野保二
海軍火藥廠長		波多野貞夫
京都帝國大學教授		波多野精一
騎兵第四旅團長		服部一三
貴族院議員		服部眞彦
判事		服部金太郎
		馬場愿治
		同　夫人
行政制度審議會議員		馬場鍈一
專賣局技師		馬場堅一
第一師團長		畑英太郎
		同　夫人
	勳一等	畑良太郎
		同　夫人
參謀本部第一部長		畑俊六
貴族院議員	侯爵	蜂須賀正韶
大禮使典儀官		蜂須賀正氏
	勳一等	萩野末吉
		同　夫人
	勳一等	埴原正直
		同　夫人
上田蠶糸專門學校長		針塚長太郎
東京帝國大學教授		春山作樹
大禮使事務官		畠山敏行
內閣書記官長		鳩山一郎

小樽高等商業學校長		伴房次郎
貴族院議員		坂西利八郎
京都帝國大學教授		羽田　享
山形高等學校長		葉山萬次郎
第三高等學校教授		半田正身
御歌所寄人		坂正臣
衆議院議員		秦豐助
侍從武官		蓮沼蕃
	男爵	華園眞淳
衆議院議員		坂東幸太郎
同		箸本太吉
同		英義彥
生糸檢查所技師		芳賀權四郎
	子爵	萩原員振
朝鮮總督府技師		榛葉孝平
內務事務官		挾間茂
	勳一等	西川虎次郎
		同　夫人
判事		西川一男
高知高等學校長		西川順之
大禮使事務囑託		西川俊元
衆議院議員		西村丹治郎
同		西村茂生
大禮使典儀官		西村宏恭
同		西邑清
桐生高等工業學校長		西田博太郎
特許局事務官		西田稔
德島縣會議長		西田隆喜
貴族院議員		紳六郎
衆議院議員		英太郎
地方技師		康夫
大禮使事務官		西山左內
文部省專門學務局長		西山政猪
陸軍中將		男爵　西島助義
		同　夫人
貴族院議員		西野元
		同　夫人
京都帝國大學教授		西內貞吉
東京衞生試驗所長		西崎弘太郎
貴族院議員		西久保弘道
同		子爵　西大路吉光
同		西洞院信意
同		西尾忠方
		男爵　西五辻文仲
衆議院議員		西方利馬
貴族院議員		西本健次郎

| | | |

樞密顧問官　正二位勳一等伯爵　伊藤博文

第二師團

大禮參列員招待國賓

珍田捨巳　人　貴族院議員　勳一等　子爵　男爵　同　侯爵　伯爵　勳一等　伯爵　同　侯爵　伯爵　勳一等　子爵　男爵　同　子爵　男爵　同　子爵　男爵　同

大禮使參與官		同夫人
京都帝國大學教授		大谷正男
貴族院議員		大谷亮吉
		大谷靖
	伯爵	大谷光暢
	勳三等	大谷嘉兵衛
貴族院議員		大谷尊由
大禮使事務囑託		大谷雄介
	勳一等	大島健一
帝室博物館總長		大島義脩
陸軍中將		大島又彥
高知縣知事		大島破竹郎
大禮使典儀官		大島辰次郎
京都市郁文尋常高等小學校長		大島傳次郎
貴族院議員	子爵	大久保立
同	侯爵	大久保利武
	子爵	大久保忠春
	同	大久保敎尙
大禮使典儀官		大久保純
陸軍中將		大野豐四
內務省社會局社會部長		大野綠一郎
衆議院議員		大野敬吉
判事		大野惠眼

樺太在住者總代		大野順米
	公爵	大山柏
		同夫人
宮內事務官		奧名清信
皇族附武官		御堀傳造
貴族院議員		大山綱昌
陸軍法務官		大山文雄
大阪遞信局工務課長		大山喜四郎
陸軍砲工學校長		大橋顧四郎
海軍中將		大橋省
大禮使典儀官		大橋八郎
貴族院議員		大橋新太郎
衆議院議員		大橋亦兵衛
外務書記官		大橋忠一
大禮使事務官		大木彝雄
	伯爵	大木喜福
衆議院書記官		大木操
京都帝國大學教授		大竹太郎
衆議院議員		大竹貫一
三重縣書記官		大竹十郎
山口縣知事		大森吉五郎
群馬縣知事	男爵	大森佳一
衆議院議員		大澤寅次郎

臺灣總督府事務官		大澤清高
貴族院議員	子爵	大河內正敏
同	同	大河內輝耕
檢事		大倉鈕藏
	男爵	大倉喜七郎
陸軍大將	同	大井成元
		同夫人
京都帝國大學教授		大井清一
復興局部長		大岡大三
	子爵	大岡忠量
	伯爵	大原重明
大禮使典儀官		大原昇
陸軍大將		大庭二郎
		同夫人
京都帝國大學教授		大塚要
		同夫人
檢事		太田黑英記
大禮使參與官		大角岑生
朝鮮總督府鐵道局長		大村卓一
京都府知事		大海原重義
大藏政務次官		大口喜六
貴族院議員	侯爵	大隈信常
海軍省醫務局長		大貫安三

陸軍中將		大多和新輔
米澤高等工業學校長		大場成實
鐵道技師		大河戶宗治
大禮使事務官		大熊喜邦
海軍少將		大港直太郎
判事		大久保與之吉
大禮使典儀官		大江武男
內務技師		大江新太郎
陸軍少將		大內義一
	子爵	大宮以季
貴族院議員		大津淳一郎
同	子爵	大浦兼一
同	男爵	大鳥富士太郎
皇族附武官		大沼直輔
貴族院議員	男爵	大寺純藏
衆議院議員		大麻唯男
同		大內暢三
同		大城兼義
同		大里廣次郎
同		大崎清作
同		大西正幹
貴族院議員		大川平三郎
農林書記官		大濱喜一郎

關東廳醫官	大槻滿次郎
大禮使典儀官	大金益次郎
海軍特務大尉	大河原藏之助
朝鮮在住者總代	大池忠助
鐵道大臣	小川平吉
	同　夫人
京都帝國大學教授	小川琢治
同	小川睦之輔
海軍軍醫學校長	小川龍
衆議院議員	小川鄉太郎
關東廳事務官	小川順之助
陸軍輜重兵中尉	小川義弘
衆議院議員	小野重行
北海道帝國大學教授	小野諒兄
衆議院議員	小野寅吉
下京稅務署長	小野光男
掌　典	小野八十雄
大分縣會議長	小野庸
行政制度審議會委員	伯爵　小笠原長幹
	子爵　同　夫人
	小笠原長生
愛知縣知事	同　小笠原恒治
	小幡豐治

京都府內務部權度課長	小幡茂
大禮使參與官	男爵　小原驗吉
	同　夫人
	小原直
	勳一等　小野寺重太郎
衆議院議員	同　夫人
海軍大將	小野寺章
	小栗孝三郎
	同　夫人
貴族院議員	小野塚喜平次
京都帝國大學教授	小田川達郎
東京工業試驗所技師	小寺房治郎
第三高等學校教授	小田切良太郎
貴族院議員	小倉英季
同	男爵　小畑大太郎
宮內省侍醫兼藥劑師	小串治三郎
御靈神社社司	小栗栖元淵
海軍大臣	岡田啓介
	同　夫人
	勳一等　岡田良平
中央氣象臺長	同　夫人
	岡田武松

陸軍獸醫總監	岡田勝男
帝國美術院會員	岡田三郎助
貴族院議員	岡田文次
衆議院議員	岡田忠彥
同	岡田伊太郎
京都市助役	岡田喜久治
京都府西陣警察署長	岡田佐藏
朝鮮總督府平壤覆審法院長	岡本至德
陸軍參謀本部總務部長	岡本連一郎
判　事	岡本正夫
和歌山高等商業學校長	岡本一郎
海軍少將	岡本郁男
衆議院議員	岡本實太郎
內務省地方局財務課長	岡田圓造
	岡崎鳴吉
衆議院議員	岡本幹輔
大禮使事務官	岡本愛祐
京都府內務部社寺課長	岡本正一
貴族院議員	岡崎邦輔
衆議院議員	岡崎久次郎
	岡本一平
皇族附武官	岡崎清三郎
大使館參事官	子爵　岡部長景

特許局技師	岡部忠敏
	勳二等　岡實
	同　夫人
	勳一等　岡喜七郎
	同　夫人
第六高等學校長	岡野養三郎
步兵第三十二旅團長	岡千賀松
京都帝國大學教授	岡林秀一
農林技師	岡村金太郎
陸軍少將	奧田爲熊
	子爵　奧田直恭
貴族院議員	奧田榮之進
同	奧田龜造
地方農林技師	奧田善治郎
檢　事	奧村靖
衆議院議員	奧村千藏
伏見町第三尋常高等小學校長	奧村秀吉
貴族院議員	伯爵　奧平昌恭
衆議院議員	奧山龜藏
	太田光凞
宮內事務官	奧名清信
	勳一等　尾崎行雄
	同　夫人

農林技師　岡出幸生
新潟縣知事　尾崎勇次郎
京都帝國大學教授　岡崎良純
貴族院議員　尾崎元次郎
陸軍大將　尾野實信

陸軍士官學校教授　同　夫人
吳海軍潛水學校長　尾田信忠
臺灣高雄州知事　尾本知
大藏省營繕管財局理事　太田吾一
貴族院議員　太田嘉太郎
衆議院議員　太田政弘
貴族院議員　太田信治郎
同　太田清藏

男爵　沖貞　男
東京高等師範學校教授　沖丘淺次郎
衆議院議員　沖島鎌三
北海道帝國大學教授　越智貞見
遞信技師　越智誠二
京都府立醫科大學教授　越智眞逸
愛媛縣會議長　越智茂登太
京都帝國大學教授　織田萬
子爵　織田信恒
貴族院議員　緒方勝一
陸軍造兵廠長官　緒方知三郎
貴族院議員　男庭善之助
海軍經理學校長　刑部齊

伯爵　正親町公和
衆議院議員　鬼丸義齊
宮內事務官　折田有彥
京都府立第二高等女學校長　萩原忠作
大禮使典儀官　乙葉直一
判事　渡邊暢
第七師團長　同　夫人
第十九師團長　渡邊壽
同　夫人
勳一等　渡邊滿太郎
同　夫人
京都帝國大學教授　渡邊俊雄
名古屋高等商業學校長　渡邊龍聖
大禮使事務官　渡邊直達
朝鮮總督府全羅北道知事　渡邊忍
判事　伯爵　渡邊一郎
貴族院議員　子爵　渡邊昭
陸軍造兵廠長官　渡邊千冬
子爵　渡邊七郎
同　夫人
男爵　渡邊汀
同　渡邊修二
渡邊八郎
藥谷美賀
渡邊千代三郎
渡邊德助
渡邊慶次
渡邊信
勳一等　和田彥次郎
同　夫人
和田健雄
和田龜治
勳三等　和田純
和田由恭
和田甲一
和田寬
和田仁貞吉
同　夫人

貴族院議員　伯爵　鷲尾隆信
秩父宮御用掛　男爵　鷲尾健治
伏見宮御用掛　鷲尾弘遵
貴族院議員　鷲尾光遍
衆議院議員
護王神社宮司
大禮使事務官

京都帝國大學教授　若槻禮次郎
陸軍中將　同　夫人
大阪鐵道局技師　若林賚藏
千葉縣會議長　勳一等　同　夫人
臺灣總督　若宮貞夫
若尾璋八
若尾謹之助

貴族院議員　川口虎雄
大禮使事務囑託　川口德三
地方技師　和田由恭
地方事務官　川口義久
判事　川口愛太郎
川口爲之助
川村竹治
同　夫人

山口高等商業學校長　伯爵　川村鐵太郎
川村博
新潟醫科大學長　川村麟也
貴族院議員　川崎卓吉
衆議院議員　川崎克
同　川崎安之助

貴族院議員　內閣統計局書記官
秩父宮御用掛　貴族院議員
伏見宮御用掛　勳一等　若槻禮次郎
貴族院議員　同　夫人
衆議院議員　勳一等　若林賚藏
貴族院議員　同　夫人
同　若宮貞夫
若尾璋八
若尾謹之助

廣島高等工業學校長　川口虎雄
濱松高等工業學校長　川口德三
皇族附武官　和田由恭
衆議院議員　川口義久
大阪鐵道局技師　川口愛太郎
千葉縣會議長　川口爲之助
臺灣總督　川村竹治
同　夫人

貴族院議員　伯爵　川村鐵太郎
大禮使事務囑託　川村博
新潟醫科大學長　川村麟也
貴族院議員　川崎卓吉
衆議院議員　川崎克
同　川崎安之助

大禮參列員招待閑遊者

男爵

加藤政之助　加藤恒忠　加藤高明　加藤友三郎　同　金杉英五郎　金澤安正　金澤久吉

藤田謙一　藤田豐八　藤田嗣章　藤田嗣治　内藤久寛　内藤多仲　内藤虎次郎　内藤湖南

齋藤實　齋藤良衛　齋藤良輔　齋藤季吉　齋藤朔郎　齋藤惇夫　齋藤十成　齋藤竹雄

坂田重次郎　坂田幸太郎　坂本俊篤　坂本則美　坂本三郎　坂本嘉治馬　坂本健　坂本繁二郎

佐佐木行忠　佐佐木信綱　佐佐木惣一　佐佐木高行　佐佐木治綱　佐佐木弘綱　佐佐木茂索　佐佐木茂賢

佐藤安之助　佐藤功一　佐藤小吉　佐藤三吉　佐藤三郎　佐藤重遠　佐藤春夫　佐藤進一

佐藤清勝　佐藤清勝　佐藤清　佐藤善治郎　佐藤達次郎　佐藤鐵太郎　佐藤虎雄　佐藤信淵

佐藤信寅　佐藤信衛　佐藤信　佐藤紅緑　佐藤義亮　佐藤義詮　佐藤義則　佐藤良一

佐藤良雄　佐藤亮一　佐藤亮三　佐藤亮次　佐藤亮策　佐藤陸奥男　佐藤陸奥雄　佐藤和彦

佐藤和郎　佐藤和三郎　佐藤和太郎　佐藤和平　佐藤和利　佐藤和助　佐藤和一　佐藤和

佐藤佐太郎　佐藤佐　佐藤作一　佐藤作次郎　佐藤作治　佐藤作太郎　佐藤作　佐藤左近

佐藤佐吉　佐藤佐一郎　佐藤佐　佐藤三吾　佐藤三千雄　佐藤三千夫　佐藤三治　佐藤三

佐藤三郎　佐藤三次郎　佐藤三次　佐藤三之助　佐藤三　佐藤山陽　佐藤山人　佐藤山

佐藤参平　佐藤参次郎　佐藤参　佐藤三郎　佐藤三　佐藤三　佐藤三　佐藤三

佐藤三　佐藤三　佐藤三　佐藤三

衆議院議員	片岡直温
貴族院議員	子爵　片桐貞央
遞信技師	上妻博
秋田縣會議長	片野重脩
貴族院議員	男爵　上村從義
	勳一等　上山滿之進
	同夫人
海軍中將	上泉徳彌
岡山醫科大學教授	上阪熊勝
衆議院議員	上塚司
同	上條信
大禮使事務囑託	上月良夫
貴族院議員	上郎清助
東京帝國大學教授	覧克彦
大禮使事務官	覧正太郎
侍醫	覧繁
	子爵　唐橋在正
掌典	唐橋在知
大禮使典儀官	唐澤俊樹
復興局部長	笠原敏郎
衆議院議員	龜割安藏
大禮使典儀官	伯爵　龜井茲常
衆議院議員	龜井貫一郎

樞密顧問官	鎌田榮吉
陸軍少將	同夫人
	鎌田武彦
大禮使事務官	勳一等伯爵　鹿島萩麿
	鹿兒島虎雄
	勳一等　嘉納治五郎
判事	同夫人
	嘉山幹一
	勳一等男爵　韓昌洙
	同夫人
朝鮮總督府忠清北道知事	韓圭復
陸軍少將	勝守正魚
衆議院議員	勝正憲
九州帝國大學教授	春日政治
農林技師	春日信市
侍從	伯爵　甘露寺受長
朝鮮總督秘書官	甘蔗義邦
貴族院議員	伯爵　樺山愛輔
同	樺山資英
大禮使典儀官	男爵　梶野行和
宮內事務官	梶田文太郎
	勳一等侯爵　華頂博信
	同夫人

	同夫人
盛岡高等農林學校長	公爵　桂廣太郎
靜岡地方裁判所長	鏡保之助
朝鮮總督府平壤覆審法院檢事長	柏木五百次郎
陸軍中將	柿原琢郎
大禮使事務官	烏谷章
	子爵　海江田幸吉
京都驛長	釜內勇之助
農林書記官	荷見安
衆議院議員	漢邦憲和
大禮使典儀官	伯爵　勸修寺經雄
貴族院議員	笠井信一
山砲兵第九聯隊長	垣內豐楠
	勳三等　影山銑三郎
貴族院議員	風間八左衞門
衆議院議員	蔭山貞吉
大禮使事務囑託	可兒滿壽夫
東京帝國大學教授	吉田熊次
陸軍技術本部長	吉田豐彥
東京帝國大學教授	吉田靜致
大禮使參與官	吉田茂
廣島高等師範學校長	吉田賢龍

海軍造兵少將	吉田忠
貴族院議員	吉田太郎
海軍大佐	吉田清風
衆議院議員	吉田善吾
貴族院議員	吉田磯吉
大禮使典儀官	吉田羊治郎
京都市立第二商業學校長	吉田增藏
八幡製鐵所副參事	吉田金城
地方技師	吉田安太
橫須賀鎭守府司令長官	吉田登
	吉川安平
	同夫人
公立大學教授	吉川順次
	伯爵　吉井勇
閑院宮御用掛	吉田榮子
	子爵　吉川元光
商工省工務局長	吉野信次
貴族院議員	吉野周太郎
遞信書記官	吉野圭三
海軍大將	吉松茂太郎
	同夫人
	吉松憲郎

東京女子高等師範學校長	吉岡郷甫
京都帝國大學教授	吉岡藤作
鹿兒島高等農林學校長	吉村清尚
青森縣知事	吉村哲三
東京帝國大學教授	吉江琢兒
檢事	吉益俊次
京都帝國大學教授	吉澤義則
商工政務次官	吉植庄一郎
衆議院議員	吉川吉郎兵衞
同	吉木陽
同	吉津度
大禮使典儀官	吉住良輔
同	横山助成
横濱地方裁判所長	横山鑛太郎
衆議院議員	横山金太郎
貴族院議員	横山章
衆議院議員	横山勝太郎
男爵	横山隆俊
判事	横田秀雄
	同夫人
朝鮮總督府高等法院長	横田五郎
南洋廳長官	横田郷助
男爵	横田祐

東京帝國大學教授	横手千代之助
衆議院議員	横山奉造
同	横堀治三郎
大禮使事務官	横溝光暉
陸軍少將	横須賀辰藏
朝鮮總督府京幾道知事	米田甚太郎
貴族院議員	米津政賢
同	米倉昌達
京都市立第二工業學校長	米澤美雄
遞信技師	米澤與三七
支那特命全權公使	芳澤謙吉
	同夫人
大禮使典儀官	芳仲和太郎
朝鮮總督府秘書官	依光好秋
內閣總理大臣	男爵 田中義一
	同夫人
陸軍大將	田中國重
同	田中弘太郎
特命全權大使	田中都吉
	同夫人
	勳一等 田中政明
	同夫人
	勳一等 田中盛秀

同	夫人 田中芳雄
東京帝國大學教授	田中右橘
東京地方裁判所長	田中文男
岡山醫科大學長	田中昌太郎
檢事	田中俊清
石清水八幡宮司	田中隆三
衆議院議員	子爵 田中阿歌麿
衆議院議員	田中善立
同	田中萬逸
同	田中養達
同	田中千代松
同	田中亮一
貴族院議員	田中一馬
大禮使典儀官	田中直通
京都府立桃山中學校長	田中常憲
大禮使典儀官	田中信良
關東廳大連民政署長	田中千吉
	勳一等 田內三吉
京都帝國大學名譽教授	同夫人
	田邊朔郎
	同夫人

衆議院議員	田邊七六
同	田邊熊一
官內省圖書寮編修官	田邊勝哉
	勳一等 田中館愛橘
特命全權大使	田付七太
	同夫人
女子學習院教授	田部隆次
横濱高等商業學校長	田尻常雄
第十二師團軍醫部長	田島清十郎
衆議院議員	田子一民
同	田淵豐吉
臺灣總督府地方理事官	田端幸三郎
大禮使典儀官	田口弼一
鳥取縣會議長	田江奉造
岡山縣會議長	田原藤一郎
神戶高等商業學校長	田崎愼治
衆議院議員	田崎信藏
貴族院議員	田所美治
大禮使事務囑託	田所定右衞門
	子爵 田村丕顯
貴族院議員	田村新吉
京都市日彰尋常小學校長	田村作太郎
賀茂御祖神社宮司	田村晴胤

勳一等　高橋是清
同　夫人
貴族院議員　田村駒治郎
行政制度審議會委員　高橋光威
同　夫人
大禮使典儀官　高橋其三
判　事　高橋文之助
海軍少將　高橋三吉
臺灣總督府臺北州知事　高橋新吉
京都帝國大學教授　高橋逸夫
子爵　高橋是賢
貴族院議員　高橋琢也
同　高橋源次郎
衆議院議員　高橋元四郎
同　高橋金治郎
同　高橋熊次郎
同　高橋守平
大禮使典儀官　高橋皐
侍　醫　高橋信
奈良女子高等師範學校教授　高橋章臣
陸軍少將　高橋鈴彥
子爵　高島友武
同　夫人
衆議院議員　高島順作
貴族院議員　男爵　高崎弓彥
南洋廳醫院長　高崎佐太郎
貴族院議員　高廣次平
衆議院議員　高津仲次郎
京都府立桃山師範學校長　高柳竹四郎
大禮使事務囑託　高須四郎
李王職典醫　高階虎治郎
京都府中立賣警察署長　高落利市
靑森縣會議長　高杉平治
海軍大將　財部彪
同　夫人
京都帝國大學教授　財部靜治
海軍少將　館明次郎
大禮使事務官　館哲二
海軍大將　竹下勇
同　夫人
衆議院議員　竹下文隆
京都帝國大學教授　竹田省
佛教各派總代　竹田默雷
京都憲兵隊長　竹田睦太郎
陸軍政務次官　竹内友治郎
檢　事　竹内佐太郎

衆議院議員　高島兵吉
會計檢查院檢查官　高島彌三
臺灣在住者總代　高木友枝
子爵　高木正得
衆議院議員　高木正年
貴族院議員　高木喜寬
衆議院議員　男爵　高木益太郎
大禮使事務官　高木三郎
內掌典　高木かつ
勳一等　高山公通
同　夫人
衆議院議員　高山長幸
稻荷神社宮司　高山昇
栃木縣會議長　高山林藏
衆議院議員　高田耕平
京都市役所土木局長　高田景
大禮使典儀官　高田太七
京都帝國大學教授　高瀨武次郎
大禮使典儀官　子爵　高辻宜麿
貴族院議員　同　高倉永則
同　高丘和季
男爵　高千穗宜麿
工兵第十六大隊長　高屋庸彥

子爵　竹内惟孚
竹内泰民
竹内鳳吉
付内可吉
勳一等　竹上常三郎
同　夫人
竹越與三郎
竹井貞太郎
竹谷辰郎
谷口尙眞
同　夫人
谷口留五郎
同　夫人
谷口源十郎
谷多喜麿
谷田三郎
子爵　立花種忠
立花寬篤
立石謙輔
立野德治郎
子爵　立見豐丸
立川太郎
勳一等　種子田右八郎

貴族院議員　大礼使事務嘱託　京都市錦林尋常高等小學校長　參二節　大禮參列員　招待園遊會

土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐

橋田　御屋門　屋清正　屋孝信　屋正孟　馬鐘　相宋　宗副　會會　添同　園園　園園

阪元　田勇　排三之　助民　直風　憲雄　八郎　邦一　人一　造彦　實郎

子爵　同　同　同　同　伯爵　同　子爵　同　男爵

貴族院議員　大禮使事務官　侍從　關東廳高等法院長　京都聯隊區司令官　陸軍中將　貴族院議員　京都帝國大學教授　大禮使事務嘱託　遞信參與兼簡易保險局長

京都市錦林尋常高等小學校長　大禮使事務嘱託　貴族院議員　内務省書記官　衆議院議員　大禮使典儀官　東京帝國大學教授　大禮使事務官　東京高等學校長　第十六師團法務官　東京帝國大學教授　衆議院議員　貴族院議員　京都帝國大學教授

參二節　大禮參列員　招待園遊會

土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐

橋田　御屋門　屋清孝　屋孝信　屋正孟　馬鐘　相宋　宗副　會會　添同　園園　園園

阪元　田勇　排三之　助民　直風　憲雄　八郎　邦一　人一　造彦　實郎

子爵　同　同　同　同　伯爵　同　子爵　同　男爵

貴族院議員　大禮使事務官　侍從　關東廳高等法院長　京都聯隊區司令官　陸軍中將　貴族院議員　京都帝國大學教授　大禮使事務嘱託　遞信參與兼簡易保險局長

京都市錦林尋常高等小學校長　大禮使事務嘱託　貴族院議員　内務省書記官　衆議院議員　大禮使典儀官　東京帝國大學教授　大禮使事務官　東京高等學校長　第十六師團法務官　東京帝國大學教授　衆議院議員　貴族院議員　京都帝國大學教授

勳一等　勳一等

土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐　土佐

橋田　御屋門　屋清孝

同　夫　人
勳一等公爵　筑波藤麿
勳一等　筑紫熊七
同　夫　人
典　獄　坪井直彥
大禮使典儀官　坪上貞二
臺灣總督專賣局長　常吉德壽
常松彌重
地方農林技師　月原寅市
群馬縣會議長　都木重五郎
島根縣會議長　恒松於兎二
衆議院議員　津久井彥七
海軍少將　筑土次郎
衆議院議員　鶴岡和文
陸軍步兵大佐　坪鄉芳一
貴族院議員　根津嘉一郎
朝鮮總督府高等法院檢事長　中村竹藏
東京帝國大學教授　中村清二
大禮使事務官　中村藤兵衛
東京高等工業學校長　中村幸之助
海軍中將　中村良三
東京帝國大學教授　中村新太郎
衆議院議員　中村巍

貴族院議員　功三級　中村勉作
同　中村純九郎
衆議院議員　中村圓一郎
同　中村啓次郎
同　中村繼男
地方事務官　中村享
伏見宮御附武官　中村國太郎
賀陽宮囑託　中村俊久
久邇宮御用掛　梨本止女子
長崎多惠子
勳一等　中島正武
同　夫　人
勳一等　中島與曾人
同　夫　人
京都帝國大學教授　中島玉吉
大阪稅關長　中島鐵平
貴族院議員　男爵　中島久萬吉
勳三等　中島藤次郎
衆議院議員　中島守利
同　中島彌團次
同　中島鵬六
大禮使事務官　中島卯三郎

陸軍省法務局長　中山庸次郎
石川縣知事　中山佐之助
貴族院議員　中山輔親
衆議院議員　中山貞雄
大禮使典儀官　中山祥一
京都府立第二中學校長　中山再次郎
伯爵　中川久任
勳三等　中川正左
貴族院議員　中川小十郎
大禮使事務囑託　中川貞次
衆議院議員　中川原貞機
勳一等　中野直枝
同　夫　人
朝鮮咸鏡南道知事　中野太三郎
衆議院議員　中野正剛
同　中野猛雄
地方事務官　中野善敦
長崎控訴院長　中西用德
南洋廳技師　中西助一
衆議院議員　中西六三郎
陸軍少將　中谷勘作
衆議院議員　中谷貞賴
朝鮮在住者總代　中谷竹三郎

八幡製鐵所長官　中井勵作
衆議院議員　中井一夫
花蓮港廳長　中田秀造
大禮使典儀官　中田虎一
京都帝國大學名譽教授　中澤岩太
同　夫　人
京都帝國大學教授　中澤良夫
貴族院議員　中御門經恭
男爵　中御門經民
商工大臣　中橋德五郎
同　夫　人
海軍中將　中里重次
大阪外國語學校長　中目覺
軍醫監　中目成一
商工省保險部長　中松眞鄉
步兵中佐　中牟田辰六
衆議院議員　中崎俊秀
勳一等　長岡外史
同　夫　人
內務省社會局長官　長岡隆一郎
地方事務官　長岡喜一
衆議院議員　長內則昭
大禮使典儀官　長島毅

衆議院議員　長島隆二
勳一等　長崎省吾
同　同夫人
勳一等　長井長義
東京外國語學校長　長屋順耳
貴族院議員　男爵　長松篤棐
陸軍一等主計正　長野捨吉
貴族院議員　長尾元太郎
掌典　長谷信道
健康保險署事務官　長山秀介
第九師團長　永井來
同　夫人
造幣局長　永井繁
子爵　永井直邦
衆議院議員　永井柳太郎
貴族院議員　永田秀次郎
衆議院議員　永田善三郎
同　永田良吉
海軍中將　永野修身
新竹州知事　永山止米郎
男爵　永山武敏
朝鮮總督府判事　永島雄藏
侍從　永積寅彥
貴族院議員　侯爵　鍋島直映
同　男爵　鍋島直明
同　鍋島桂治郎
貴族院議員　子爵　鍋島直庸
同　鍋島直繩
大禮使典儀官　同夫人
大禮使事務官　鍋島陸郎
京都帝國大學助教授　成瀨達
札幌控訴院長　成瀨清
大禮使事務官　成田惟忠
衆議院議員　成毛基雄
造幣局長　成清信愛
勳一等　南部麒次郎
貴族院議員　同夫人
男爵　南部光臣
貴族院議員　子爵　南部利克
衆議院議員　內藤久寬
子爵　內藤政光
地方事務官　內藤寬一
男爵　名和長憲
陸軍大佐　名越時中
衆議院議員　名川彪市
貴族院議員　鳴海周治郎
衆議院議員　鳴海文四郎
子爵　難波宗治
鐵道省書記官　難波秀吉
陸軍大將　奈良武次
同　夫人
男爵　梨羽時起
京都府會議長　並川榮慶
鐵道省建設局長　男爵　中村謙一
內務技監　中川吉造
農林省水產局長　長瀨貞一
會計檢查院檢查官　永山善之助
東京中央郵便局長　內藤勝造
臺灣在住者總代　藍高川
京都工藝學校長　村上宇一
大禮使事務官　村上義一
衆議院議員　村上國吉
大禮使典儀官　村上龍太郎
大禮使事務囑託　村上啓作
地方警視　村上巖
地方技師　村山喜一郎
大阪朝日新聞社長　村山龍平
侍醫　村上浩一
大禮使事務官　村井次郎吉
商工省商務局商政課長　村井四郎
衆議院議員　村松恒一郎
盛岡高等農林學校教授　村松舜祐
關東軍司令官　村岡長太郎
同　夫人
大禮使事務官　村瀨直養
陸軍大將　武藤信義
同　夫人
第四高等學校長　武藤虎太
衆議院議員　武藤山治
同　武藤七郎
樞密院書記官　武藤盛雄
地方事務官　武藤公平
海軍中將　向井彌一
遞信省參與官　向井倭雄
陸軍中將　向西兵庫
錦雞間祇候　向井巖
第二遣外艦隊司令官　向田金一
貴族院議員　室田義文
掌典　伯爵　室町公藤

衆議院議員　紫安新九郎
名古屋鐵道局技師　宗方次郎
大禮使事務官　牟田口廉也
行政裁判所評定官　村山恭一
熊本藥學專門學校長　村山義温
海軍造兵中將　武藤稻太郎
陸軍中將　室兼次
樞密顧問官　伯爵　内田康哉
勳一等　内田嘉吉
同　夫人
勳一等　内田重成
同　夫人
勳一等　内田定槌
同　夫人
長崎地方裁判所檢事正　内田司馬彦
海軍政務次官　男爵　内田敏雄
陸軍大將　同　内山小二郎
同　夫人
勳一等　内野辰次郎
同　夫人
東京帝國大學教授　内丸最一郎

東京商科大學教授　内池廉吉
朝鮮院半壤醫院長　内村安太郎
衆議院議員　内ヶ崎作三郎
勳一等　上田萬年
同　夫人
陸軍中將　上田太郎
海軍少將　上田良武
貴族院議員　男爵　上田兵吉
陸軍大將　上原勇作
第二十師團長　子爵　上原平太郎
大禮使參與官　同　夫人　上野季三郎
鐵道政務次官　上埜安太郎
貴族院議員　伯爵　上杉憲章
同　男爵　上村從義
陸軍大將　上郎清助
資源局長官　宇垣一成
第一遣外艦隊司令官　同　夫人　宇佐美勝夫
海軍少將　同　夫人　宇川濟
貴族院議員　宇土兵藏
宇田友四郎

外務事務官　宇佐美珍彦
京都陶磁器試驗所長　植田豐橘
侍從　野口明
八幡製鐵所技監　野田鶴雄
熱田神宮宮司　野田菅麿
貴族院議員　男爵　野田龜喜
衆議院議員　野田文一郎
同　野田俊作
京都市立堀川高等女學校長　野田一郎
愛知縣會議長　野田正昇
海軍軍令部長　野村吉三郎
貴族院議員　野村益之
衆議院議員　野村嘉六
貴族院議員　男爵　野村素一
主膳監　野村德七
海軍大將　野村利吉
男爵　野崎小十郎
九州帝國大學教授　野崎貞義
衆議院議員　野中季雄
海軍大將　野中徹也
和歌山縣知事　野間口兼雄
同　夫人
野手耐

遞信局貯金局長　野添愛彦
京都帝國大學教授　野上俊夫著
名古屋遞信局長　野本正一
貴族院議員　侯爵　野津鎭之助
東京音樂學校長　乘杉嘉壽
京都帝國大學教授　野溝隆治
大禮使事務官　殖田俊吉
外務參與官　植原悅二郎
大禮使事務官　子爵　植松雅道
同　植村家治
同　梅園篤彦
同　梅溪通虎
同　梅小路定行
大禮使事務官　梅津美治郎
宮城縣知事　牛塚虎太郎
大禮使事務官　牛島省三
陸軍大佐　牛田國五郎
貴族院議員　鵜澤聰明
衆議院議員　鵜澤惠之輔
大禮使參與官　潮鳥賀陽然良
京都帝國大學教授　有働良夫
農林技師　裏松友光
貴族院議員

大禮使典儀官　浮田鄉次
衆議院議員　臼田久內
同　海野數馬
內務技師　內野仙一
岡山醫科大學教授　上阪熊勝
臺灣高等法院判官　宇野庄吉
海軍少將　宇佐川知義
陸軍軍醫官　宇木碩太郎
陸軍中將　植田謙吉
朝香宮御附武官　倉石忠一郎

大禮使典儀官　內野邦藏
侍從　野宮定茂
福岡縣會議長　野口明
衆議院議員　野見山平吉
京都市立商工專修學校長　則元由庸
判事　則包末廣
樞密顧問官　能勢萬
大禮使參與官　黑田長成
檢事　黑田英雄
侍從　黑田長敬
貴族院議員　黑田長和
主猟官　黑田長禮

陸軍中將　黑崎延次郎
大禮使事務官　黑崎定三
海軍大將　黑井梯次郎
同　夫人
貴族院議員　木三次
同　川幹太郎
衆議院議員　金泰義
鐵道技師　河內四郎
陸軍少佐　住一正
地方警視　川新作
大禮使典儀官　保田敬一
奈良帝室博物館長　保田鼎
奈良地方裁判所長　保田美英
鳥取縣知事　保豐四郎
衆議院議員　山知之
海軍大佐　保綱彥
遞信大臣　原房之助
同　夫人

貴族院議員　邊邦久
大分縣知事　我常通
大禮使典儀官　米成夫
久世通章

衆議院議員　久垣雄
陸軍中將　能司
掌典長　公爵　九條道實
同　夫人
大禮使典儀官　男爵　九條良致
衆議院議員　熊谷直太
同　熊谷五右衞門
同　谷巖
陸軍少將　工藤貞喜
衆議院議員　工藤・鐵男
同　工藤十三雄
大禮使典儀官　工藤正平
第三高等學校教授　工藤壯平
衆議院議員　栗原基
京都府立女子專門學校長　栗原彥三郎
行政裁判所長　栗原清治
同　窪田靜太郎
同　夫人
大禮使典儀官　窪田治輔
樞密院議員　男爵　倉富勇三郎
同　夫人
臺灣總督府醫院長　倉岡彥助
貴族院議員　倉知鐵吉

衆議院議員　倉元要一
皇族附武官　倉石忠一郎
佐賀縣會議長　栗山賽四郎
勳一等　楠瀨熊治
同　夫人
大阪醫科大學長　楠本長三郎
陸軍中將　楠山又助
衆議院議員　藏園三四郎
奈良縣書記官　藏重久
京都帝國大學教授　桑原騭藏
大禮使參與官　桑山鐵男
鐵道技師　桑島正
陸軍中將　國司伍七
勳二等　國澤新兵衞
衆議院議員　國枝捨次郎
檢事　草場林五郎
岐阜高等農林學校長　草場榮喜
大禮使事務官　草間秀雄
鐵道技師　草刈小太郎
東京帝國大學教授　鯨井恒太郎
大阪高等學校長　隈本繁吉
奈良縣知事　百濟文輔
京都帝國大學教授　郡場寬

| | | |

男爵

| | | |

松平康荘　貴族院議員
松平慶民　大禮使事務官
松村保男　子爵　賀陽宮御用掛
松村菊枝　宮内事務官
松本幹之助　伯爵　貴族院議員
松本頼壽　子爵　同
松平直平　同
松平定晴　貴族院議員
松平庸春　同
松平信美　同
松平銑之助　同
松平外與麿　男爵
松平乘統　大禮使典儀官
松村龍雄　勳一等　宮城縣書記官
同　夫人
松村鶴造　京都帝國大學教授
松村松年　北海道帝國大學教授
松村眞一郎　大禮使事務官
松村松盛　朝鮮總督府土地改良部長
松村義一　貴族院議員
松村弘之　男爵
松村謙三　衆議院議員
松村光三　同

松浦鎭次郎　京城帝國大學總長
松浦寬威　勳一等
同　夫人
松浦靖　貴族院議員
松浦厚　伯爵　同
松木直亮　陸軍中將
松木宗隆　貴族院議員
松木素彦　伯爵　梅宮神社宮司
松木弘　新潟縣會議長
松木直吉　外務省條約局長
松永正雄　男爵
松永琢麿　侍醫
松尾巖　京都帝國大學教授
松尾四郎　衆議院議員
松室致　樞密顧問官
松岡均平　男爵　貴族院議員
松岡俊三　衆議院議員
松岡忠一　宮崎高等農林學校長
松野鶴平　衆議院議員
松野祐裔　南洋廳高等法院長
松寺竹雄　朝鮮總督府法務局長
松寶喜代太　衆議院議員

松村亥三郎　專賣局技師
松村同　地方事務官
松田精一　山梨高等工業學校長
松田源治　衆議院議員
松田正之　男爵
松田三德　衆議院議員
松田竹千代　同
松田孫治郎　判事
松井慶四郎　男爵　特命全權大使
同　夫人
松井勉　第十六師團長
松井兵三郎　同
松井元興　京都帝國大學教授
松井文太郎　衆議院議員
松井春生　大禮使典儀官
松井石根　陸軍中將
松井和義　司法省行刑局長
松浦善助　勳一等
同　夫人
松浦寬三郎　女子學習院長

松阪廣政　檢事
松下護助　京都營林署長
松江春次　南洋群島在住者總代
前田米藏　大禮使參與官
前田利爲　侯爵　貴族院議員
前田利男　前　宮内事務官
前田利定　子爵　貴族院議員
前田勇　男爵
前田政八　衆議院議員
前田房之助　同
前田治　大禮使事務官
前田穰　京都郵便局長
前田駒次　北海道會議長
前田直造　仙臺遞信局長
前川貫一　内務技師
前澤幸次郎　判事
牧野伸顯　内大臣
牧野菊之助　伯爵
同　夫人
牧野良三　判事
牧野忠篤　商工參與官
子爵　貴族院議員

貴族院議員　子爵　牧野一成
侍從　同　牧野貞亮
衆議院議員　牧野賢男
熊本遞信局長　牧野寶一
東京市土木局長　勳三等　牧彦一
陸軍中將　牧達之
衆議院議員　牧山耕藏
大禮使事務囑託　牧田覺三郎
遞信技師　勳一等　眞野文二
第八師團長　同　眞野正雄
同　眞崎甚三郎
朝鮮總督府京城覆審法院長　同　眞鍋十藏
衆議院議員　男爵　眞鍋勝
海軍技師　眞島健三郎
陸軍大將　町田經宇
同　夫人
衆議院議員　町田忠治
衆議院議員　子爵　增田義一
鐵道省電氣局長　增永元也
帝室林野局新冠出張所長　增村嘉雄

大禮使事務官　藤井啓之助
大禮使典儀官　藤井宇多治郎
勳一等　藤田嗣章
陸軍少將　藤田鴻輔
海軍少將　藤田尙德
貴族院議員　藤田四郎
同　男爵　藤田平太郎
同　藤田謙一
衆議院議員　藤田若水
大禮使典儀官　藤田包助
衆議院議員　藤原米造
遞信書記官　藤原保明
地方事務官　藤原孝夫
關東廳警務局長　藤原銀次郎
文部省圖書監修官　藤岡兵一
東京帝國大學教授　藤岡繼平
勳一等　藤岡勝二
藤澤利喜太郎
同　夫人
衆議院議員　藤澤幾之輔
陸軍航空兵大佐　藤本恒治
從四位　藤本充安
栃木縣知事　藤山竹一

大禮使典儀官　間部彰
地方技師　間瀨鉦太郎
岩手縣知事　丸茂藤平
京都中央電話局長　丸山晉次郎
衆議院議員　桝谷音三
同　桝谷寅吉
東京美術學校長　正木直彥
奈良女子高等師範學校長　槇山榮次
勳三等　又重完吾
男爵　萬里小路元秀
同　益田兼施
貴族院議員　馬越恭平
東京帝國大學教授　慶松勝左衛門
朝鮮總督府中樞院參議　元應常
濟生會理事長　馬淵銳太郎
山口縣會議長　藤井寿三郎
京都帝國大學教授　藤井健治郎
大禮使事務官　藤井眞信
陸軍少將　藤井一彥
愛知醫科大學長　藤井靜英
子爵　藤井行德
衆議院議員　藤井啓一
同　藤井達也

貴族院議員　藤山雷太
京都帝國大學教授　藤浪鑑
貴族院議員　子爵　藤谷爲寛
海軍大佐　藤吉朕
貴族院議員　男爵　藤村義朗
同　藤枝雅修
貴族院議員　藤安辰次郎
衆議院議員　藤沼庄平
京都第三中學校長　藤森勝郎
京都帝國大學教授　藤島郁三
男爵　福島四郎
京都府學務部長　福島繁三
陸軍大將　福田雅太郎
同　夫人
第六師團長　福田彥助
同　夫人
長岡高等工業學校長　福田爲造
第三高等學校教授　福田正雄
衆議院議員　福田五郎
商工書記官　福田庸雄
學習院長　福原鐐二郎
同　夫人
勳一等　福原佳哉

樺太廳內務部長　樺太廳參事官　陸軍少將　陸軍中將　陸軍少將　陸軍軍務局長　陸軍軍醫監　陸軍軍醫正　陸軍一等獸醫正　陸軍一等馬醫　陸軍一等軍樂長　陸軍一等軍樂長

衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員

太禮使典儀官　太禮使典儀官　太禮使典儀官　太禮使典儀官　太禮使典儀官　太禮使典儀官　太禮使事務官　太禮使事務官　太禮使事務官　太禮使事務官　太禮使事務官　太禮使事務官

京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授　京都帝國大學教授

地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官　地方事務官

同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同

衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　衆議院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員

大審院檢事總長　京都府尚陽小學校長　資源局書記官　東京府立第三高等女學校長　陸軍一等獸醫正　大禮使典儀官　王公族附武官　大藏書記官　大禮使事務官　陸軍少將　陸軍中將　陸軍少將

第二節　大禮參列員招待國遊會

小西善次郎　小西善次郎　小山邦之助　小山山山夫　小林林林　小林林林　小林嘉平　小林敬一　小島弼　小金吉　小林時造

衆議院議員　衆議院議員　東京市會議長　皇族附武官　太阪稅務監督局長　衆議院議員　第十一師團長　京都帝國大學教授　水戶高等學校長　勳一等　智

東京工業試驗所長　東京市會議長　皇族附武官　太禮使儀官　衆議院議員　第十一師團長　京都帝國大學教授　水戶高等學校長　勳一等　智

貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員

男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵

從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位

勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等

勳一等佐世保鎮守府司令長官　勳一等海軍機關少將　勳一等陸軍少將　勳一等大阪地方專賣局長　貴族院議員　鐵道院監督局長　千葉縣知事　貴族院議員

男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵　男爵

從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位　從四位

勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等　勳一等

同　夫人
勳一等　小橋一太
同　夫人
小溝茂橘
侯爵　小村欣一
小關三平
小松原隆二
小南又一郎
小杉武司
小濱淨鑛
子爵　小出英延
小槇和輔
小鹽八郎右衞門
小阪順造
小俣政一
同　小久江美代吉
同　小峰滿男
同　小谷節夫
同　小瀧辰雄
農林書記官　小平權一
京都府嵯峨小學校長　小中公正
女子學習院教授　兒玉錦平
男爵　兒玉清雄

衆議院議員
宮崎縣會議長
勳一等　近藤基樹
同　夫人
司法書記官　近藤三郎
貴族院議員　男爵　近藤滋彌
地方技師　近藤茂吉
大禮使事務囑託　近藤信竹
副檢查官　近藤榮一
名古屋稅務監督局長　近藤春台
大禮使長官　公爵　近衞文麿
同　夫人
勳一等子爵　後藤新平
臺灣總督府高等法院長　後藤和佐二
九州帝國大學教授　後藤七郎
鹿兒島縣知事　後藤多喜藏
東京帝國大學總長　古在由直
檢事　古賀行倫
地方事務官　古賀精一
熊本縣會議長　古閑忠平
陸軍少將　鄉田兼安
貴族院議員　男爵　鄉誠之助
大禮使事務官　國分新七郎

大禮使囑託　國府種德
大禮使典儀官　權藤要吉
朝鮮總督府中樞院顧問　伯爵　高義敬
同　夫人
勳一等　本場貞長
同　夫人
木暮武太夫
伍堂卓雄
厚東篤太郎
鯉沼巖
子爵　五條烏正
香月清司
男爵　籠手田龍幸
臺灣在住者總代　顯榮
衆議院議員　木檜三四郎
鐵道技師　菰田成亮
朝鮮在住者總代　吳世皓
行政裁判所評定官　遠藤源六
檢事　遠藤恭三郎
京都地方裁判所長　遠藤武治
衆議院議員　遠藤柳作
陸軍一等軍醫正　遠藤精虎
鐵道局參事　遠藤正臣

衆議院議員
海軍中將
陸軍少將
秋田縣知事
陸軍步兵大佐

地方技師
衆議院議員
大禮使事務官
檢事
海軍少將
貴族院議員
同
衆議院議員
檢事
九州帝國大學教授
海軍少將
衆議院議員
大禮使典儀官
樺太廳技師
陸軍憲兵大佐
大禮使事務囑託
衆議院議員
樞密顧問官

制事
熊本高等工業學校教授
地方技師

遠藤忠次
遠藤金市
江畑猷之允
勳一等　江木翼
同　夫人
江角金五郎
海老澤爲次郎
海老定德
寺島小五郎
寺島健
伯爵　寺島誠一郎
男爵　寺島敏三
寺島權藏
寺島久松
寺野寬二
寺岡平吾
寺田市正
寺尾進
寺井弘
出口永吉
寺倉正三
出井兵吉
男爵　田健治郎

貴族院議員　陸軍檢同　大禮使參與官　鐵道技師　陸軍中將　京都帝國大學教授　貴族院議員　外務省參事官　衆議院議員　典獄　北海道帝國大學教授

第二編　大禮參列員招待國遊覽

勳二等　男爵

安達謙藏　阿部生倉　阿部永地　阿部久野　阿部三藤　阿部八秀　阿部英良　阿部文武　荒井賢三　荒木貫一

立部達　達部生倉　朝永地田　朝久野馬　朝永馬四　有馬馬夫　有馬川良　荒木木文　荒木貫一　大禮使侍從武官

綱泰雄　雄信壽正　太希十勘　十三藤八　秀郎英良　文武貞三　貫一郎

之二治彰行　準藏吉一郎　郎助三郎　郎雄助三　人橘六　雄夫郎　郎

大禮使事務官　陸軍同大將　同衆議院議員　制京都市會議長　京都府立醫科大學長　地方裁判所工技師　陸軍少將　大禮使事務官　陸軍砲工學校教授　廣島遞信局長　長崎高等商業學校長

勳一等　男爵

秋山雅之介　同秋山好古　秋山原二　淺井猪之吉　淺井沼彦一　淺井山富太郎　淺井山忠雄　淺井田修吉　淺井田惠一　淺井田德次郎　淺井野總一郎　同野金平　野長

勳一等　男爵等

秋山正八　同秋山八介　秋山原石川　淺井猪之助　淺井沼彦一郎　淺井山富太郎　淺井山忠雄　淺井田修吉　淺井田惠一　淺井野總一郎　淺井野金平　淺井兵衛　衆議院議員

貴族院議員　陸軍檢同　大禮使參與官　陸軍中將　京都帝國大學教授　貴族院議員　外務省參事官　衆議院議員　典獄　北海道帝國大學教授　海軍軍將　九州帝國大學教授　京都帝國高等蠶業學校教授　陸軍中將　京都帝國大學總長　大禮使典儀官長　荒井賢三　荒木貫一　荒木文武　荒木貞夫　荒木寅三　荒木貫一　大禮使侍從武官長

第二編　大禮參列員招待國遊覽

勳二等　男爵

安達謙藏　阿部信正　阿部太希十　阿部勘十三　阿部八秀　阿部英良　阿部文武　阿部貞三　阿部貫一　阿部久野馬四　阿部永地田馬夫　阿部三藤八

大禮使參與官　貴族院議員　金澤高等工業學校長　陸軍工兵大佐　京都帝國大學教授　大禮使典儀官　衆議院議員　長崎縣會議長　東京商科大學長

同　衆議院議員　貴族院議員　衆議院議員　山形縣會議長　衆議院議員　貴族院議員　貴族院議員　朝鮮總督府事務官　大禮使典儀官　衆議院議員

男　爵　戸立　野善作　柳原愛子　柳原愛子　山本源吉　山本憲幸　山本権兵衛　山本権兵衛　山本権兵衛

貴族院議員　陸軍中將　男爵　井上勝之助　正五位勳三等

貴族院議員　男爵　井上馨　從一位勳一等

坂部十寸穗　阪阪阪阪阪阪阪齋齋齋

大禮使事務官		木村正義
		木村久壽彌太
香川縣會議長		木村榮吉
京都市役所電氣局長		木村尙一
關東廳長官		木下謙次郎
		同夫人
大禮使事務官		木下道雄
	子爵	木下俊哲
衆議院議員		木下成太郎
愛知縣書記官		木下義介
大禮使事務囑託		木下敏
大禮使典儀官	侯爵	木戶幸一
京都市第三高等小學校長		木戶完一
	勳一等男爵	木越安綱
		同夫人
陸軍中將		木原清
上加茂神社宮司		木野戶勝隆
衆議院議員		木本圭一郎
農林省書記官		木鳥駒造
大禮使事務官		北村耕造
貴族院議員		北村宗四郎
大禮使事務囑託		北浦重之
貴族院議員	男爵	北里柴三郎

大禮使典儀官	子爵	北小路三郎
貴族院議員	男爵	北河原公平
同	同	北大路實信
同	同	北島貴孝
	同	北垣晋一
文部省學校衛生課長		北豐吉
京都府立圖書館長		北畠貞顯
衆議院議員		岸衛
大禮使事務官		岸倉松
		岸清一
東京警備司令官		岸本鹿太郎
		同夫人
廣島縣知事		岸本正雄
衆議院議員		岸本康通
同		岸田正記
神戶市立商工實修學校長		岸田軒造
特命全權公使		菊池義郎
	男爵	菊池武夫
京都帝國大學教授		菊池秋雄
貴族院議員		菊池恭三
東京府內務部長		菊池愼三
大禮使典儀官		菊池茅三
憲兵少佐		菊池武雄

大禮使事務官		菊池白
貴族院議員	侯爵	菊亭公長
京都帝國大學教授		菊川清作
同		清野謙次
橫濱復興局技師		清野信雄
海軍大佐		清藤德彌
貴族院議員	子爵	清岡長言
大禮使事務囑託		清岡眞彥
	勳一等子爵	清浦圭吾
		同夫人
鎭海灣要港部司令官		清河純一
衆議院副議長		清瀨一郎
	伯爵	清棲幸保
樺太廳長官		喜多幸治
京都帝國大學教授		喜多源造
大禮使事務囑託		喜多誠一
札幌鐵道局長		氣駕高次
朝鮮總督府全羅北道參與官		金英鎭
朝鮮在住者總代		金濟河
同		金炳鵷
九州帝國大學教授		君島八郎
檢事		吉良辰次郎
貴族院議員	男爵	紀俊秀

海軍機關大佐		城戶忠彥
	男爵	肝付兼英
司法省書記		鬼頭豐隆
大禮使事務官		來次六雄
海軍少將		湯地秀生
貴族院議員		湯地幸平
	勳一等	湯淺倉平
		同夫人
陸軍主計總監		湯本善太郎
		湯川寬吉
	勳一等	柚原完藏
		同夫人
內務省社會局勞働部長		湯澤三千男
第七高等學校長		由比質
朝鮮江原道知事		俞星濬
大阪鐵道局運輸課長		結城弘毅
海軍大學教官		雪下勝美
行政裁判所評定官		三宅德業
東京高等師範學校長		三宅米吉
貴族院議員		三宅秀
	子爵	三宅忠强
衆議院議員		三宅磐
同		三宅利平

測候所技師　三宅藤次郎
京都帝國大學教授　三宅雄二郎
長崎地方裁判所長　三浦周行
熊本高等工業學校長　三浦順太郎
衆議院議員　男爵　三浦鍋太郎
李王家御用掛　三浦英太郎
衆議院議員　三浦數平
大禮使事務官　三浦清子
衆議院議員　三浦虎雄
貴族院議員　三浦篤
勳一等男爵　三井八郎右衛門
陸軍主計總監　同夫人
大禮使事務官　三井清一郎
衆議院議員　三井米松
陸軍中將　男爵　三井壽太郎
衆議院議員　三井德寶
貴族院議員　三井好一
東京控訴院檢事長　男爵　三井好禎介
貴族院議員　三好榮次郎
衆議院議員　三木猪太郎
大藏大臣　三木與吉郎
三木武吉
三土忠造

東京帝國大學教授　同夫人
大禮使參與官　三潴信三
岡山縣知事　三矢宮松
陸軍中將　三邊長治
臺灣總督府祕書官　三原辰次
貴族院議員　三宅恒次
大禮使典儀官　子爵　三室戸敬光
衆議院議員　同　三島通陽
貴族院議員　三輪市太郎
朝香宮御用掛　男爵　三須精一
宮內事務官　宮岡愛子
外務省書記官　正四位　三村鐘三郎
遞信省管船局長　三雲敬一郎
豐國神社宮司　三谷隆信
大禮使事務官　宮崎清則
外務省歐米局第一課長　宮崎清章
檢事　宮崎通之助
京都帝國大學教授　宮崎勝太郎
陸軍少尉　宮崎國吉
靜岡縣會議長　宮本英脩
宮本貞三郎
宮本紋造
宮本雄一郎

警視總監　宮田光雄
貴族院議員　同夫人
第十四團長　宮地久壽馬
同夫人
內務省神社局考證課長　宮地直一
埼玉縣知事　宮脇梅吉
衆議院議員　宮脇長吉
東北帝國大學教授　宮城音五郎
海軍法務官　宮下道三郎
勳二等　宮尾舜治
衆議院議員　宮古啓三郎
同　宮原幸三郎
同　宮澤裕
同　宮川一貫
京都市彌榮小學校長　宮谷文三郎
勳一等　水野鍊太郎
同夫人
貴族院議員　子爵　水野直
福岡縣技師　水內哲雄
會計檢查院長　水町袈裟六
朝鮮慶尙南道知事　同夫人
水口隆三

貴族院議員　水口吉藏
水上長次郎
水無瀨忠政
男爵　水谷川忠麿
衆議院議員　水島彥一郎
同　水久保甚作
同　水谷長三郎
行政審議會委員　南弘
北海道帝國大學名譽教授　同夫人
參謀次長　南鷹次郎
廣島控訴院檢事長　南次郎
長崎控訴院檢事長　南谷知悌
男爵　南岩倉具威
第五高等學校長　光行次郎
貴族院議員　光永星郎
檢事　溝口直亮
伯爵　溝淵進馬
勳一等　溝淵孝雄
陸軍少將　箕浦勝人
同夫人
名古屋控訴院檢事長　伯爵　壬生基義
憲兵司令官　皆川治廣
峰幸松

勳三等　美濃部俊吉
皇族附武官
御堀傳造
大禮使事務囑託
密田良太郎
神戸稅關看視長
嶺田丘造
福島縣會議長
湊芳造
宮內省御用掛
清水澄
海軍中將
清水得一
大禮使典儀官
清水壯左久
陸軍少將
清水喜重
衆議院議員
清水德太郎
同
清水留三郎
大禮使典儀官
清水銀造
京都府警務課長
清水規矩
掌典次長
清水重夫
伯爵　清水谷實英
公爵　島津忠重
同夫人
公爵　島津忠承
同夫人
伯爵　島津久範
男爵　島田吉三郎
島田俊雄

大審院部長　島田鐵吉
行政裁判所評定官　島村他三郎
東京高等商船學校長　島峰徹
衆議院議員　島居哲
陸軍大臣　白川義則
同夫人
貴族院議員　白川資長
富山縣知事　白根竹介
大禮使典儀官　男爵　白根松介
勳一等　白水淡
同夫人
農林技師　白澤保美
臺灣總督府交通局理事　白勢黎吉
朝鮮總督府事務官　白銀朝則
警視廳警察課長　白井演
京城帝國大學教授　志賀潔
衆議院議員　志賀和多利
貴族院議員　志村源太郎
衆議院議員　志村清右衛門
勳一等　志水少一郎
同夫人
勳一等　志岐守治
同夫人

京都帝國大學教授　志田順
衆議院議員　志波安一郎
文部技師　柴垣鼎太郎
札幌師範學校長　柴垣則義
鑛山監督局長　柴山雄三
富山高等學校長　柴山槐郎
陸軍大將　柴五郎
同夫人
文部省維新史料編纂委員　勳二等　柴田駒三郎
熊本地方裁判所長　下山英五郎
內閣統計局長　下條康麿
大禮使事務官　下村壽一
衆議院議員　下元鹿之助
貴族院議員　下出民義
掌典　下田義照
大禮使典儀官　芝葛盛
同　芝忠重
文部省圖書局長　芝田徹心
男爵　芝亭公同
子爵　芝山孝豐
仙臺高等工業學校長　新保德壽
山口高等學校長　新保寅次
檢事正　茂見義夫

京都帝國大學教授　新城新藏
佐賀縣知事　新城祐治郎
貴族院議員　子爵　新城直知
山形縣知事　篠原英太郎
衆議院議員　篠原和市
第四高等學校教授　篠原一慶
李王職次官　篠田治策
東京帝國大學教授　澁澤元治
男爵　澁谷隆敎
行政裁判所評定官　宿利英治
帝室林野局技師　鹽澤健
檢事　鹽野季彥
貴族院議員　侯爵　四條隆愛
大禮使參與官　男爵　四條隆英
勳一等男爵　幣原喜重郎
同夫人
臺北帝國大學總長　幣原坦
陸軍少將　四王天延孝
衆議院議員　床司良朗
同　庄普太郎
海軍少將　重岡信次郎
衆議院議員　重松重治
文部大臣　勝田主計
勳一等

衆議院議員中將　陸軍大佐　海軍大佐　貴族院議員　貴族院議員　貴族院議員

同　森　蠡　昶
貴族院議員　森　半兵衛
衆議院議員　森　正　則
同　森　峰　一
東京蠶業試驗所技師　森　繁太郎
大禮使事務官　森　泰　治
衆議院議員　森　田　茂
同　森　田政義
貴族院議員　森　田福市
大禮使事務官　森　田久造
陸軍大將　森　岡守成
同　夫　人
大禮使典儀官　森　岡常藏
茨木縣知事　森　岡二郎
勳一等　森　山慶三郎
同　夫　人
衆議院議員　男爵　森　村市左衛門
同　森　本千吉
森　保祐昌
子爵　毛利高範
同　毛利元恒
男爵　毛利元良
衆議院議長　元田肇

香川縣知事　元田敏夫
內務大臣　望月圭介
廣島縣會議長　望月乙也
京都帝國大學教授　本野享
京都高等工藝學校教授　本野精吾
大阪每日新聞社長　本山彥一
大禮使事務官　泉二新熊
東京帝國大學教授　諸戶北郎
衆議院議員　守屋榮夫
同　粟山博
福井高等工業學校長　關盛治
貴族院議員　關義壽
同　關直彥
大禮使典儀官　關根正直
大禮使事務囑託　關根郡平
地方事務官　關口勳
岩手縣會議長　關口松太郎
勳一等　關屋貞三郎
同　夫　人
釜山中學校長　關本幸太郎
大藏省書記官　關原忠三
東北帝國大學教授　關口蕃樹
銀行檢查官　關場偵次

大禮使事務官　關田繁里
白峰宮司　關目琴季
侍從武官　瀨川章友
貴族院議員　瀨川彌右衛門
衆議院議員　瀨川光行
學習院教授　瀨川秀雄
貴族院議員　瀨谷勇次郎
貴族院書記官　瀨古保次
勳一等　仙石貢
同　夫　人
大禮使參與官　子爵　仙石政敬
貴族院議員　男爵　千田嘉平
同　同　千秋季隆
朝鮮總督府全羅南道知事　石鎭衡
伯爵　清閑寺經房
朝鮮總督府技師　稅田谷五郎
金澤醫科大學長　須藤憲三
朝鮮總督府慶尙南道知事　須藤素
陸軍憲兵大佐　須藤昇司
判事　須賀喜三郎
衆議院議員　須之內品吉
檢事　鱸重康
農林參與官　砂田重政

侍從武官　住山德太郎
大禮使事務囑託　澄田賚四郎
海軍大將　鈴木貫太郎
同　夫　人
陸軍大將　鈴木莊六
同　夫　人
陸軍大將　鈴木孝雄
同　夫　人
勳一等　鈴木喜三郎
同　夫　人
山梨縣知事　鈴木信太郎
鈴木達也
京都帝國大學教授　鈴木虎雄
海軍中將　鈴木重道
陸軍々醫監　鈴木久之進
橫濱高等工業學校長　鈴木達治
大禮使典儀官　鈴木元美
東京帝國大學教授　鈴木梅太郎
陸軍中將　鈴木一馬
東京教員養成所長　鈴木武太郎
衆議院議員　鈴木英雄
同　鈴木富土彌
同　鈴木巖

八坂神社　陸　大禮使典儀官　貴族院議員　正三位勳一等　男爵　山田一陳
神社　少　大禮使典儀官　第一高等學校長　從三位勳一等　文學博士　木村匡
宮司　將　官　內閣印刷局長　正四位勳二等　三浦安
同　同　大禮使參與官　通信大禮使事務囑託　正四位勳二等　子爵　芳川顯正
同　同　大禮使事務官　京都府立第一高等女學校長　從四位勳三等　中川桃雨
營林局　大禮使事務囑託　從四位勳三等　男爵　田健治郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　牧野伸顯
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　松岡康毅
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　清浦奎吾
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　仙石貢
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　大浦兼武
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　一木喜德郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　水野錬太郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　後藤新平
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　床次竹二郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　犬養毅
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　尾崎行雄
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　加藤高明
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　若槻禮次郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　田中義一
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　濱口雄幸
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　幣原喜重郎
同　同　大禮使事務官　從四位勳三等　男爵　浜口雄幸

田中新七　同夫人
苗加房三郎　同夫人
鈴木吉之助　同夫人
野村與兵衛　同夫人
大西太郎兵衛　同夫人
田中三郎　同夫人
淺山富之助　同夫人
田邊正記　同夫人
太田淺次郎　同夫人
松尾規矩　同夫人

本市罹災塡補基金委員

萩野治二郎　同夫人
吉岡德太郎　同夫人
中西勝太郎　同夫人

三上金治　同夫人
久保田庄左衞門　同夫人
田畑房次郎　同夫人
井林清兵衞　同夫人
木村勘兵衞　同夫人
小西嘉一郎　同夫人
大久保作次郎　同夫人

本市篤志者

梶居藤治郎　同夫人
大野英夫　同夫人
下鄉傳平　同夫人
日下卯三郎　同夫人
安田耕之助　同夫人

同夫人
橋本永太郎　同夫人
鈴木吉之助　同夫人
鈴木紋吉　同夫人
岩本義德　同夫人
川橋豐治郎　同夫人
松下平三郎　同夫人
山本時治郎　同夫人
上野捨次郎　同夫人

下村萬次郎　同夫人
小西辨治郎　同夫人
竹林久治郎　同夫人

中川新太郎　同夫人
伊藤豐之助　同夫人
元川喜之助　同夫人
川上清　同夫人
田崎信藏　同夫人
前田彦明　同夫人

本市有功者

東枝吉兵衞　同夫人
古川吉兵衞　同夫人
中村榮助　同夫人
岡本專助　同夫人
河北武兵衞　同夫人
朝尾春直　同夫人
濱岡光哲　同夫人
中村常次郎　同夫人
中安信三郎　同夫人
下間庄右衞門　同夫人
大澤善助　同夫人
上田萬次郎　同夫人

神田達太郎　同夫人
渡邊昭　同夫人
小篠長兵衞　同夫人
三好龜太郎　同夫人
伊達虎一　同夫人
澤田辰之助　同夫人
井上治三郎　同夫人
井口巳之助　同夫人
江羅直三郎　同夫人
山下樞之助　同夫人
伊藤平三　同夫人
大原余吉　同夫人

中村傳　同夫人
杉本カメ
六鹿清治　同夫人
大倉恒吉　同夫人
渡邊郁二　同夫人
瀧野德右衞門　同夫人
山田茂助　同夫人
齋藤儀助　同夫人
名和助市　同夫人
平井英子
田中新一郎　同夫人
服部七兵衞　同夫人
松岡健太郎　同夫人

三井八郎右衞門　同夫人
岩崎小彌太　同夫人
住友吉左衞門　同夫人
野村德七　同夫人
安田善次郎　同夫人
下村正太郎　同夫人
田中博　同夫人
太田光熙　同夫人
藤井音次郎　同夫人
菅野松次郎　同夫人
阪本タカ
長澤英太郎　同夫人

山中松治郎
同　夫人
福井繁太郎
同　夫人
森田菊之助
同　夫人
水野竹次郎
同　夫人
田中善八
同　夫人
矢代仁兵衛
同　夫人
淺井安次郎
同　夫人
山田啓之助
同　夫人
堀野久造
同　夫人
外村與右衛門
同　夫人
横田永之助
同　夫人
中川德右衛門
同　夫人
山口玄洞

同　夫人
林新助
同　夫人
片岡金七
同　夫人
荒川益次郎
同　夫人
井村健次郎
同　夫人
山中平三郎
同　夫人
島津源藏
同　夫人
安藤榮藏
田中登志子
濱口富三郎
同　夫人
内貴清兵衛
同　夫人
熊谷直之
同　夫人
市田彌三郎
同　夫人
土橋嘉兵衛
同　夫人

武藤山治
同　夫人
谷川茂次郎
同　夫人
白井信太郎
同　夫人
平井仁兵衛
同　夫人
曾野作太郎
同　夫人
奥主一郎
同　夫人
内田龜市
同　夫人
吉田忠
同　夫人
片岡直溫
同　夫人
藤井彦四郎
同　夫人
小山友治郎
同　夫人
井上利助
同　夫人
福田重助

同　夫人
樂惣吉
同　夫人
堀健之助
同　夫人
三谷卯三郎
同　夫人
湯淺七左衛門
同　夫人
飯田新七
同　夫人
山口源兵衛
同　夫人
長瀨傳三郎
同　夫人
下郷みつ
下村忠兵衛
同　夫人
熊谷萬助
同　夫人
稻垣恒吉
同　夫人
津田榮太郎
同　夫人
藤田德次郎

同　夫人
島原鐵三
藤井善助
同　夫人
大澤德太郎
同　夫人
竹上藤次郎
同　夫人
奈島藤助
同　夫人
辻村多助
同　夫人
寺村直一
同　夫人
今井貞次郎
同　夫人
西村總左衛門
同　夫人
杉本眞太郎
同　夫人
前川嘉三郎
同　夫人
田中一馬
同　夫人
黑田重助

同　夫人
日本銀行京都支店長
同　夫人
稻畑勝太郎
同　夫人
染谷寛治
同　夫人
白波瀨季次郎
同　夫人
原邦造
同　夫人
佐々木久邇
同　夫人
廣田長三郎
同　夫人
川崎八右衛門
同　夫人
杉浦治郎右衛門
同　夫人
北垣晋一
同　夫人
田附政次郎
同　夫人
中林仁一郎
同　夫人

侯爵細川護立
同　夫人
奥村安太郎
同　夫人
石原彌七

同　夫人
柴田正三郎
同　夫人
山田とも

本市市政記者

中外通信社　鳴海喜一郎
同　夫人
東亞通信社　井上正之助
同　夫人
都通信社　大槻喬
同　夫人
京都日出新聞社　岸田正三
同　夫人
京華日報社　村上忠平
同　夫人
京都日日新聞社　辻原健堂
同　夫人
京都日報社　棚橋慶次
同　夫人
京都中央新聞社　飯塚孫士
同　夫人
京都毎日新聞社　福田稔
同　夫人

關西毎日新聞社　坪田光藏
同　夫人
大阪毎日新聞社京都支局
越智祐男
同　夫人
大阪朝日新聞社京都支局
西村勇治郎
同　夫人
大阪時事新報社京都支局
守田耕治
同　夫人
大阪朝報社京都支局
和田安三郎
同　夫人
新愛知新聞社京都支局
三原盤
同　夫人

第三節　外賓接遇

御大禮參列の友邦使節の接伴に關しては、本市事務局内記係に於て早くより之が準備に當りしが、愈々入洛の期も迫りたるを以て萬遺憾なきを期するため、安川助役、小泉係長、木寺事務員は何れも十月下旬東上、大禮使典儀部接伴係と詳細に渡り打合せをなす所あり、更に通譯應援者を必要とし同志社竝に關西日佛學館へ交渉の上、次の教授、講師等六名を本市内記係の囑託とし應援を求むる等、諸般準備の完成に努めたり。

同志社大學教授	難波紋吉
同　講師	有賀鐵太郎
同	魚木忠一
同	松井七郎
同	原田文子
關西日佛學校教授	宮本正清

一　滯洛中の接伴日程

(一)　外賓接伴日割

月日	曜	午前	午後	夜
十一月八日	木	京都發 東京發 午前八、〇〇	京都着 午後六、二〇	
同　九日	金			
同　十日	土	賢所大前の儀 都ホテル發 午前八、〇〇 京都ホテル發 同　八、二五	紫宸殿の儀 都ホテル發 午後一、〇〇 京都ホテル發 同　一、二五	
同　十一日	日		修學院離宮（御茶） 都踊見物（歌舞練場）	
同　十二日	月		能樂見物（公會堂） 比叡登山 （雨天中止）	
同　十三日	火	琵琶湖周遊 同　上		
同　十四日	水			
同　十五日	木	奈良遊覽 京都發 午前一〇、五〇 奈良着 同　一二、五〇	同　上 奈良發 午後五、〇〇 京都着 同　六、〇〇	
同　十六日	金	大饗第一日の儀 都ホテル發 午前一〇、五〇 京都ホテル發 同　一二、一五		
同　十七日	土		大饗第二日の儀（大使使節） 都ホテル發 午後六、〇三 京都ホテル發 同　六、一八 （同夜宴の儀 大使使節及隨員）	
同　十八日	日	京都市長園遊會 （午前十一時 植物園）	京都ホテル發 七、三三	
同　十九日	月	歸京 京都發 午前八、三〇	東京着 午後六、五〇	

(二)　通行道筋案

本市の地理竝に事情に疎き外賓に對し、聊かにても不快の念を懷かしめざるやう特に留意をなせしが、通行路に對しては特に宮内省技手と打合せの上、次の道筋案を立てたり。

1　入洛の際

イ　京都驛より烏丸通を北へ四條通を東へ河原町を北へ京都ホテルへ

ロ　同四條通を東へ東山通を北へ三條通を東へ都ホテルへ

2　御所參入の際

イ　京都ホテル發河原町通を北へ丸太町通を西へ烏丸通を北へ蛤御門へより宜秋門へ

ロ　都ホテル發三條通を西へ東山通を北へ二條通を西へ河原町通以下同上

3　修學院離宮拜觀の際

イ　京都ホテル發河原町を北へ葵橋河合橋を渡り高野川東岸に沿ひ北へ右へ左へ大原街道山端より修學院道を離宮へ

ロ　都ホテル發二條通を西へ東山通を北へ丸太町通を西へ河原町通を北へ以下同上

4　比叡登山の際

イ　京都ホテル發河原町通を北へ葵橋河合橋を渡り出町柳驛より電車

ロ　都ホテル發三條通を西へ東山通を北へ丸太町通を西へ河原町通りを北へ以下同上

5　都踊觀覽の際

イ　京都ホテル發河原町通を南へ四條通を東へ花見小路祇園歌舞練場へ

ロ　都ホテル發三條通を西へ東山通を南へ四條通を西へ

6　琵琶湖見物の際

イ　京都ホテル發河原町通を北へ二條通を東へ東山通を南へ仁王門通を東へ大津街道を大津へ

ロ　都ホテル發大津街道を東へ大津へ

7　大饗宴の際

御即位の際と同樣とす乾御門より入り第一朝集所へ

8　奈良見物の際

イ　京都ホテル發河原町通を南へ七條通を西へ烏丸通を南へ京都驛へ

ロ　都ホテル發三條通を西へ東山通を南へ四條通を西へ河原町通を南へ以下同上

9　園遊會の際

イ　京都ホテル發河原町通を北へ　丸太町を西へ　烏丸通を北へ　植物園へ

ロ　都ホテル發三條通を西へ東山通より丸太町へ烏丸通を北へ植物園へ

10　晩餐會の際

イ　京都ホテル發河原町より二條通を東へ公會堂へ

ロ　都ホテル發三條通を西へ神宮前を北へ公會堂へ

11　退京の際

入洛の際に準す

(三)　出迎及訪問

聯盟國二十六ヶ國の使節の內、ゾルフ獨逸大使を除き二十五ヶ國の特派大使竝に使節、同夫人一行及び之が接伴の宮內省陸海軍將校等を併せ二百餘名を乘せたる特別專用列車は、八日午前六時二十分京都驛に到着せり。

本市よりは市長兩助役を始め、長田主事西山吉村高松以下七名の通譯囑託隨伴の上出迎へたり、各使節は何れも溢れん計りの愛嬌を振り撒きながら、堅き握手は國際交驩の和氣藹々たる內に交はされたり、之を終りてベルギー、アメリカ、イギリス、フランス、三宮中席次の順序に規則正しく、宮內省大禮使差廻しの華やかなる自動車により、夫々宿舍たる兩ホテルに向ひたり、宿舍に到着を俟ちて市長竝に市長代理は兩宿舍を訪問し、各使節竝に夫人に對し慰問品として次の數點を贈れり。

一　果物籠入(柿、栗、葡萄)　一籠宛

內譯

1　柿　　府下久世郡寺田村農會產　　三十個宛

2　栗　　府下天田郡川合村農會產　　五升宛

3　葡萄　山梨縣勝沼町販賣組合產　　一貫目宛

4　籠　　青竹製、圓形、楕圓形、柄付

一　邦文京都名勝誌上製及英文案內　各一部宛

(四)　本市の招待　(十一月十二日)

1　都踊へ招待

修學院離宮の閑靜なる御庭に半日の好遊をなせし國賓一行は、定刻迄に歌舞練場に到着、美しき菊花の徽章と英文案內書を受けて、市長助役其の他市接伴員の案內により先づ休憩室に入りたる後、祇園松本福鶴の御手前にて抹茶を啜り觀覽席に着く、踊りは奉壽萬歲樂にて洽ねき歌に始まり、四季のバックを替へて大喝采の裡に踊り納む、時午後七時。

2　時代祭及能樂招待

十一月十二日は特に時代行列の開催せらるゝことゝて、市民は早朝より沿道の兩側に黑山を築きたりしが、本市は國賓の爲に特に應天門前に棧敷を設けて觀覽せしむることゝしたり。

先づ到着の來賓を平安神苑に導きて釣殿に茶菓の饗應をなせしが、純日本式の神苑の風光に少からざる興を懷き、中にもベルギー大使の如きは「今日は僕の家內が病氣で來られぬので此風景に接せしむることが出來ないのを遺憾とする他日電話するから、厄介だが見せてほしい」などゝ日走れる程なり、午後二時過ぎ先頭勤王山國隊のバンドの音の聞え初むるや、接伴員より次の「ゼ、ヒストリカル、ページエント」を配付し、席定まるや通譯は懇切なる說明を與へたりしが、日本特有の歷史的風俗の實際に一同魅惑されたるものゝ如し、尙當日三時より市公會堂に於て奉祝會主催の能樂あり、別記番組によりて行ひたりしが、古典的の樂及び風俗には之れ又大喝采を博したり。

3　園遊會招待

本市園遊會に就きては既に述べたる如くなるが、外國使節の一行は打揃つて午後零時半着、門外に乘り棄つべき自動車も外賓だけは特に園內に引入れ、席次の關係より外賓は別に流木神社池畔の天幕にて開宴、次で他來賓と共に園遊會に誘ひたりしが、市內七遊廓の代表的美人の酒間斡旋と、祇園山鉾屋臺の笛太鼓の囃しと、餘興場の藝妓手踊には一入の盛興を呼びたるものゝ如く、某國大使の如きは美人に取卷かれて恰もエデンの園を思ひ浮べたるが如く大滿悅の體なり、一同名殘を惜みつゝ散會せしは大成功なりしとや言はん。

4　晩餐會招待

國賓竝に大禮參列員中勳一等以上の顯官三百餘名の旅情を慰すべく本市が主催したる晩餐會は、秩父宮殿下を始め奉り　皇族御九方の台臨を仰ぎ、十八日午後七時より市公會堂に嚴めしく開催したるは前節既に述べたるが如し。

當日來臨の各外國大使使節竝に隨員は何れも開會前フインランド公使を先頭に續々來場市長兩助役に感激の握手を交はしサンキユー、ダンケ、マシイボクーを繰り返しつゝ　各皇族殿下と同樣東館階上の休憩室に入れり本市よりは御土產品として大木製太平樂人形大型を使臣夫妻に、小型を隨員に呈し、饗宴は別記の如く大盛況裡に午後八時四十分終了したり。

(五)　市廳舍內接待

本市廳內に於ては大禮參列員應接室を五日より二十五日まで設くることゝし、本廳貴賓室を當てたりしが、特に外賓に對しては歐文芳名錄を備へ付けて來訪者に署名を乞ふことゝし、茶菓は邦人の爲のみの準備なりしにより、外賓來訪の際は京都ホテルより茶菓を取寄せたり尙外賓應接係一名を絕えず勤務せしめて、其の來訪に具へたりしが、特に市長公舍內にも專任の國賓係を置き高松囑託を專務としたり。

(六)　博覽會案內

外賓は外出に際しては國賓として必ず宮內省差廻しの華かなる自動車なるが故に之を目印として博覽會に案內したり、而して守衞は外國語に通ぜざる爲無言のまゝ入場せしむるを例とせり。

但し博覽會に於ては別揭英文案內書竝に繪葉書等を贈呈したり。

(七)　見　送

二十九日午前八時三十分發國賓一行は京都を引上げ歸東の豫定なるを以て、安川、岡田兩助役、北崎收入役及西山外各通譯は見送りのため定刻前京都驛にて待受けたり。

驒てゾルフ大使を除く二十五ヶ國の聯盟各國使臣及隨員竝に宮內省接伴員等は、續々着驛滯洛中の感激を色に浮べながら握手もいと名殘惜しげに、號笛と共に東京行特別列車によりて歸東したり。

次の英文は何れも小冊子として贈呈したり。

The Historical Pageant.

The Jidai-matsuri or the Historical Pageant is held in October every year on the festival day of Heian-jingu. It represents various periods of the history of Japan over one thousand years since Emperor Kammu made Kyoto the capital of Japan in 794 A.D. It began in 1895, and is usually held on October 22nd, the day when Emperor Kammu arrived in Kyoto.

The first part of the procession is formed in front of Heian-jingu at 8 a. m. It is headed by servants, kalavinka birds, butterflies and musicians. Then follow the sacred tree, the food, the casket, a priest (on horse back) in ordinary vestment, spears and shields, bows and arrows, the sacred sword, a priest (on horse back) in full dress, two attendants, a priest (on horse back) in ceremonial vestment, the purple canopy, the sacred carriage, the sedge canopy, the casket, the sacred horse, the chief priest (on horse back) in full dress, the master of ceremonies (on horse back) in full dress, and servants.

This procession marches down to the City Hall, and is joined by the Historical Pageant proper which is formed in front of the City Hall at 9 a. m. The Historical Pageant proper is headed by a band of men with swords on their backs, some beating drums, the others playing on flutes. This band is called **the Loyalist Corps of the Reformation.** It was added to the pageant in 1921 A. D. in place of the Hill Country Corps which represented the Loyalist army at the time of the Meiji Reformation.

This is followed by **the Archery** which is formed by some descendants of a famous ancient archer Yorimasa Minamoto.

The rest of the procession is as follows:

The Daimyo Procession of the Tokugawa period.

The Shogun paid respect to the Emperor at every new year by sending up to Kyoto one of his relatives or some other daimyo who had been a hereditary vassal. This grand procession is given in the pageant.

Nobunaga Oda Entering Kyoto.

This section represents Nobunaga marching into Kyoto after he had subdued the province of Lake Biwa in 1567 A.D. by Emperor Ogimachi's Command. There are several famous warriors in his train such as Hideyoshi, Kazumasu, Katsuie etc. all on horse back.

Yabusame or the Shooting Party.

This represents the Kamakura Period Emperor Gotoba was much annoyed by the Shogun in the twelfth century. So he secretly gathered Knights near by pretending to have a shooting party.

The Civil Officers of the Fujiwara Period.

This section represents the civil officers in court dress in the golden age of the Fujiwara Period.

The Military Officers of the Enryaku Era (78?-805 A.D.)

In this section General Tamuramaro and his men are represented as they went out to conquer the north-eastern part of Japan by the Emperor's command in 801 A.D.

The Civil Officers of the Same Era.

These figures represent the officials who did much in making Kyoto the Capital. There are Fujiwaras, Kiyomaro Wake, Tamuramaro Sakanoue etc. all in court dress.

This long procession of the Historical Pageant marches up Teramachi as far as Nijo, then turns off to the west and goes to Karasumarudori. Here it turns to the south, and at Shijo it turns to the east and reaches Teramachi. Then it turns to the south and comes to the resting place. At 1 p. m. it starts back again going through Teramachi Shijo, Nawate, Sanjo and Otemon. Then crossing Keiryo Bridge it comes back to Heian-jingu.

The present order of the procession is just the reverse of that of the first Pageant in 1895 A.D.

This Historical Pageant is a most unique spectacle. Gorgeous helmets and armours, elegant garments of ancient periods; beautiful flags and shining coats of arms; the archery and the loyalist corps; all with accompanying music; a brief and striking review of the history of a thousand years.

The pageant is performed by the citizens of Kyoto who are members of Heian-ko association. The city is divided into eight sections. The first section takes the civil officers' part of the Enryaku Era, the second the military officers of the same era, the third the civil officers of the Fujiwara period, the seventh the servants, Kalavinka etc. These four sections are in Kamigyo-ku or the upper ward. The fourth section takes the shooing party, the fifth Nobunaga Oda, the sixth the Daimyo procession of the Tokugawa period, the eighth the loyalist corps. These four sections are in Shimogyo-ku or the lower ward. The costumes and the implements are kept either in their sections or at Heian-jingu.

An Outline of the Kyoto Grand Exposition in Commemoration of the Enthronement

This autumn in November, there will be held the grand and solemn ceremonies of the enthronement of His august Imperial Majesty, the Emperor of Japan who is the one hundred and twenty fourth in the Imperial succession. This great ceremony evokes the rejoicing of all classes of the whole nation. As Kyoto is to be the scene of these exalted ceremonies, it is especially concerned to celebrate the occasion fittingly, and as one means of doing so, it is holding both before and after the enthronement a great exposition which will contribute to the welfare of this new Showa (Radiant Peace) Era. This is not an enterprise of the city of Kyoto only but is an expression of the earnest desire of the whole nation to celebrate this supreme event in the process of its history, as is evidenced by the supports it is receiving from the influential persons both official and private in all parts of the Empire.

The plan of this exposition is different from former one in scale. It will be located in three different parts of this famous old capital of Japan which is noted far and wide for its wonderful scenery. The chief building will be the magnificient and exquisite Taireikan or Great Ceremonial Hall, while in other halls will be exhibited in orderly arrangement the most perfect specimens of all the products of Japan's agriculture and industry, besides which there will be seen the latest achievements of modern science. Thus this Grand Memorial Exposition will be a splendid national celebration of the enthronement.

It is impossible to imagine a more marvelous sight than to see millions of loyal subjects from every part of the Empire gathered in Kyoto for the great ceremony and making the surrounding mountains, covered with their brocade of glowing autumn maples, echo with their swelling shouts of "Banzai."

To realize this main object, Kyoto City, with the help of powerful supporters from all over the Empire, will not only provide every convenience and facility for visitors from all parts of the country, but is exerting its energies without limit to make perfect provisions even in the minutest details for the comfort and convenience of its foreign guests. It is sincerely hoped that these friendly visitors from other countries will come not only to share in the magnificent celebration of the Grand Enthronement of Their Majesties, the Emperor and Empress Kinjo, but also that they will take the opportunity of visiting the Grand Memorial Exposition.

大禮に際し全國各地方より入洛せる新聞雜誌記者竝に寫眞班員の招待に就ては、當初より之が豫算を計上して準備中なりしも、宮内省に於て認むる大禮記者團及び謹寫團員の數竝に氏名の確定を見ざりしが爲其の計畫を進むる能はず、漸く旬日に迫りて着手したりし程なりしが、各係員の熱誠なる努力は克く總ての整備を遂げ、萬遺憾なく終了することを得たり、其の大要次の如し。

一　招待範圍

招待者は前大正大典の例に做ひ、宮内省の認むる全國の各新聞記者に對し一社一名宛を招待すべき計畫なりしが、宮内省の決定方法前回とは全く異なり、今回は東京の二十一日會（都下大新聞社の主筆編輯長部長等有力者の會）の推薦に係るを認むることゝなり、別紙九十餘社七百餘名の記者が大禮記者團員と決定されしを以て、府接待部とも打合せの上同一方法によりて招待することゝし、招待は全部宮内省にて認められたるものとし、之に本府下及本市内の社に對しては多少の斟酌を行ひ其の範圍及人數を決定したり。

二　招待方法

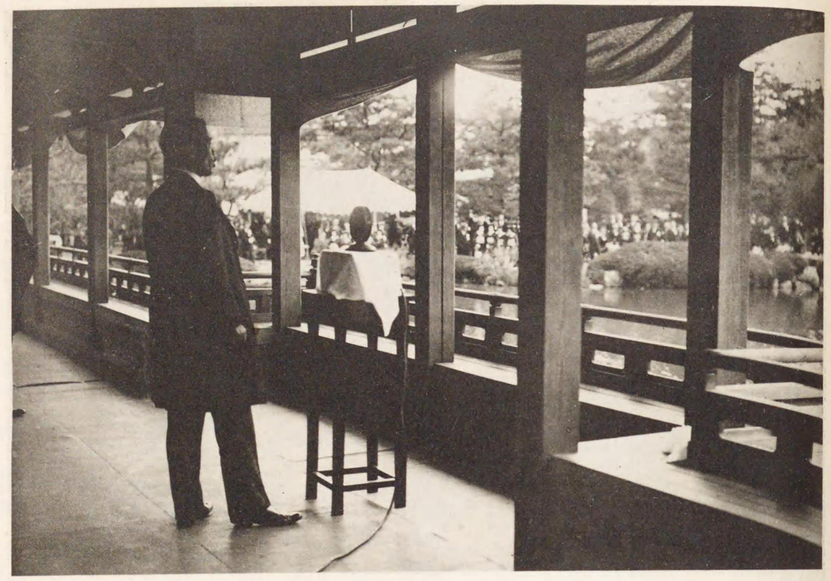
日は十一月九日を選び、會場には平安神宮神苑を充て大園遊會を催ふすべく計畫せり、こは來會者は七百名といふ多人數にして普通の場所にては收容困難なると、同苑は秋郊の京都を偲ばすべき風致を有するを以てなり、開催方法に就ても初は大天幕張を設けて七百名の座席を作りその會食後園遊會とすべき計畫を立てたりしが、寧ろ時間に拘束なき園遊會として全力を注ぐ方可ならんとし之に一決したり。

三　順　序

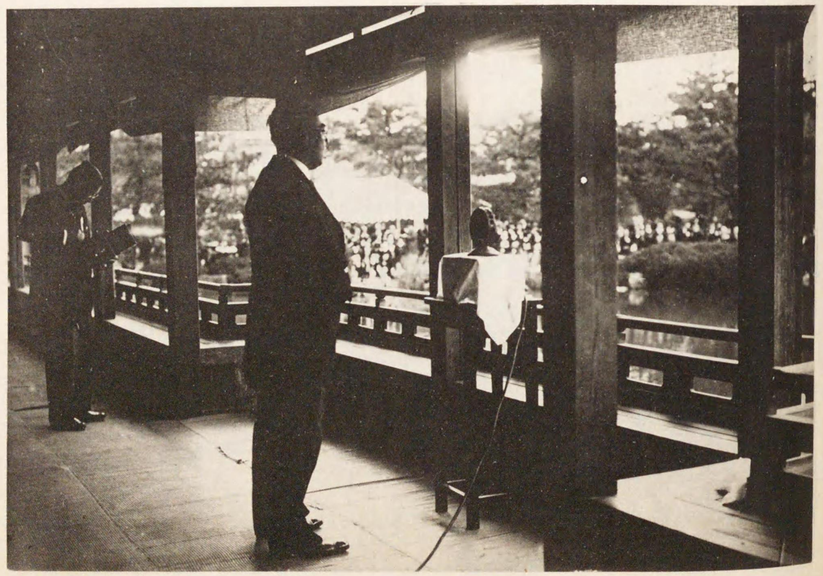
先づ受付にて徽章を渡し舞妓によりて苑内へ案内す、入場すれば先づ樂燒の設備あり、此處にて樂燒に興じつゝ隨時に床几に着けるやうにし、料理一籠と吸物なぞを出す、之より摸擬店の隨時隨所廻りをなす順序なり、摸擬店の種類は、酒、ビール、ちまき、團子、燒鳥、關東煮、果物とし、宴酣となるや橘殿にて祇園舞子藝妓の舞及遊船を池に浮べて祇園囃しの餘興を行ふ、尚、大阪市音樂隊の壯快なる「ブラスバンド」の響きを場内に溢れしめたり、歸途は京都名勝誌及京洛八景版畫（寫眞參照）を郡内の風呂敷包みとし記念品として贈呈せり。

四　設　備

一　神苑正門に高さ二間半周圍四尺二本立綠門を設く
二　門内入口西側に十坪の天幕張を設け記念品渡所とせり
三　受付は入口西側に細長く十五坪の天幕張とせり
四　應天門を入りたる廣場車寄せに二百坪の天幕を張り料理場とせり
五　其の横に十五坪の天幕張救護所を設けたり
六　苑内貴賓室前廣場及び裏手池寄りの處に床几四百を配り赤毛氈を敷けり

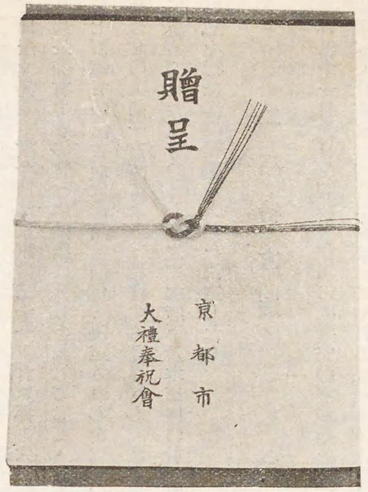


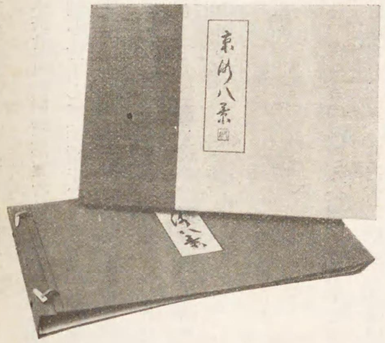
全國新聞雜誌記者招待園遊會



同　上

同渡殿の東空地に床几百五十同上





より招待人に行渡るべく筆、繪具等をも備へ付けたり

九　郵便箱に摸したるものを作り當日來賓の投票用に供せり

一〇　渡殿に擴聲器を設へ付けたり

五　當日の狀況

當日は前日來の雨にて午前七時頃よりは一入强雨の模樣なりしが、十一時頃よりは西の風應雲を拂ひ晴天となるべきを確めたり、最も好都合なりと感ぜしは、始め案内は午前十一時開宴と定め招待狀をも發送したりしが、同時刻は新聞記者の最も多忙なる時間なれば午後一時となす方よろしかるべしとの市政記者の意見もあり、匆卒變更の通知を發送せしが、天候と相俟ちて兩々其の全きを得たりし事なり。

正午より續々來場者詰めかけ、午後二時には園内殆んど滿員の狀況を呈す、藝妓百名の幹旋にて漸次各摸擬店は繁昌し行く、宴酣となるや、土岐市長は渡殿の中央擴聲器の前に立ち別記の挨拶をなし、次に記者團代表して梁田委員長（中外商業新報社長）の挨拶あり、更に市長の發聲にて　天皇陛下の萬歳を三唱し、淺山市會議長の發聲にて大禮記者團の萬歳、梁田委員長の發聲にて京都市の萬歳を三唱せり。

此間餘興數番は渡殿の中央を中心として演ぜられ池邊は遊船に掉したる藝妓の袖園囃にざよめき渡れり。

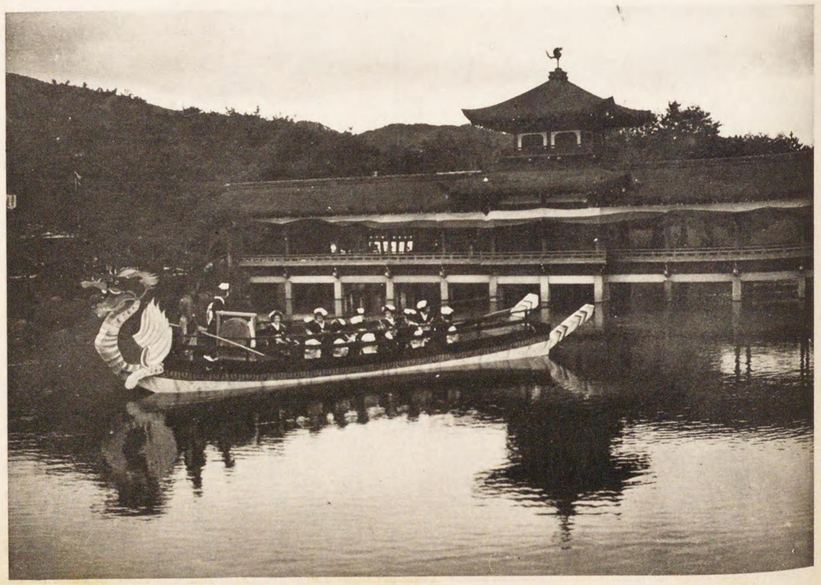
主客歡を盡して全く散會せしは四時半、大盛況の裡に招待園遊會を終りたり。

御挨拶

嚮ニ　大禮ニ際シ報導ノ大任ヲ帶ビラレテ御入洛ニ相成リマシタ新聞社通信社ノ方々ノ御來臨ヲ忝ウシ本市ニトツテ最モ由緒深キ平安神宮ノ神苑ニ於キマシテ半日ノ歡ヲ盡シテ戴キマスル機會ヲ得マシタコトハ私ノ深ク光榮トイタストコロデアリマス。

各位ガ有セラルル卓見ト機敏ナル御活動ト各社ガ最善ノ努力ヲ盡サレマシタ報導機關ノ完備トハ諸儀式ヲ面ノ當リ拜スルコトノ出來マセ

（餘興）會遊園待招者記誌雜聞新國全



上　　同

陛下ノ赤子ニ大々賞紙ヲ通ジ坐ナガラ拜觀スルノ思ヒアラシメ之ニヨツテ御盛儀ヲ祝禱シ皇德ヲ景仰セシメラレ尚ホ遠ク海外マデモ迅速且ツ正確ナル報導ノ達スルコトデアリマシテ全國民ハ多大ノ期待ト深甚ナル感謝ヲ禁ジ得ナイノデアリマス。

殊ニ　大禮御擧行ノ地デアル吾ガ京都市民ト致シマシテハ各位ノ御蔭ヲ以ツテ無上ノ歡喜ヲ七千萬同胞ニ頒チ得マスコトハ御職務柄トハ申シナガラ各位ノ御努力ニ對シ一段ノ敬意ヲ表スル次第デアリマス就キマシテハ聊カ御大任ノ御慰勞ノ一端ニモト斯カル粗筵ヲ設ケマシテ御來臨ヲ願ヒマシタルトコロ日夜非常ノ御繁忙ニ渡ラセラルルニモ拘ラズ御差繰下サレマシテ御來會ヲ戴キマシタノハ洵ニ感佩ニ堪ヘヌ次第デ御座イマス。

設備萬端不行屆デハアリマスガ何卒御諒恕下サレ所謂忙中有閑ノ心機ヲモタセラレマシテ京洛ノ秋ノ氣分ヲ充分御味ヒ下サラン事ヲ偏ニ希望致シマス。

昭和三年十一月九日

京都市長　土岐嘉平

招待者氏名

一、本市新聞部委員

中外通信社　鳴海喜一郎
東亞通信社　井上正之助
都通信社　大槻喬
京都日出新聞社　岸田正三

謹啓當地ニ於テ　御卽位ノ大禮ヲ行ハセラルヽニ際シ御入洛ヲ機トシ來ル十一月九日本市平安神宮神苑ニ於テ園遊會相催度候間御繁務中乍御迷惑同日午前十一時三十分御光來ノ榮ヲ賜度此段御案內迄得貴意候　敬具

追テ乍御手數御來否御一報相煩度候

昭和三年十月三十日

京都市長　土岐嘉平

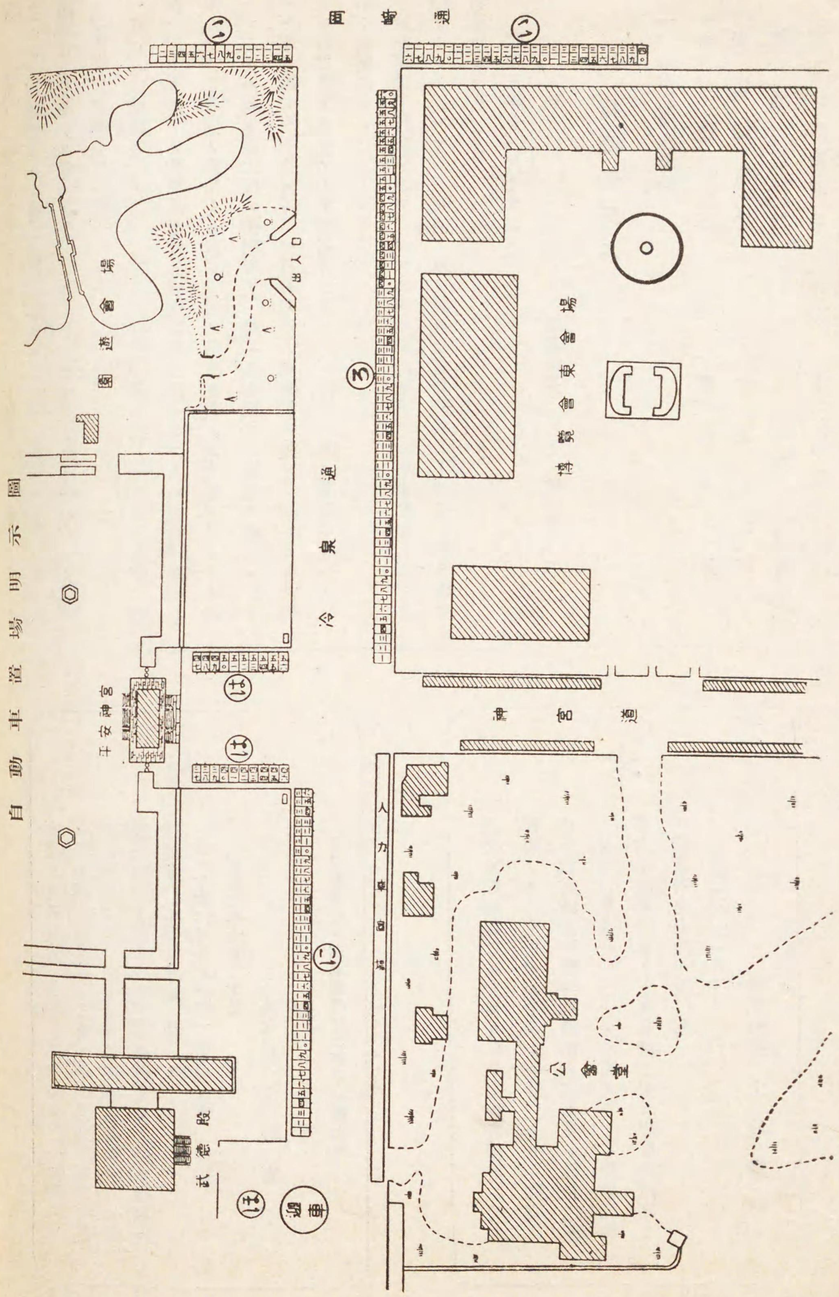
殿

當日御來會ノ際本狀受付ニ御示シ願上候

謹啓先般得貴意候本月九日平安神宮神苑ニ於テ開催ノ本市園遊會ハ午前十一時三十分ニ御案內申上置候處右時間ハ御職務上御差支多數有之趣ニ付同日午後一時三十分開宴ノコトニ變更致候間右不悪御諒承ノ上何卒御光來ヲ賜度此段累ネテ御案內申上候　敬具

昭和三年十一月二日

京都市長　土岐嘉平


順番
冷泉通
自動車置場
京都府警察部
公會堂
人力車置場
公園
平安神宮
京都市役所
京都府立図書館
京都府立医科大学
京都府立医科大学附属病院
京都府立医科大学附属病院
京都府立医科大学附属病院

茅野榮
山本彦三郎
鈴木幸藏
田村寬一
金子憲太郎
田澤義雄
原木幾郎
庄崎俊夫
岡見富
廣田富太郎
淺村成功
栗林貞一
鈴木總二
森澤神行
岡本一平
謹寫團員
大谷忠四郎
林達磨
壁谷祐之
野田豐
細田隆元
山本地榮
多助太郎

東京每夕新聞社
東京朝日新聞社

原田稔
小林晉一
細井吉造
山本實
水野右溪
大谷浩
柏本守人
簗田欽次郎
高畠直定
鍋島嘉門
小田島定吉
重久淑
橫山貞輝
齋藤健二
岡島章治
平井確郎
邊則雄
萩博
中尾龍夫
岡田彥七郎
三浦薰雄
土岐直彥
藤井信二郎

東京夕刊新報社
中央新聞社
中外商業新報社

讀賣新聞社

安藤覺堂
大久保忠鑑
大久保誠丸
山田禾苗
伊藤理基
太田香苗
大竹又治郎
丹羽吉夫
澤野歲造
楓井金之助
細野繁勝
山崎卓雄
千原文英
田中保
眞柄秋德
平福百穗
齋藤源吉
小澤長三郎
山田漸
白石重
長瀨吉治

やまと新聞社
萬朝報社

國民新聞社

帝國新聞社
都新聞社

橫田市治

田中鎌喜智
木井儀兵衛
相原熊太郎
服部鋌三
渡部英夫
木下信行
遠山淳
和田日出吉
保穗幸藏
小野敏夫
京正義太郎
野坂三郎
山川信男
小川克巳
井谷幸德
田口文男
鹽田良温
東部兵勝
渡藤武男
松田義致
前川正三郎
中谷武世
山田寬司

時事新報社

日本新聞社

石川龍星
增田一悅
日本通信社
水野源一郎
此經春也
漆間眞學
漆間一太郎
高橋眞男
日本電報通信社
邊元秀
藤本護
安田禎文
荒井米吉
青木元一郎
綾谷丹陽郎
寺尾要次郎
丸山直一
青野耕吉
齋藤直吉
上田碩三
磯田純一
住田暎助
宮永國雄
横田實
青島秀德

同京都支局
久野繁樹
下園庄藏
金原三郎
永星郎
ドクトル、ヨセフ
中根榮
櫻井泱
潮見秀之助
淺野豐
石黒覺治
德光衣城
濱州一
高橋三郎
宗清賴章
小林五郎
神崎勝久
古野清一郎
長林密藏
原好一
大平要好
山崎義人
山下義夫
近藤公一
川口猪作

新聞聯合

千代田通信社
帝國通信社
愛國通信社
東方通信社
朝野通信社
日本新聞通信社
婦女界社

筒井敏夫
重松政敏
岡村二一
田中德一
井原賴明
渡邊保一
日笠常隆
小谷正雄
中田義治
河口豪
浦神重雄
毛利勝靜
中堀望夫
吉田文外
齋藤優哉
土居員彌
大島三郎
下津三郎
庄司寅男
金子有鄰
小野縣人

第四節　全國雜誌新聞記者團招待會

實業之日本社
中央公論社
醫界時報社
婦女新聞社
大阪府
大阪時事新報社

太田菊孝
久我通龍
都河
大江乙亥門
增田義一
都倉義一
山下秀雄
有本觀之助
島中雄作
田中義一
青木秀虎

西浩吉
增田貞祐
岸本正一郎
中本正信
向井清三
藤原隆一
青井竹三郎
永井一男
砂田治雄
松岡正夫

谷源一郎
佐伯彰
廣瀨馥
大阪每日新聞社
久富達夫
岩井武俊
顯考與一
越智祐男
細見又郎
大野木繁太郎
長岡憲文
後藤浩
本田親男
武居情志
水戸俊雄
服部武雄
來間恭
林正義
高杉孝二郎
一矢慧
大野靜馬
今西京子
須古清
伊佐宗太

宇佐見兼丸
八山作一
木村亮次郎
山本源一郎
荻田友吉
小林次郎
山口信雄
渡邊綱雄
西村勇次郎
井上藤三郎
平井常次郎
吉田淳
松本憲逸
杉浦直治
林有道
柳川玄徹
原田棟一郎
大山千代雄
仲野芳夫
內田直吾
香川順考
謹寫園員
南寶太郎
栗田廸

大阪朝日新聞社
大阪中外商業新報社

夕刊大阪新聞社
日刊工業新聞社
大阪日日新聞社
關西日報社
京華日報社
京都府
京都日出新聞社

平井確郎
野田宗二
前田久吉
妹背平三
坂井康夫
佐々木秀雄
藪中政一郎
福良遞雄
西本縣治
沼忠彰
岩佐忠朝
黑川義明
中村文司
和田傳五郎
東長朗
齋藤謙藏
樋口谷太郎
吉田威夫
後川文藏
後川晴之助
河野勤一
岸田正三
堀內碁作
小畑實
筒井鯉之助
森美義
福田寧雄
淺原謙治
高橋一雄
井揚一
木崎克二郎
加藤藤信
岩田鯉喜千
菱田將男
村上潔
藤本弘三郎
寺岡節三
福井佐太郎
桂田重治
落伏清
竹村智
大島健三郎
桑名鹿雄
江羅直三郎
藤木重次郎
村上忠平

第四節　全國雜誌新聞記者團招待會

高橋眞
竹內彌太郎
松本正次
山元辰雄
佐竹博司
白石古京
進藤信義
川上春峰
辻本和一
高谷貞次郎
青山二郎
岡田成義
船越重太郎
岡本逸平
藤田彌助
芝本清次
杉村收
辻原健堂
山根文雄
片岡暲
橋本梶三郎
高橋吉彌
木下又男
殿井健治郎

京都日日新聞社

中外日報社
京都日報社
丹州時報社
明治新聞社

村田正三郎
上野莊吉
荒木素風
大久保作次郎
森千圃
棚橋慶治
植村源二
大久保喜三郎
川口文男
更谷房治
櫛田季吉
寺本周三郎
磯田義治
河田孝行
水島正男
下司忠彥
平岡達三
松本功
皆川修造
中野種一郎
中內覺次郎
古田耕
藤井音次郎
森口正弘

京都經濟新報社
都通信社
日本經濟通信社
橋立新聞社
丹波每日新聞社
中外通信社
福知山日日新聞社

府中喜作
尾崎幸夫
山名巳之助
加納熊太郎
大槻喬
松田作太郎
西邨吉郎
永井敬
久世德太郎
宮野二郎
草川嘉一郎
川井菊太郎
藤原良三
木村三郎
山岡米藏
前川善吉
宮城仁助
飯田兼治郎
出口榮滿
鳴海喜一郎
藤川佐吉
田村甚四郎
習田愛太郎
岡村季雄

文化新報社
大平樂社
東亞通信社
京都中央新聞社
京都每日新聞社
關西每日新聞社
國華新聞社
大阪朝日新聞社京都支局

堤淨祐
板持隆一
藤本薰
井內龍雄
野村米治
石子基二
井上正之助
青木政和
飯塚孫士
美濃部榮
增田筆雄
鈴木吉之助
西岡小羊
福田稔
殿村健一
廣瀨保方
齋藤齊
八木重太郎
坪田光藏
森本茂
森本岩吉
山田清
松田健治郎

大阪每日新聞社京都支局
大阪時事新報社京都支局
新愛知新聞社京都支局
日本電報通信社京都支局
大阪朝報社京都支局
京都小間物化粧品新聞社
新聞聯合京都支局
萬朝社報京都支局
國民新聞社京都支局
報知新聞社京都支局
中外商業新報社京都支局
名古屋新聞社京都支局
讀賣新聞社京都支局
愛知縣
名古屋新聞社

殿鳥蒼人
柴田義雄
藤谷勝美
武井治
廣瀨數男
原重眞
山本周二
下鄉一雄
山上利三郎

新愛知新聞社

鈴木銳之助
小出義夫
濱野眞砂
掛川喜遊
小林橘川
舟橋勝吉
大橋逸三
山崎兼次郎
遠山繁雄
辰巳吉次
山浦貫一
石井政次郎
尾池義夫
河瀨銀之助
松島穰
吉田戒雪
山田義一
伊藤重一
續木壽三郎
岡田雪心
中野史郎
神戶一
神野巖逸

愛知新聞社

日本材木新聞社

名古屋每日新聞社

杉浦令石
野村浩司
岡田實

東海朝日新聞社

松馬幸一
水野鉦一
淺野金治
松原繁吉

中央通信社

笹尾武
加藤宗男
福田勇太郎
正木由太郎
龜谷幸太郎
大矢背介
山上湘南

共同通信社

伊藤貞五郎
日高萬里
丸山義雄
井筒勝次郎
森本卷太郎
西田武夫
平岡達治
岡田定信

交通社

兵庫縣

神戶新聞社

熱田新聞社

野田信吾
西村義則
藤村菊次郎
平四方司
菊池三男
岡部勝雄
山城了
松田正之
福田正俊
荻原靜一郎
前田德藏

神戶又新日報社

田中伊藏
松本整之亮
岩佐重郎
宮崎義之助
堀切弘道
箸尾昇
肥田喜次郎
大久保魯吉
西田一雄

關西日日新聞社

三重縣

伊勢新聞社

河西春海

南海新報社

伊勢朝報社

神奈川縣

橫濱貿易新報社

静岡縣　静岡民友新聞社　木下明太
中谷清治
中谷清一

福岡縣　九州日報社　田中濟之
福岡日々新聞社

高知縣　高知新聞社　淺野豐
高知新聞社　田村恒喜
赤堀赤山
濱口定

土陽新聞社　長岡常男

岡山縣　中國民報社　中原芳太郎

山陽新報社　萬波靜夫
片山純一
藤田保

巖津政右衛門

前農夫

井口靜一

周藤二郎

新潟縣　新潟毎日社　小寺正志
花屋一夫

新潟毎日社　淺海琴一

北越新報社　廣井一

新潟新聞社　外山傳三郎

德島縣　德島毎日新聞社　小西英夫

宮田美信

梅本締吉

廣島縣　藝備日日新聞社　井上勝太郎

長野縣　信濃毎日新聞社　高橋三郎

群馬縣　上毛新聞社

熊本縣　九州日日新聞社

九州新聞社

秋田縣　秋田魁新聞社

青森縣　東奥日報社

茨城縣　いばらき新聞社　本多文雄

水戸新聞社　岡田次雄

宮城縣　河北新報社　菊池吉次郎

島根縣　松陽新報社　袴田泰二

北海道　北海タイムス社　山西健吉

小樽新聞社

臺灣　臺灣日日新聞社　一力次郎

臺灣新聞社　勝部本右衛門

朝鮮　京城日報社　德富廸

京城日報社　松岡正男

每日申報社　兒島吉治

大連　滿洲日報社　金尚會

繩田養藏

千原文英

謹寫團（普通寫眞）

第四節　全國雜誌新聞記者團招待會

日本寫眞通信社　辻村與三郎

國際情報社　山中時弘

東洋寫眞通信社　星野洪

日刊寫眞通信社　星野龍雄

內外寫眞通信社　福澤七五郎

東京中央放送局　鈴木龜吉

中外通信社　太田直信

關西寫眞通信社　小林東鄕

謹寫團（活動寫眞）　永島金太郎

大日本活動寫眞協會　山本米太郎

全日本映畫業組合　木村政堂

國產活動寫眞協會　田尻種經

米國パテーニュース日本代表　駒田萬次郎

米國フォツクスニュース日本代表　森晴三

米國MGMニュース代表

米國パラマウントニュース代表　中塚傳五郎

米國インターナショナル代表

關西映畫業組合

放送局

日本放送協會　小森七郎
日本放送協會關西支部
大阪中央放送局　廣江恭造
日本放送協會東海支部名古屋中央放送局
東京中央放送局　中山龍治

大禮使長官官房新聞寫眞係

大禮使參與官　三矢宮松
同　事務官　井口延次郎
同　殖田俊吉
同　金子武麿
同　伊藤太郎
同　本多楢一郎
大禮使書記官　半井貞成
同　吉村豐三
大禮使典儀官　高橋其三
杉村愛仁
加藤恭通
若城祐
兼務大禮使事務官　横溝光暉
高木三郎
相川勝六
渡部信
兼大禮使書記官　金崎益技
堀口瑞典
フランシス、リユエラン
マルセル、レー
アンニー、エフ、ブラウン
ガイ、シー、アール
イー、アール、ピユツク
ケー、アール、サバルクル
ジエームス、キング、
テイルルス
才公振
鮑振青
アンデル、デルレー
ボンソンビー、フエーン
ミセス、ペンリントン
ジエネヴイーヴ、ウイ
ムサツト
エリサベス、ケンプスター
マルチン、ネツトケ
ベルシー、ワイテング

大禮使新聞寫眞係

外國記者

アツソシエーテツド、プレス　ジー、バツブ
フオツシツシエ、ツアツング、　エツチ、ベルンシユタイン
ヨーロツパプレス　アール、ビー、ボーズ
ラングーン、メール、フオアワード　ヒユー、バイヤス
ロンドン、タイムス
ニューヨーク、タイムス　エー、アール、カトー
エキスチエンヂ、テレグラフ、　ビー、ダブリユウ、フラ
オーストラリヤ、プレス　ヤーシイ
シカゴ、デーリー、ニユース　エフ、エム、フリン
ロンドン、デーリー、エキスプレス　エム、シー、アグノイエ
アジヤンス、アブアス　エフ、エツチ、ヘツヂス
クリスチヤン、サイエンスモニトール　エム、デー、ケネデー
ルーエル社　シー、ケンウオージー
シヤトル、ポストイン、テ　エー、イー、ピアース
リジエンサー、ウオール　ダブリユー、ロム
ブルツクリン、イーグル、　オー、デー、ラツセル
マニラデーリーニユース　エム、ダブーユウ、ヴオーン
タス社　ジエー、アル、ヤング
ニューヨーク、ソールド、ロ　モンガン、ヤング
ンドン、セントラルニユース　山本精三郎
エナイテツド、プレス　ダグラス、ジー、ヤング
インターナシヨナル、ニユース　同
ジヤパン、クロニクル
神戸ヘラルド社　富森吉次郎
同　浦野穩直
岩田榮三郎
安村長造
西村金三郎
藤原清兵衛
並川榮慶
友田金三郎
百木伊之助
西村力
横江善治郎
俵儀三郎
仲又次郎
多田孫四郎
森田茂
西尾林太郎
生谷龜之助
坂部秀夫
後藤龍太郎
久保長次郎
八木伊三郎
川本元三郎
竹内嘉作

ジヤパン、タイムス
イリユストラシオン、
エキストレム、アジー
ブチ、ジユルナル、エンド
ヨーロツパ、ヌーヴエル
オークランド、トリヴユーン
ロスアンゼルス、エキスプレス
メルボルン、ヘラルド
ボンベー、クロニクル
雜誌ジヤパン
中華電報社
同
シオナル、ヂタリヤ
ロンドン日本協會
ジヤパン、アドヴアタイサー
ウヲールドトラヴエラー
ノースチヤイナスター
オストアジアチツシエルンド、
シヨーニユージーランド、ヘラルド
同

三、市會議員

岡村秀太郎
野淵龜吉
和田孝治
石田音吉

清水藤三郎
比賀江金藏
高山與三吉
寺村助右衞門
前田嘉右衞門
鎌田直治郎
平井權七
田中新七
苗加房三郎
野村與兵衞
大西太郎兵衞
田中三郎
淺山富之助
田邊正記
太田淺次郎
松尾規矩
橋本永太郎
鈴木吉之助
鈴木紋吉
岩本義德
川橋豐治郎
松下平三郎
山本時治郎

第五節　市廳舍內貴賓接待

大禮參列の爲入洛せられし各地の貴顯紳士中には、態々本市廳を來訪して親しく本市の勞を犒はるゝ方尠なからず、九日早朝澤田北海道長官の來訪を初めとして、朝野の貴賓大禮中を通じて二百數十名の多數に上りたり、本市は廳內三階貴賓室を接待室に充て、係員を設けて之等來訪者の旅情を慰めたり、來訪者芳名次の如し。

侯爵　池田宣政
陸軍大將　磯村年
衆議院議員　伊坂秀五郎
伯爵酒井忠良家扶　伊藤宗輔
橫濱稅關長　井上德太郎
專賣局長官　今北策之助
千葉每日新聞社長　五十嵐重郎
沖繩縣知事　飯尾藤次郎
札幌遞信局長　石野斐夫
軍事參議官副官兼海軍軍令部出仕　男爵安保海軍大將附屬　海軍少佐　一宮義之
北海道帝國大學教授　今裕
元帥海軍大將　子爵　井上良馨
海軍中將　伊地知季珍
廣島控訴院長　今村恭太郎
神奈川縣知事　池田宏
宮城控訴院長　石井豐七郎
海軍大將　井出謙治
廣島地方裁判所長判事　伊藤久次郎
衆議院議員　磯部庸幸
貴族院議員　絲原武太郎
東北帝國大學教授　長谷部言人
第一師團長陸軍中將　畑英太郎
上田蠶絲專門學校長　針塚長太郎
近衞師團長　陸軍中將　長谷川直敏
侯爵　蜂須賀正韶
東京帝國大學教授　文學博士　春山作樹
判事　馬場愿治
橫濱市港灣部長　原靜雄
大阪商科大學教授　花田大五郎
仙臺高等工業學校長　新保德壽
退役陸軍中將　男爵　西島助義
大禮使事務官　西山左內
海軍大佐　新納司
第十師團長　本庄繁
海軍軍醫中將　醫學博士　本多忠夫
宮內省御用掛久邇宮宮務監督陸軍大將　本鄉房太郎
陸軍中將　星野金吾
復興局長官　堀切善次郎
熊本稅務監督局總務部長　林泳孝
稅務監督局書記官　寶來龜四郎
男爵　本多政樹
海軍大學校教官海軍教授　細川源三郎
北海道廳內務部長　細川長平
元帥海軍大將　床次竹二郎
遞信書記官　伯爵　東鄉平八郎
海軍中將　富安謙次
海軍兵學校長　東鄉吉太郎
海軍中將　鳥巢玉樹
伯爵　德川達孝
近衞步兵第一聯隊大隊長陸軍步兵少佐　藤堂高英
子爵　李厚榮
京都帝國大學教授　大塚要
正五位勳三等　大谷嘉兵衞
札幌地方裁判所檢事　男庭善之助
陸軍中將　久保利武
陸軍大將　小野寺重太郎
關東廳事務官　尾野實信
檢事　小川順之助
內務書記官兼內務大臣秘書官　大倉鈕藏
陸軍獸醫總監　大島辰次郎
岡田勝男

造神宮技師　大江新太郎
第二艦隊司令長官海軍中將　大谷幸四郎
高知縣知事　大島破竹郎
遞信省經理局長　大橋八郎
海軍省副官　海軍大佐　小槇和輔
海軍大尉　小島秀雄
比叡艦長　海軍大佐　大野寬
平壤覆審法院長　岡本至德
中華民國特命全權公使　汪榮寶
全羅北道知事　渡邊忍
陸軍中將　渡邊滿太郎
和田純
渡邊暢
廣島市長　川淵龍起
侍從次長兼皇后宮大夫　河井彌八
千葉縣會議長　川口爲之助
秋田縣會議長　片野重脩
海軍中將　川原袈裟太郎
從四位勳四等　河原作
內務技師　片山貞松
靜岡地方裁判所長　柏木五百次郎
海軍中佐　粕谷義三
加藤正
金澤正雄
河野秀男
川島令次郎
樺山愛輔
吉松茂太郎
吉田熊次
吉野圭三
吉松憲郎
田村新吉
高橋文之助
田中盛秀
竹下勇
玉蟲一郎
高羲敬
谷口留五郎
高山公通
武田秀雄
男爵　高千穗宣麿
瀧正雄
高島彌三
谷口尙眞
田中千吉
種子田右八郎

岐阜縣知事
會計檢查院部長
宮中顧問官東伏見宮宮務監督　伯爵　川島令次郎
貴族院議員　樺山愛輔
海軍大將　吉松茂太郎
東京帝國大學教授　文學博士　吉田熊次
遞信書記官兼遞信大臣祕書官　吉野圭三
貴族員議員　吉松憲郎
判事　田村新吉
海軍中將　高橋文之助
軍事參議官海軍大將　田中盛秀
第二高等學校長　竹下勇
朝鮮總督府中樞院顧問　伯爵　玉蟲一郎
陸軍中將　高羲敬
海軍中將　谷口留五郎
高山公通
武田秀雄
男爵　高千穗宣麿
檢查官　瀧正雄
吳鎭守府司令長官　海軍大將　高島彌三
大連民政署長　谷口尙眞
海軍造兵中將　田中千吉
種子田右八郎

陸軍大將　田中弘太郎
特命全權大使　田付七太
貴族院議員　添田壽一
男爵　園田武彥
簡易保險局長　園田榮五郎
貴族院議員　津久居彥七
關東廳高等法院長　土屋信民
衆議院議員　名川侃市
海軍中將　中島與曾八
長岡外史
長岡芳子
來次六雄
主膳監　白井巖
錦鷄間祇候常任幹事　宇佐美勝夫
資源局長官　上郎清助
貴族院議員　梅小路定行
子爵　內野仙一
防疫課長內務技師　野田菅麿
熱田神宮宮司　能勢萬
判事　倉知鐵吉
貴族院議員　陸軍中將　黑崎延次郎
陸軍科學研究所長　草場林五郎
京城覆審法院檢事長　久能司
陸軍中將　松本整之亮

海軍大將　黑田英雄
男爵　山下源太郎
海軍中將　山路一善
麝香間祇候貴族院議員　伯爵　柳原義光
警視廳警部　柳瀨芳松
和歌山縣警部補　山崎三郎
勳三等　山口熊野
同　矢野清史
男爵　安保清種
軍事參議官海軍大將　山本開藏
海軍造船中將　矢野愼治
札幌地方裁判所長　矢野貫城
彥根高等商業學校長　山本直太郎
遞信省郵務局長　男爵　益田兼施
陸軍大將　町田經宇
錦鷄間祇候　法學博士　松井茂
松井直平
勳一等　松本重威
同　人夫
熊本遞信局長　牧野寶一
海軍大尉　松尾實
仙臺遞信局長　前田直造
松本整之亮

北海道會議長　前田駒次
海軍省建築局長海軍技師　眞島健三郎
朝鮮總督府中樞院參議　元應常
大邱覆審法院長　深澤新一郎
海軍省人事局長　海軍少將　藤田尚德
貴族院議員　福永吉之助
ウヰルヘルムフオンシヨウ
貴族院議員　男爵　福原俊丸
衆議院議員　二見甚郷
陸軍航空本部技術部長　陸軍少將　福井四郎
陸軍少將　古田喜久哉
貴族院議員　男爵　福島四郎
廣島地方裁判所檢事正　小鹽八郎右衞門
會計檢査院書記　古森幹枝
衆議院議員　小林惠祐
同　小山倉之助
名古屋稅務監督局長　小池仁郎
東京帝國大學名譽教授　丘藤春臺
貴族院議員　小藤文次郎
判事　江木翼
和歌山縣警部　遠藤忠次
エミイルトラベルシニ
寺澤武兵衞

檢事　寺島小五郎
廣島遞信局長　淺野平二
京都地方裁判所豫審判事　淺沼猪助
內務技師　工學博士　安藝杏一
陸軍砲兵大佐　青木政喜
獨立通信社長　阿部鶴之輔
農林政務次官　東武
海軍大將　有馬良橘
赤池濃
貴族院議員　青木周三
衆議院議員　青山憲三
仙臺地方裁判所長　淺沼彦一郎
秋山雅之助
關東廳長官祕書官　安藤明道
山梨縣會議長　齋木逸造
伯爵　酒井忠良
關東廳遞信局長　櫻井學
北海道長官　澤田牛麿
大邱覆審法院檢事長　境長三郎
佐々木勇之助
海軍省軍務局長　海軍少將　左近司政三
男爵　阪井戒爾
海軍中將　阪本一

大連商工會議所會頭　勳一等　齋藤半六
神宮大宮司　佐藤至誠
貴族院議員　伯爵　三條西實義
同　阪本彭之助
大禮使新聞係　澤山精八郎
本原耕三郎
男爵　毛利元良
陸軍步兵少佐　埜本正一
海軍中將　森山慶三郎
子爵　毛利元恆
大藏書記官　關原忠三
貴族院議員　關直彥
貴族院書記官　瀨古保次
東北帝國大學教授　關口蕃樹
衆議院議員　菅原傳
海軍軍醫中將　鈴木重道
海軍少佐　鈴木義尾
海軍軍令部長　海軍大將　鈴木貫太郎
海軍少將　鈴木一馬
陸軍中將　木林浩吉
資源局技師　柚原完藏
男爵　肝付兼英
湯淺倉平

神戶稅關監視部長稅關事務官　關田丘造
衆議院議員　美濃部俊吉
會計檢査院長　水久保甚作
海軍法務官　水町袈裟六
廣島控訴院檢事長　宮下道三郎
南谷知悌
海軍少將　宮さの
三村錦三郎
侯爵　四條隆愛
衆議院議員　清水德太郎
陸軍步兵少佐　莊司博
朝鮮忠淸南道知事　申錫麟
陸軍中將　志岐守治
男爵　斯波忠三郎
大湊要港部司令官　海軍少將　島祐吉
北海道札幌師範學校長　柴垣則義
東京府知事　平塚廣義
陸軍步兵大佐　平松英雄
子爵　樋口誠康
中外新報京都支局長　平井確
江原道知事　俞星濬
貴族院議員　土田萬助
陸軍軍醫總監　鶴田禎次郎

貴族院議員　中村純九郎
　　子爵　南部利克
平壤覆審法院部長　永島雄藏
宮中顧問官　長崎省吾

第六節　案　内

一　一般案内

數千の參列者と數百萬の一般入洛者を迎ふる本市は、接待係中に特に宿舍係、案内係をおきて遠來の參列者竝に拜觀者に便宜を與ふべく係員は眞に東奔西走に努めたりしが、分けて案内事務は大禮中終日終夜に亙りて引續き入退京者を取扱ふべき頗る繁劇の事務にして、係員は實に忙殺を極めたるなり、殊に多數人の中には思想の混濁せるもの公徳を辨へざるもの等ありて前記警備隊員と共に中々の困難を忍びしことも屢々なりき、幸に一片の支障をも來さずして無事結了せるに至れるは全く係員竝に市民赤誠の結晶ともいひ得らるべし。

一、京都驛前案内所建設竝に經營

本市は市の咽喉部ともいふべき京都驛前の大廣場を選びて先づ相當なる案内所を設くることゝし、本府大禮事務局と協議の上次の如き施設をなせり。

本出張所は本府大禮事務局と共同にて建設するものにして建設費は府市に於て折半す。

大禮期間中は府市共同にて事務を處理し期間經過後は建物を本市に繼承し專ら本市奉祝案内係事務所として之を經營す、本出張所の名稱開閉の時機設備所要人員左の如し。

一　名　稱

大禮期間中ハ「京都府市大禮事務局出張所」ト稱シ期間經過後ハ「京都市大禮奉祝事務局案内所」ト稱ス

一　開閉ノ時機

昭和三年十一月一日ヨリ昭和四年三月三十一日ニ至ル

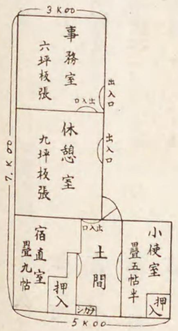
一　設　備

(一)　特設電話ノ架設
(二)　自動車ノ備付

一　所要人員

(一)　專任事務員　二　名
(二)　兼任事務員　十二名　何レモ京都驛前無料休憩所兼務
(三)　使　丁　二　名

大禮關係府市吏員出張所平面圖



二、案内事項

一般入洛者市内案内事務

(一)　市内簡易地圖ノ發行
(二)　宿舍ノ斡旋（宿舍係ト連絡）
(三)　名所案内人ノ紹介
(四)　車、自動車ノ斡旋
(五)　博覽會ノ案内
(六)　市内電車乘車券ノ發賣

同上市外案内事務

(一)　洛外名所略圖發行（宇治、大津、八瀨、比叡山、奈良方面）
(二)　市内及附近（嵐山）名所舊蹟ノ案内
(三)　二條、桂、修學院各離宮拜觀者ノ便宜（交通上）
(四)　天ノ橋立見學團ノ組織

三、無料休憩所の設置及經營

(一)　無料休憩所設置に關し交渉の件

一　鐵道用地の借入

禮第九號

年　月　日　市長名

大阪鐵道局長　村上義一宛

第六節　案　内

本年十一月御擧行相成ルヘキ御大禮式場踏拜觀ノ目的ヲ以テ入洛スル學生生徒其他一般入洛者ノタメ左記要項ニ依リ無料休憩所ヲ設置致度候條同敷地トシテ京都驛構内別紙圖面ノ箇所御貸與相成度此段及御願候也

追テ別圖ノ場所御差支有之候ハヾ適當ナル箇所御指定相願度候

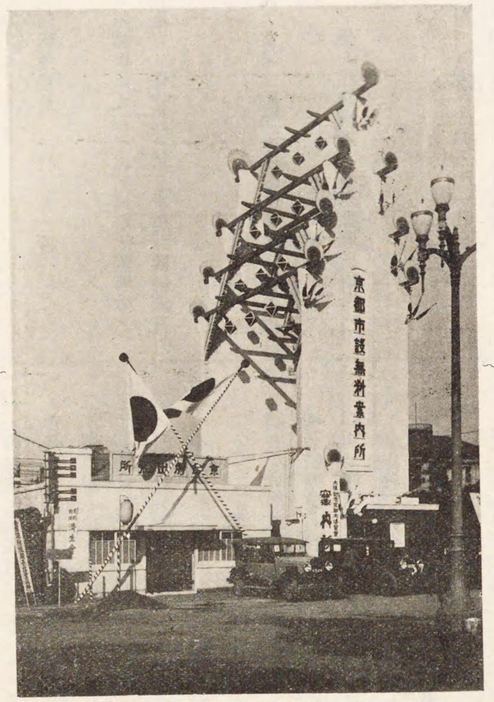
記

一　借地坪數　貳百坪
一　借地期間
　自昭和三年十二月一日
　至　四年三月卅一日
一　構　造　天幕張
一　設　備　電燈、水道、床几五十脚、湯茶用具一式、揭示板等ヲ備付ク
一　管理方法　京都市大禮奉祝事務局接待部案内係ニ於テ管理シ事務員二名使丁二名ヲ置キ期間中每日午前七時ヨリ午後十時マテ開所ス

禮接第一〇號

年　月　日　京都市長　土岐嘉平

京都驛長宛
二條驛長宛



京都驛前案内所

大阪保線事務所京都區主任宛

本年十一月御擧行相成ルヘキ御大禮式場跡拜觀ノ目的ヲ以テ入洛スル者ニ對シ無料休憩所設置ノタメ鐵道用地借用致シ度別紙之通願書提出致シ候就テハ至急御許可相成樣御高配相煩シ度此段及御依頼候也

大鐵禮辰第三七三號
昭和三年十一月二十九日

大阪鐵道局長　村上義一

京都市長　土岐嘉平殿

本年九月二十八日及十月二十五日附禮接第九號ヲ以テ無料休憩所敷ノタメ管下京都停車場用地ノ一部使用方ノ件左記ニ依リ承認致候條請書提出相成度

記

一　用地使用竝施設物ニ就テハ凡テ當局大阪保線運輸兩事務所長ノ指令ヲ受ケラルヽコト

二　使用目的ハ無料休憩所用トス、但シ建物構造ハ現京都府出張所ハ其儘トシ其他ハ簡易ナル天幕張トス

三　使用地積ハ五百三十平方米トス

四　使用期間ハ昭和三年十二月一日ヨリ翌年三月三十一日マデトス

五　曩ニ京都府ニ於テ移植シタル使用地域内ノ松樹ハ同府ト打合セノ上前記保線事務所長ノ指示ニヨリ返地ノ際貴市ニ於テ復舊移植セラルヽコト

六　前項ノ場合樹木復舊、移植後一ケ年以内、枯死シタルトキハ貴市ノ費用ヲ以テ之ニ代ル樹木ヲ當局ノ選定スル所ニヨリ更ニ植付ケセラルヽコト

七　京都府ニ於テ撤去シタル使用地域内ノ柵垣ハ返地ノ際前記保線事務所長ノ指揮ニ依リ原狀ニ復舊セラルヽコト

八　期間後ハ直チニ施設物ヲ取除キ土地ヲ原狀復舊ノコト

（一）　宮内省ヘノ出願交渉

一　第二朝集所借用方交渉

市長ヨリ宮内大臣宛請願書提出認可ヲ受ケタリ

二　御門鑑下付方交渉

市長ヨリ内匠寮出張所長宛出願

市吏員用　七枚
小者用　五〇枚

（二）　無料休憩所ノ經營

1　京都驛前無料休憩所經營

一　建物竝ニ設備

イ　構造　天幕張、梁間二十間桁行五間
ロ　坪數　百坪
ハ　設備　床几五十臺、湯茶用具一式

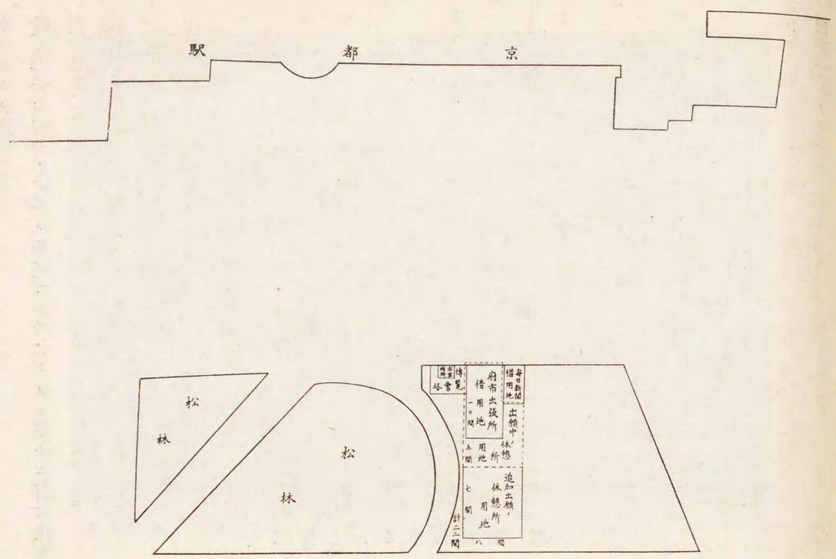
一　接待

休憩人ニ對シ湯茶ヲ供ス

一　要員

專務事務員　二名
使丁　二名

何レモ出張所要員ト兼務



2、二條驛前無料休憩所

一　建物竝ニ設備

イ　構造　天幕張、梁間十間桁行五間
ロ　坪數　五十坪
ハ　設備　床几二十五臺、湯茶用具一式

一　接待　同前

一　要員　專務事務員一名　使丁一名

3　御苑内無料休憩所

第二朝集所ヲ借用シテ之ニ充ツ

要員ハ專務事務員一名、使丁一名、掃除夫二名

接待　同前

（四）　御苑内式場拜觀ニ關スル事務

1　京都驛前案内所及無料休憩所ノ設置

2、二條驛前案内係員出張

3　御苑内ニ無料休憩所設置

四、連絡事務

一　内記係トノ連絡

大禮參列員竝ニ貴顯ノ入退洛ニ際シ必要アル場合ニ内記係ト連絡ヲハカレリ

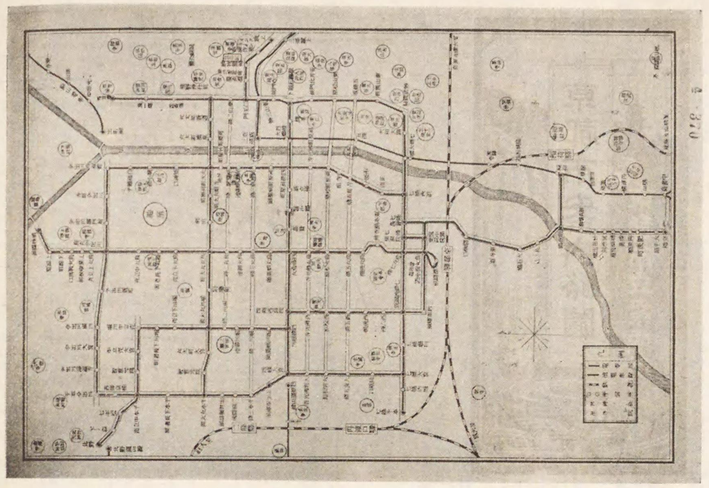
一　接待係トノ連絡

本市ニ於テ特ニ接待スベキ入洛者アリタル場合接待係ト連絡ヲハカレリ

一　宿舍係トノ連絡

殷入洛者中宿舍ノ紹介ヲ希望スル者アリタル場合ニ宿舍係ト連絡ヲハカレリ

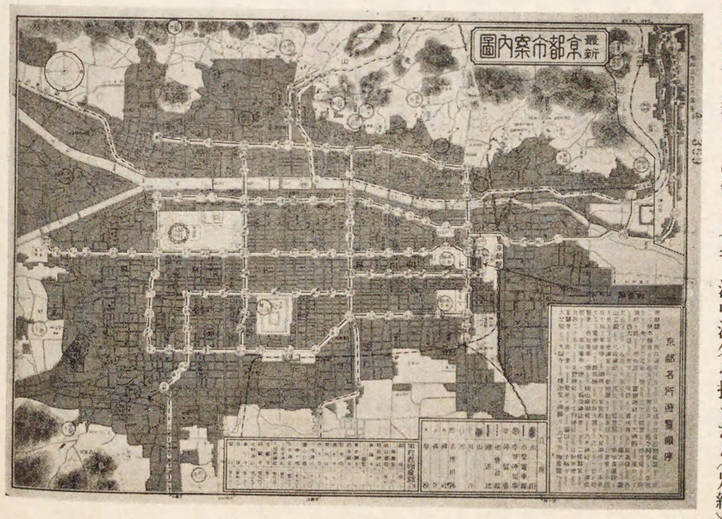
一　博覽會トノ連絡



配付したる案内地圖（其一）

博覽會觀覽客ニ對シテハ博覽會各係ト連絡ノ上之ニ便宜ヲ與ヘタリ尙一般入洛者に對しては特に見易く洛中洛外を描きたる（別紙）案内地圖を作製し適當に次の如く配付したり。

一　洛中簡易地圖發行　三十萬枚印刷

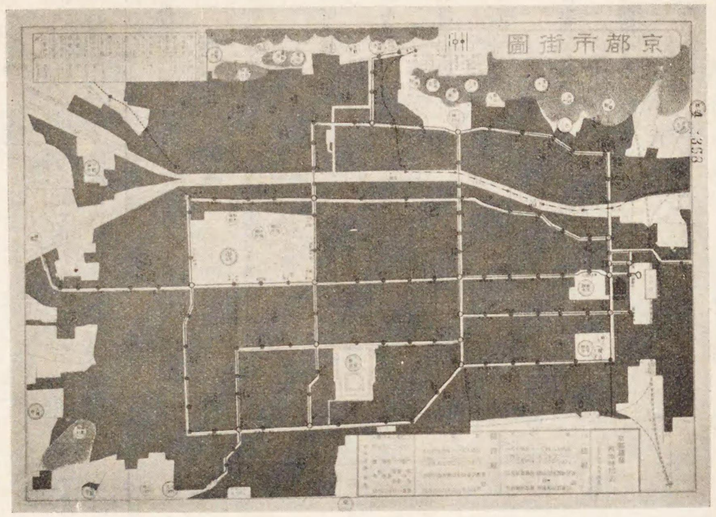


配付したる案内地圖（其二）

二　洛外案内簡易地圖發行　八萬枚印刷

三　案内人ノ斡旋

入洛者中案内人ヲ要求スル者ニ對シテハ豫メ案内人組合ト交渉シ置キテ之ガ斡旋ヲ爲ス



配付したる案内地圖（其三）

二　博覽會案内

本市が大禮記念として開設せる博覽會は空前の大規模を立てたる丈けに内外産業文化の權威を蒐むるに至り、未曾有の大盛況を呈して廣く一般入洛者を歡迎せしは元よりなるが特に大禮參列員の觀覽に供すべく計畫し茶菓券竝に優待券一枚を添付して次の案内狀に發送したり

謹啓本市主催大禮記念京都大博覽會開催致居候ニ就テハ左記日時中隨時御觀覽ノ榮ヲ賜度此段御案内申上候　敬具

昭和三年十月二十五日

大禮記念京都大博覽會長
京都市長　土岐嘉平

御案内日時	十一月九日	自午前八時　至午後九時
	十一月十三日	自午前八時　至午後九時
	十一月十五日	自午前八時　至午後九時

以上案内期日（十一月九日、十三日、十五日）中に來觀せられし數は約二千餘名に上り、案内狀發送數二千七百に對し殆んど同數に近き觀覽者を得たり。

第七節　宿舎に關する事項

一　宿　舎

大禮參列の爲入洛せられたる各　皇族殿下の御旅館を始め奉り顯官貴賓の各宿舎は、多くは本市内に於ける名門の邸宅若くは別邸を以て當てられたり、市長又は市長代理は連日に亙りて一々御機嫌を奉伺し或は宿舎を訪問して旅情を慰むるところありたり。

各大臣宿舎

河原町通今出川　藤田別邸（電上八四八）
　内閣總理大臣兼外務大臣　男爵　田中義一
河原町白梅圖子　三谷興一郎（電上九七五）
　鐵道大臣　小川平吉
麩屋町二條下ル　澤文（電上三二―三三）
　海軍大臣　岡田啓介
柳ノ馬場通四丁目　近太（電下一四二九）
　陸軍大臣　白川義則
河原町二條　田中市藏別邸（電上一四一四）
　商工大臣　中橋徳五郎
烏丸上長者町上ル　長瀬傳三郎（電西陣七八一）
　内務大臣　望月圭介
岡崎圓勝寺町　藤井善助（電上四―五）
　大藏大臣　三土忠造
木屋町三條上ル　大千賀（電上二一二六）
　農林大臣　山本悌二郎
東山總新門前　自邸（電中一一二一―一一二二）
　遞信大臣　久原房之助
二條通木屋町東入鉾田町五四二　山内宇三郎（電上二三二〇）
　司法大臣　原　嘉道
清水町三丁目平井仁兵衛（電中二三七八）
　文部大臣　勝田主計
　其他は省略

二　宿舎係

御大典時及其の前後を通じて本市に入洛する個人又は諸團體は日を追ふて益々激增するの傾向を帶び、隨つて宿舎の斡旋を依頼し來るもの少なからず、されば本市は準備の爲左記事項を調査したる上之が實施方法を講究し以て萬遺漏なきことを期したり。大要次の如し

一、市内收容力調査

一、旅館收容力

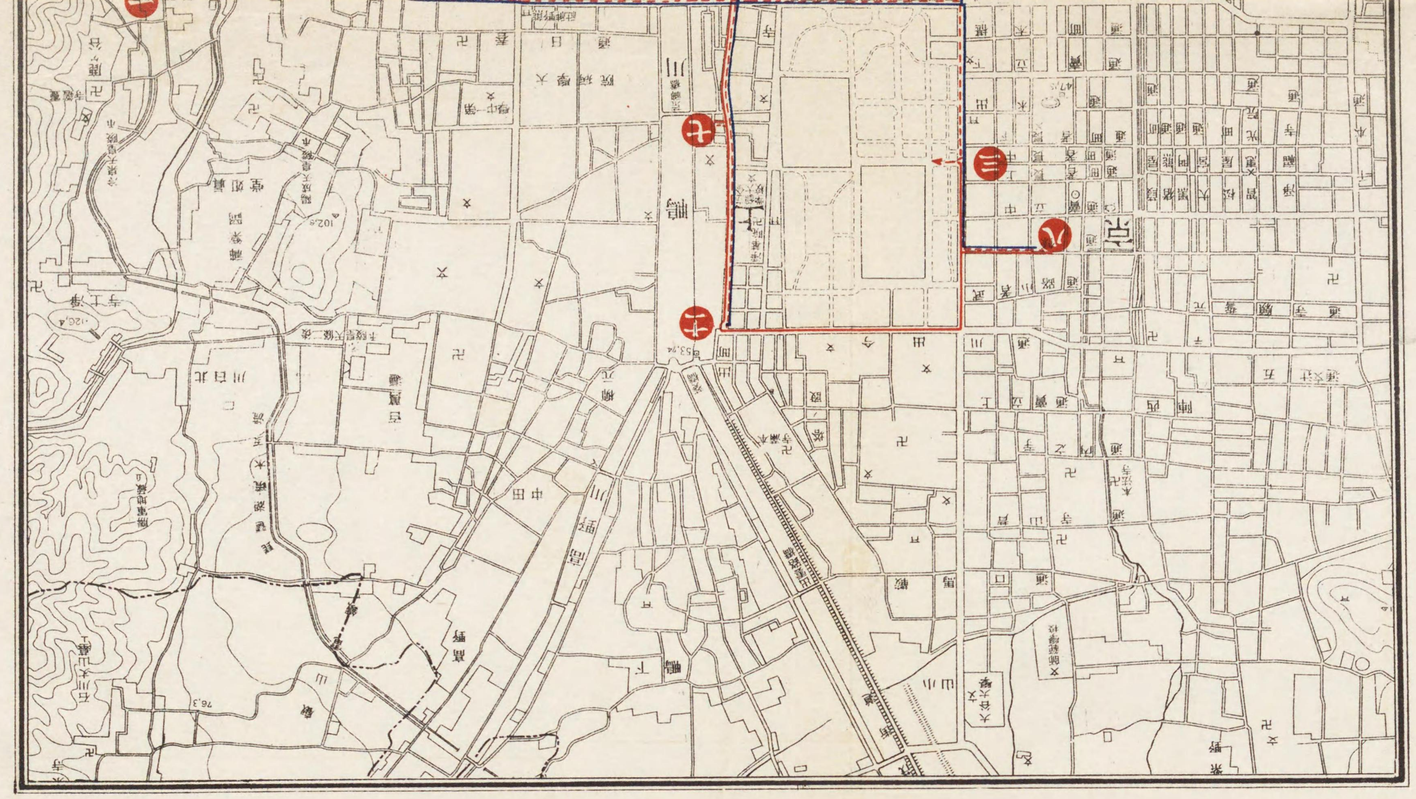
市内警察署を一區域ごし總べての旅館につきて之が營業主、所在地、等級、客室數、疊數、收容人員等詳細調査の上臺帳を調製したり。

一、旅館數　一、〇四四
一、疊數　五〇、六三七
一、收容人員　五〇、〇〇〇

二、市内寺院其他の收容力

前記旅館のみにて宿舎の不足を生ずる場合に備ふるため、市内全寺院、各學校、工場等の寄宿舎竝に各種會館、集會所、民家等の開放又は提供を求め、豫め之が承諾を得たるもの、室數、疊數、收容人員、寢具賄の有無竝に之が使用料等を調査し臺帳を調製したり。

種別	室數	疊數	收容人員	賄の有無
寺院	四五〇	二、七〇〇	一、三五〇	有
其他	三七〇	二、五〇〇	一、七五〇	有

皇族御旅館幷御通路

	御旅館所在地	御旅館主名
殿下	京都市上京區龜谷宮前町	男爵　住友吉右衞門別邸
殿下	下京區紙園町南側小字女御畑	男爵　大倉喜七郎別邸
殿下	上京區烏丸通上長者町下ル	後川文藏邸